人民なれば、其氣質一般に平靜なり、例外としては雅州附屬に土司と稱する獰惡なる蠻族あるも、こは普通蜀人を以て見る可らず、其外國人に對する態度も、先づ安穩の方なり、これ土地僻遠、交通困難にして、從來外人と接觸する機會少く、且つ長江沿岸、沿海諸省の如く葛藤を惹起したるためし無きに由らん、旅行家探檢家等に取りては、鑛苗搜索、測量的探檢の如き、彼等の反抗心を挑發する擧動に出でざる限り、恐くは襲擊迫害を被ること無るべし、然るに蜀に生れたる蘇東坡は、口を極めて、蜀人の陋弊を論じたることありと、知らず、坡が憤るところ、何の點に在るや、

東蜀と坡人

余は又た物質上に形れたる蜀人の風雅を見たり、近く成都に就きて之を述ぶれば、青羊宮に開く花市、草堂人日の參拜、四月八日の錦水に於ける放生會、廟祠園池の布置、盆栽の贈答等、彼等雅想の發現として觀れば、觀られざるに非ず、

風雅

革命思想は全然これなしとは謂ふべからざれども、未だ唱首となりて、天下に叫びし者あるを聞かず、廣東湖南地方にて、如何に騷ぎ居るとも、蜀人は格別其波動を被らざるが如し、蜀の富は彼等をして其堵に安んぜしむるに足り、蜀人の智は、容易に目的の達せられざる革命を唱へ、若くは之に和するの急務ならざるを知るなり、

革命思想司老會

哥老會は、本邦人間には小說的事實として傳へらるれど、本國にては、左程の取沙汰も無く、官民共に措いてこれを顧みず、其徒は四川にも、成都を始め、各地に散居すれど、無賴の烏合のみなれば、そが如何なる野心を抱くにせよ、思想界には、何の輕重するところもあらざるなり、

成都日報

成都の新聞雜誌

四川に於ける新聞紙は、元と重慶にて、本邦人竹川某支那人劉某の共同經營に屬する重慶日報と名くるもの一種ありて、成都は全省の首府たるに拘はらず、未だ何の計畫もなかりしが、明治三十八年の初に至り、始めて成都日報と題する日刊新聞を發刊せり、其規模の小、固より言ふまでもなく、主筆及び一二の記者官報書局內の一隅に在りて編輯に從事し、同局の器械を以て印刷せり、紙幅の狹小、記事の簡疎恐くは支那新聞中の最小なるものなるべし、然れども、遠く重慶日報と對する外、他に一の競爭なきと、定價の月額僅に百五十文なる爲め、發行後幾くならずして、成都は勿論、地方の重なる部分に、多數の購讀者を作り、余が出發時に及んでは、重慶日報も廢刊となり居たれば、四川新聞の名は、獨り成都日報に歸するに至れり、雜誌は前記の四川學報と、他に四川官報、成都啓蒙通俗報との三種あれども、一般的のものは、未だ一も創設せられざりき、

成都の雜誌

寓蜀日報

附記す、重報日報は、四川第一の商業地にて發行せられ、且つ本邦人も加はりけることゝて、紙幅も大に、記事も豐富にして、成都日報抔とは、同日の論にあらざりしが、治安妨害の記事を掲げし廉を以て、痛く四川總督の怒に觸れ、遂に發行禁止となり、劉某は久しく成都の獄に繫がれ、危く死刑に擬せられんとせしを、特に一等を減じ、青海に流竄せられたり、

成都の漢書

個人の藏書は別論なり、賣品としての漢書は、新古となく大抵成都に集湊せり、勿論各地方にも書肆多けれども、余が歷訪したるだけにては、悉く雜書林にて、一瞥に値するなきもの比比然り、成都といふも、省內に於てこそ見るべきものあれ、若し之を武昌、蘇杭州、南京、廣東、北京、西安等に比せば如何、余は其書林の數、書籍の量及び物質の善惡に於て、未だ成都を以て、支那最大省の首府、古來文學を以て聞ゆたるの名に稱はざるものと思ふなり、

地方の書林

學道街

書肆の最も叢れるところを學道街と爲す、全街每戶書林といふも不可無く、成都の圖書を見んとする者は、必ず此街に至るなり、街中志古堂といふ一店あり、店構は微

志古堂

微たれども、成都第一の古書林にして、注文さへせば、一通りの書は爰にて調せらるべし、其主人は相當の文學もあり、筆談の如き、稍滯せず、且つ其板元の所在に明にして、問に應じて答ふること、諸を掌に指すが如し、余は成都に在る間、暇あれば、此店に遊び、此主人と交談するを以て、一閑適とせり、學道街以外には、別に書林町と稱すべきところは無きも、各街若干戶の漢籍專門の書林あり、又骨董店にして、旁ら書畫碑帖を鬻げるものあれば、亦た書肆の一部と目するを得べし、又每夜東大街に開かる〻夜市（夜店）の古本店にても、零本斷冊の間に、時時佳書を發見するなしとせず、又每春城外青羊宮に開かる〻賽會なるものあり、重なる成都の書肆は、此會に於て觀ることを得ん、此外官營ともいふべき官報書局あり、尋常の漢書は、大抵網羅すれども、多く今板に屬し、且つ價格極めて低廉なるを以て、紙質印墨勢粗惡を免れず、

夜市

賽會

官報書局

成都の漢書は以上の諸處に就きて蒐集するなり、其版は概ね乾隆以後に屬し、明版の如き、十に一を見ず、況むや宋版に於てをや、乾隆以後といふも、乾隆版に至ては、亦た希覯とせざるを得ず、故に成都にて、鑑賞本珍本などは、先づ得易からざるものと知るべし。

成都に於て、尤も多く吾人の目に觸る〻ものは、虞道園全集、楊升庵全集、三蘇全集、張南軒全集及び李善注文選等と爲す、其絕えて見掛けざるは、通志堂經解、九經解の如

日本版の詩輯

き大部の經解類なり、其他普通の類、大抵求めらるべし、余志古堂に於て宋の嚴粲か詩輯を得たり、詩輯は世の知る如く、呂東萊か讀書記と並び稱せられ讀詩家の雙璧となすものにて、本邦幕府の時、某藩にて飜刻せり、今余か得たる書を見るに、字間處處鉤挑を存す、即ち紛ふ方なき、日本版なり、因て之を志古堂に質すに、版の日本版なると否とは知らざるが、此版、元と成都學政某の藏する所に係る、後齎して北京に至り竟に火に燒かれりといふ、想ふに何れの時にか、支那人の手に移りしを、其反點を削り去りたるものなり、今や則ち一炬烏有、痛惜の至りなり、

高等學堂の藏書樓

成都の書、言ふに足らず、しかも時ありてか好書を見る、唯だ其れ好書、常に逢ひ難し、其耳目に觸るゝに當りてや、須く直に買ひ取るべし、庶幾くは噬臍の悔を貽さゝらん、又宜しく徐に其價を商定すべし、操心執着せば、必ず買人の乘する所と爲る、

各學堂の藏書樓中、高等學堂藏書樓を以て最大と爲す、然れども圖書集成大小二部を除けば、其餘常冊のみ、堂、本と尊經書院の在るところ、書院の藏書舉げて之を收む、此中亦た珍籍といふものなし、

某藏書家

城內の某氏、數萬卷を藏する者ありといふ、嘗て人に示さゝると聞き、往き觀ざりき、今にして思へば、余輩外國人に對しては、其秘笈を開きしやも知れじ、當時試に之を訪はざりしは遺憾の事ども なり、

碑帖

光緒の初年、張之洞四川學政たり、蜀生の爲めに、輶軒語及び四川省城尊經書院記を著し、頗る學事を奬勵したれば、縱令其時を去る三十餘年を過ぐるとも、城中佳書の存せざる、此の如く甚しからざるべきに、如今曾て張氏提倡の蹤としも見ねざるは意外とせざるを得ず、

宋拓王羲之聖教序

成都の碑帖は、書籍に比して更に寂寞たり、其專售の舖といふもの、志古堂の西鄰なる劉姓あるのみ、劉姓鬻くところ、概ね陝西長安より齎すもの、而して殆と總てが、新拓にて、把玩に堪ゆるは極めて罕なり、蜀中の諸碑に至りては、蒐集甚だ懈れり、劉姓以外、表具屋、骨董店等に、叢帖單帖共、間ま少佳なるを發見することあり、個人には一二藏帖を以て聞ゆるものなきに非ず、前に記せし駱公祠の守者某の如き、其巨擘なり、余は屢ば駱公祠に赴きしが、常に其守者を訪ふの機會なかりき、客籍學堂監督丁昌燕といふもの、駐藏官に任せられ、其赴任前に當り、其藏宋拓王右軍聖教序を五百兩に、趙文敏が赤壁賦を三百兩にて讓るべき旨、成都日報に廣告したることあり、これ等は先づ余が滯在中出物の上乘なりしものなり、今左に藝苑雜考中の碑帖の一節を揭げ、以て同好の便覽に供す、

法帖之刻、始於南唐周密烟雲過眼錄載褚伯秀云、江南後主詔徐鼎臣、以所藏前代墨蹟入石、名昇元帖、此法帖之祖也、考劉跂暇日記、載淳化祖石刻云、馬傳慶說此帖、本唐保大年上石、國朝下江南得之、淳化中太宗令將書館所有、增作十卷、爲板本、然則淳化帖、本於南唐帖可知、而董其昌以澄清堂刻爲法帖之祖、然又謂澄清堂大王帖、亦如賀鑑清眞、下視王著、可容數等則澄清堂非淳化所祖、而所祖爲昇元帖矣、淳化帖用棗木板、藏於秘閣、每大臣登二府者、賜以墨本、歐陽修集古錄、禁中災、碑板被焚、遂不復賜、故人間以官法帖爲難得、其後模刻以傳者日多、有云、二王帖者、黃山谷云、元祐中、親賢宅從禁中、借板墨百本、分遣官僚、但用潘各墨、光輝有餘、而不甚黝墨、此即官法帖、而異其名、非別刻也、有云、太清樓帖者、徽宗以王著標題、多誤出御府、而今世所傳大觀帖、太清樓帖、自有二本、前代說者、誤合爲一、非也、又有太清樓續閣帖、蓋本元祐五年刻、至建中靖國元年、工畢至大觀三年、目其標題以爲續帖、則即一帖歷三時而三名也、又有紹興國子監帖、其首尾與閣本無異、當時御府拓者多用匠紙、字畫精神、極有可觀、淳熙修內司帖者、孝宗命刻於禁中、卷尾有修內司模刻上石字樣、復以續得唐朝遺墨蹟、刻爲淳熙秘閣續帖、屠隆考槃餘事云、兩帖工夫精緻、亞於淳化帖、後摹刻於紹興府學、亦名續閣亭、以其中有閣亭也、後遷潭州云、若夫閣刻私刻、始於潭帖、王佐云、淳化帖頒行潭州模刻一本、與絳帖雁行、是也、至仁宗朝、丞相劉沆、以所得太宗賜本、命僧慈昭、摹刻於京郡齋、謂之長沙帖、增入霜寒十七日、王濃顏眞卿等帖、而字有頗高、與閣本差不同、建炎中、守城者、碎以砲石、無一存矣、長沙帖之次、有劉丞相私第本、有長沙碑匠家本、有長沙新刻本、有三山木板本、有廬陵蕭氏本、又有黔江帖、秦子明爲長沙副將所刻、載入黔江紹聖院者也、絳帖者宋尚書郎潘師旦刻、用閣帖增入別帖、凡二十卷、其石比閣本高二字、師旦二子、析帖爲三、長者負官錢、沒入上十卷於絳州、絳守重刻下卷足之、爲東庫本、幼者重刻下十卷、亦足成一部、爲私本、靖康兵火、石並不存、曹士冕曰、世所傳絳帖、多東庫本、用日月光天德、山河壯帝居、太平何以報、願上萬年書、編號別有亮字、不全、與東庫本絕相似、但虛亮帖內、亮字無右邊轉筆、有新絳本、首尾規模、殷眼字號、並同東庫本、但字畫微局促耳、又有武岡本、碑段稍長、而日月等字、間於行中、又有武岡新本、即舊石二十卷、爲庸繆、人厭其清瘦、修而肥之、遂失本眞、又有賓州本、以新絳前十卷刻石、前有目錄、又蔡州摹刻上十卷、凡此皆絳帖之支派也、臨江戲魚堂帖、元祐間劉次莊以閣帖十卷、模刻於臨江、除去卷尾篆文、而增釋文、在潭帖之次、利州帖、四川總領權安節以戲魚堂帖、重刻於益昌、而釋文字畫、較大、泉帖、以淳化翻刻於泉州、北方印成本、每段自成一板、四圍皆空白、不施居線、而自然整齊、肅州本、明肅王世子所刻、西安本即以肅本翻刻、

潘氏本、潘九亮刻、顧氏本、顧中義刻、並刻釋文、考異最爲詳確、凡此皆閣帖之支流也、刻之最經者、莫如汝帖、黄伯思東觀餘論、王世貞弇州山人集、皆非之、刻之多者、莫如鼎帖、曾淳石刻、舖叙陳繹曾翰林要訣亦譏之、又名武陵帖、以刻於武陵郡齋、而名或又以爲絳帖則丙卷首載太宗御筆、言絳州而誤、此不察之誤也、自是而外、刻者紛紛、曰星鳳樓帖、宋尚書趙彦約刻、工而有餘、清而不濁、亞於太清樓續帖、曰玉麟堂帖、汴人吳居父刻、濁而不清、多雜米家筆仗、曰寶晉齋帖、宋曹之格模刻、曰百一帖、宋王曼慶模刻、曰澧陽帖、曰彭州帖、各以其地名之、曰甲秀堂帖、曰賜書堂帖、一爲宋宣獻公綏刻、一爲盧江李氏刻、就諸帖而論、澧陽石已散失、僅右軍數帖、彭州不甚精采、未堪比美、閣本百一、筆意清遒而刻手不精、賜書鐘鼎絶妙、而帖未佳、晉寶米帖甚多、於星鳳尚當爲子行、甲秀王顔頗富於衆人、尤極意擴摭、至於烏鎮帖、湖州烏鎮張氏、以絳閣二帖侵本、遂良工模拓亦有可觀、福清帖福溝氏家有板刻、帖閣四帖、得者往往冠名官帖、則其刻之高下、可知矣、群玉堂帖本韓侂胄、閱古堂帖、籍沒後始改今名、此不但前代墨最富、即宋人書亦多見於其中、臨池家所不可廢也、有明諸家、惟停雲帖、衡鑒既直、刻復精妙、迺徵仲父子所摹勒、不假匠氏之故、若董尚書戲鴻堂帖、僅存而目、絶少精神、徒以尚書名而重之、且大王烟堂帖亦戲鴻弟兄、小王烟堂帖及百石堂帖、則皆董氏之書也、近人之刻快雪堂帖、雖稱佳品、勃海藏眞帖、尚非雁行、鬱岡齋帖、尤瞠乎後矣、

此中余成都に於て見るところ、淳化、星鳳、澄清、戲鴻の數種に過ぎず、皆凡刻なり、

蜀中の古碑

蜀中の古碑は、成都に少くして、寧ろ地方に存するもの多きを占む、而して其所在は幾ど各府州縣に亘れり、然れども、叢山峻壑の間、或は梵宇禪林の中、雨の淋し、日の炙するに委せる有樣なれば、其完全なるもの、蓋し甚だ希なるべし、其時代は漢に掛りて、現代に至る、若し此間を通して算すれば、優に千餘方を超ゑん、然れども、明以降の建立に係るもの、言ふに足らず、今試に漢後元前に屬するものを擧ぐれば、數に於て實に二百五十種に餘れり、其中名存して實なきものあり、石缺けて文足らざるものあり、字殘して讀むべからざるものありと雖も、蜀の碑に富むや、決して江北諸省に讓らず、但だ從來訪碑家、概ね秦晉齊魯に偏せるが爲め、蜀碑を以て等閑に付せるのみ、蜀の碑を記せるもの、宋の王象之著蜀輿地碑記目(金華叢書及び函海に收む)清の李調元が蜀記補(函海に收む)網羅遺さず、その名目、所在を記し、又文字の概略を載す、須く本書に就き其詳細を知るべし、

蜀碑の數

蜀輿地碑記目

蜀碑記補

余蜀碑に於て探蒐尤も務めず、得るところ僅に王稚子闕銘、丞相祠堂碑記、隋龍山公

夔府の隋碑

墓誌、杜公祠の禹碑等に過きず、龍山公墓誌、夔府城中に在り、蜀輿地碑記目及石索等未だ之を載せず、此碑咸豐中夔府城修繕の時、土中より掘出したるもの、左下一角缺損して、所在不明なりしを、百方捜索の末、之を發見したりと云ふ、其字遒勁古撲、六朝末造有隋一代の筆色を見るべし、識者以て鍾太傅に似たりと爲す、惜くは、其姓氏并に書者を記さず、

景教碑

太秦景教流行中國碑は長安に在り、此碑の歴史上、并に其シリア字の、博言學上極めて貴重すべきこと、世の知るところなり、從來本邦發行の東洋史書中、間ま其縮圖を挿入したるものあれど、印版小に過き、且つ多くは其一部分に止るを以て、爰に特に其全幅及び碑側をも掲げたり、蜀碑とは何の交渉なけれども、本書を公にするの序を以て、附載するものなり、(此碑は西安史蹟を探檢せられたる和田喜八郎氏が贈らるゝところ)

成都に珍器なし

成都の骨董

成都の骨董は、西安咸陽等のそれに比し、總べての點に就き、大に遜色あり、否寧ろ比較にはならざるなり、これ歴史的事實の彼より大に乏しきと、明末張献忠の亂の爲めに燒失或は散亡せられたるに由らんされば成都に於て周秦漢唐の遺寶を獲ん

隋龍山公墓誌

大隋開府儀同三司龍山公墓誌

公諱質字弘直青州樂安人也蓋帝嚳之後司徒公倉之苗裔隨官巴庸即此民復人矣祖齊巴州刺使父梁授巴東建平二郡大守公世值艱危早失庭訓志性剛毅諒直淵深周朝授大都督龍門公選補兼儀同領鄉團五伯人守隘三硤大象二年蒙授龍山縣開國公開皇九年從元帥越國公平陳第一勳蒙授開府儀同三司增邑肆佰戶粟帛五千段非夫志氣熟能處危亂之間成功如斯之盛者乎且譽善無徵昊天不弔歲在戊午七月二十日遘疾喪于家春秋六十七今啓葬豆蒼之野鐫口頌其德云爾咄哉君子宗家之睦廼武廼口口在陸志懷慷慨少闕過庭銜冠臨敵吳越廓清積世惟公三巴豪傑似玉之陣如淵之徹如何不弔遽奄春陽酸辛悲勖灑淚千行開皇二十年歲次庚申十二月丙辰朔四日乙未

最敎流行中國碑

景教流行中國碑頌幷引

太秦寺僧景淨述

粤若常然眞寂。先先而无元。窅然靈虛。後後而妙有。惚玄樞而造化。妙衆聖以元尊者。其唯我三一妙身无元眞主阿羅訶歟。判十字以定四方。鼓玄風而生二氣。唅空易而天地開。日月運而晝夜作。匠成萬物。然立初人。別賜良和。令鎭化海。渾元之性。虛而不盈。素蕩之心。本無希嗜。洎乎婆殫施。妄鈿飾純精。間平大於此是之中。隤冥同於彼非之內。是以三百六十五種。肩隨結轍。競織法羅。或指物以託宗。或空有以論二。或禱祀以邀福。或伐善以矯人。智慮營營。恩情役役。茫然無得。煎迫轉燒。積昧亡途。久迷休復。於是我三一分身。景尊彌施訶。戢隱眞威。同人出代。神天宣慶。室女誕聖於大秦。景宿告祥。波斯覩耀以來賓。圓廿四聖有說之舊法。理家國於大猷。設三一淨風無言之新教。陶良用於正信。制八鋭之度。鍊塵成眞。啓三常之門。開生滅死。懸景日以破暗府。魔妄於是乎悉摧。棹慈航以登明宮。含靈於是乎既濟。能事斯畢。亨午昇眞。經留二十七部。張元化以發靈關。法浴水風。滌浮華而潔虛白。印持一字。融四照以合無拘。擊木震仁惠之音。東禮趣生榮之路。存鬚所以有外行。削頂所以無內情。不畜臧獲。均貴賤於人。不聚貨財。示罄遺於我。齋以伏識。而成戒以靜慎。爲固。七時

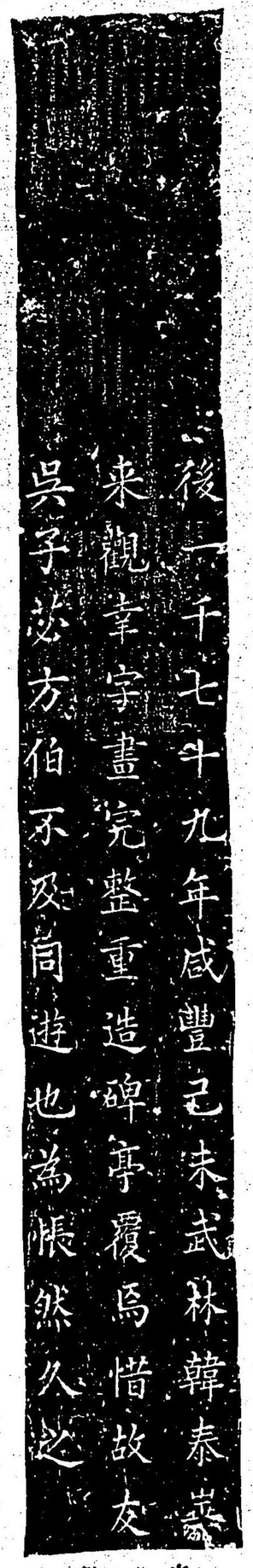
禮讃。大庇存亡。七日一薦。洗心反素。眞常之道。妙而難名。功用章昭。强稱景教。惟道非聖不弘。聖非道不大。道聖符契。天下文明。太宗文皇帝。光華啓運。明聖臨人。大秦國有上德。曰阿羅本。占青雲而載眞經。望風律以馳艱險。貢觀九祀。至於長安。帝使宰臣房公玄齡。總仗西郊。賓迎入內。翻經書殿。問道禁闈。深知正眞。特令傳授。貢觀十有二年秋七月。詔曰。道無常名。聖無常體。隨方設教。密濟群生。大秦國大德阿羅本。遠將經像。來獻上京。詳其教旨。玄妙無爲。觀其元宗。生成立要。詞無繁說。理有忘筌。濟物利人。宜行天下。所司即於京義寧坊。造大秦寺一所。度僧二十一人。宗周德喪。青駕西昇。巨唐道光。景風東扇。旋令有司將帝寫眞轉模寺壁。天姿汎彩。英朗景門。聖迹騰祥。永輝法界。案西域圖記及漢魏史策。大秦國南統珊瑚之海。北極衆寶之山。西望仙境花林。東接長風弱水。其土出火絨布返魂香明光珠。夜光璧。俗無寇盜。人有康樂。法非景不行。主非德不立。土宇廣濶。文物昌明。高宗大帝。克恭紹祖。潤色眞宗。而於諸州各置景寺。仍崇阿羅本爲鎮國大法主。法流十道。國富元休。寺滿百城。家殷景福。聖曆年釋。子用壯。勝□於東周。先天末下士大笑。訕謗於西鎬。有若僧首羅含大德及烈並。金方貴緒。物外高僧。共振玄綱。俱維絶紐。玄宗至道皇帝。令寧國等五王親臨福宇。建立壇場。法棟暫橈而更崇。道石時傾而復正。天寶初。令大將軍高力士送五聖寫眞寺內安置。賜絹百疋。奉慶容圖。龍髯雖遠。弓劍可攀。日角舒光。天顏咫尺。三載。大秦國有僧佶和。瞻星向化。望日朝尊。詔僧羅含僧普論等一七人。與大德佶和。於興慶宮。修功德。於是天題寺牓。額戴龍書。寶裝瑾翠。灼爍丹霞。睿札宏空。騰凌激日。寵賚比南山峻極。沛澤與東海齊深。道無不可。所可可名。聖無不作。所作可述。肅宗文明皇帝。於靈武等五郡。重立景寺。元善資而福祚開。大慶臨而皇業建。代宗文武皇帝。恢張聖運。從事無爲。每於降誕之辰。錫天香。以告成功。頒御饌。以光景衆。且乾以美利。故能廣生。聖以體元。故能亨毒。我建中聖神文武皇帝。披八政。以黜陟幽明。闡九疇。以惟新景命。化通玄理。祝無愧心。至於方大而虛。專靜而恕。廣慈救衆苦。善貸被群生。我修行之大猷。汲引之階漸也。若使風雨時。天下靜。人能理。物能清。存能昌。歿能樂。念生譽應。情發自誠者。我景力能事之功用也。大施主金紫光祿太夫。同朔方節度副使試殿中監賜紫袈裟僧伊斯。和而好惠。聞道勤行。遠自王舍之城。聿來中夏。術高三代。藝博十全。始効節於丹庭。乃策名於玉帳。中書令汾陽郡王郭公子儀。初惣戎於朔方也。肅宗俾之從邁。雖見親於臥內。不自異於行間。爲公爪牙。作軍耳目。能散祿賜。不積於家。獻臨恩之頗黎。布辭慈之金罽。或仍其舊寺。或重廣法堂。崇飾廊宇。如鞏斯飛。更効景門。依仁施利。每歲集四寺僧徒。度事精供。備諸五旬。餧者來而飽之。寒者來而衣

之病者療而起之死者葬而安之清節達姿未聞斯美白衣景士今見其人願刻洪碑以揚
休烈詞曰眞主无元湛寂常然權與匠化起地立天分身出代救度無邊日昇暗滅咸證眞
玄赫赫文皇道冠前王乘時撥亂乾廓坤張明明景教言歸我唐翻經建寺存歿舟航百福
偕作萬邦之康高宗纂祖更築精宇和宮敞朗遍滿中土眞道宣明式封法主人有樂康物
無災苦玄宗啓聖克修眞正御榜揚輝天書蔚映皇圖瑾璨率土高敬庶績咸熙人粗其慶
肅宗來復天威引駕聖日舒晶祥風掃夜祚歸皇室祆氛永謝北沸定扈造我區夏代宗孝
義德合天地開貸生成物資美利香以報功仁以作施暘谷來威月窟畢萃建中統極聿修
明德武肅四溟文清萬域燭臨人隱鏡觀物色六合昭蘇百蠻取則道惟廣兮應惟密强名
言兮演三一主能作兮臣能述建豐碑兮頌元吉

大唐建中二年歲在作噩大蔟月七日大耀森文日建立　時法主僧寧恕知東方之
景衆也

朝議郎前行台州司士參軍呂秀巖書

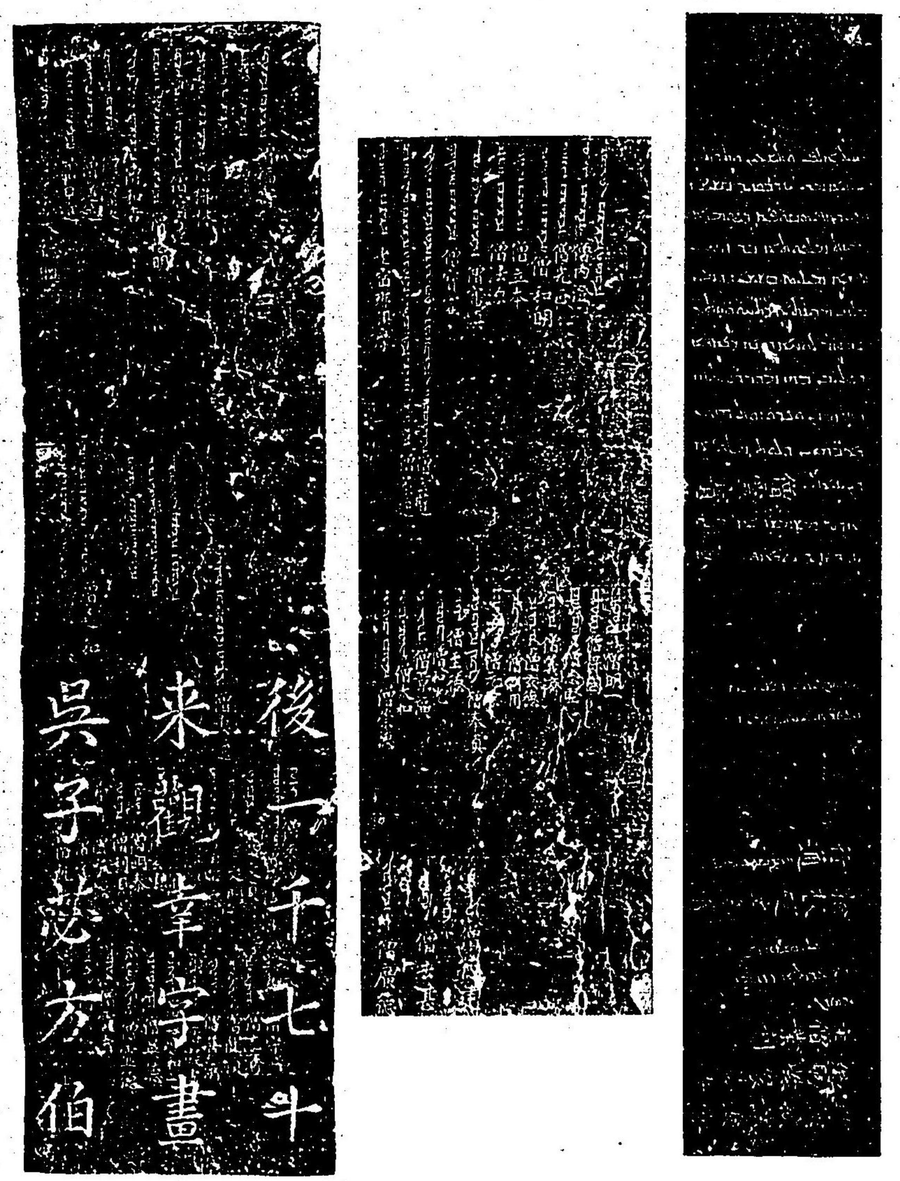
額題



右側

左側

景教流行中國碑額題及び碑側



のもるせ大廓稍りよ圖前を字文の側碑び及脚碑

しべすに大な之に更ち俠な日他ふ嫌なるす失に小ほ尙形字

ことは、殆ど絶望と謂はざるを得ず、然れども、中古以還の零物に至りては、往往珍玩するに足るものあり、

會府街の骨董舗

骨董店は、城内到る處に在り、其内書肆の學道街に於ける如く、一處に集りたる會府街といふ一町あり、成都の古董を漁せんとせば、必ず先づ歩を此に枉ぐべし、骨董の種類は銅器、玉器、陶磁器、硯、紅木器、西藏佛、及び古書畫等を以て主要なるものとす、

骨董の種類

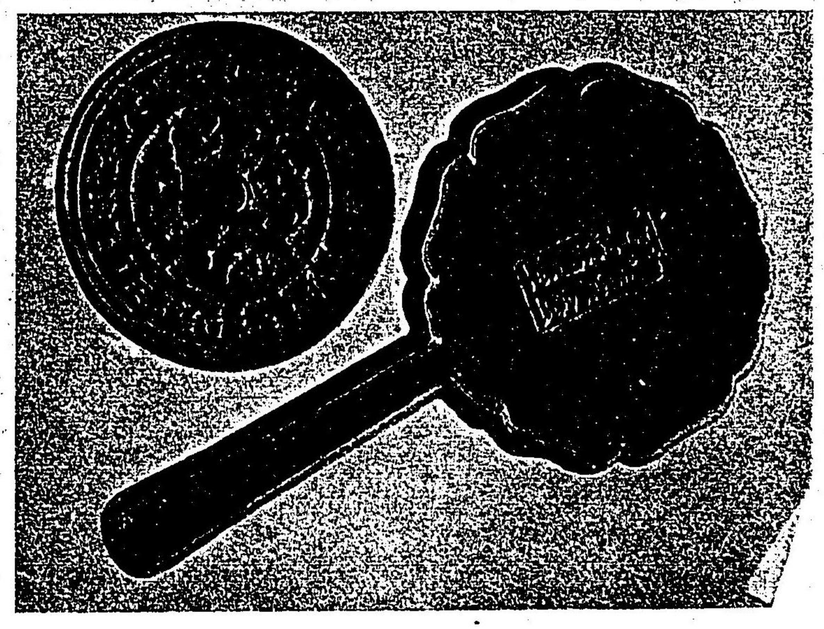
銅器は多く花瓶香爐の類にして、其製作も古くして明代を超ゆるもの甚だ罕なり、余が滞在中、一度も唐漢以上の古銅器に逢着したること無く、時時拙劣なる模品を認めしのみなり、而してこれ等は、日本に持歸りてこそ、一部の素人間に、支那製として珍重せらるれ、支那古銅器より見れば、凡作に過ぎざるなり、こゝに注意すべきは僞物にかゝらぬ警戒なり、聞くが如くば、山東省の某地に、專ら古銅僞造を以て業とするものあり、其規模甚だ大にして、各地の古董店に列ねられたる贋作は、概ね其手に成れる者なりといふ、玉器は白玉、青玉、紅玉、翡翠等にて、茶碗、酒盃は白玉、青玉に屬するが多く、翡翠は婦人髪具、及び手環に作らる、紅玉も亦た婦人髪飾に用ゐられたるものとす、陶磁器は花瓶尤も多く、碗皿等之れに次ぐ、酒杯には、時ありてか、南宋磁を發見すれども、完全なるは極めて得難し、硯には端溪、歙州等少からず、端石は古よ

偽物製造所

り餘り採掘せられし爲め、其坑漸く深まり、今や甚だ完材に乏しく、善物と稱するものは、大抵舊掘に係れり、余は成都滞在間、幾百種見たるか知れざれど、これはと思ひたるは、一二度にて、餘は皆二等三等に位するものなり、余は序に、聞き得たるところに就き、端溪の眼に關し、一言せんと欲す、眼に三種あり、活眼、淚眼、死眼是なり、其正圓にして、中、晴點の活色を帶びたるものを活眼といふ、上乘となす、其晴朦朧として淚を潮したるに似たるを淚眼といふ、第二等となす、其灰白又は灰黄色にて、晴點を存せざるを死眼といふ、其品最も下れり、然れども、硯は其善く墨を發するを貴しとすれば、眼の有無は未だ以て其精粗を判する標準とすべからず、但だ活眼の如き希有に屬するを以て、人これを獲んことを爭ふのみ、欽硯は其質端石に亞ぐ、成都佳品に乏からず、金星欽と名くるものゝ如きは、價格往往善端に超ゆることあり、他に四川省内に産する硯石あれど、取るに足るものなし、紅木器、取り分けて言ふべき程のものの無し、西藏佛は各舗大底之れ有り、其大さ、本書に掃める像の如きが普通なり、多くは西藏人もしくは巴塘人等より直接買入るゝを以て、其作に巧拙精粗の別はあるも、贋物に係るは之れ無しといひて可なり、西藏佛に銅佛、香佛、泥佛の三種あり、香佛は香粉を練りて製し、泥佛は即ち塑像なり、銅佛尤も優り、香、泥之に次ぐ、古書畫には

端石の眼

西藏佛



右兩種共交氏藏

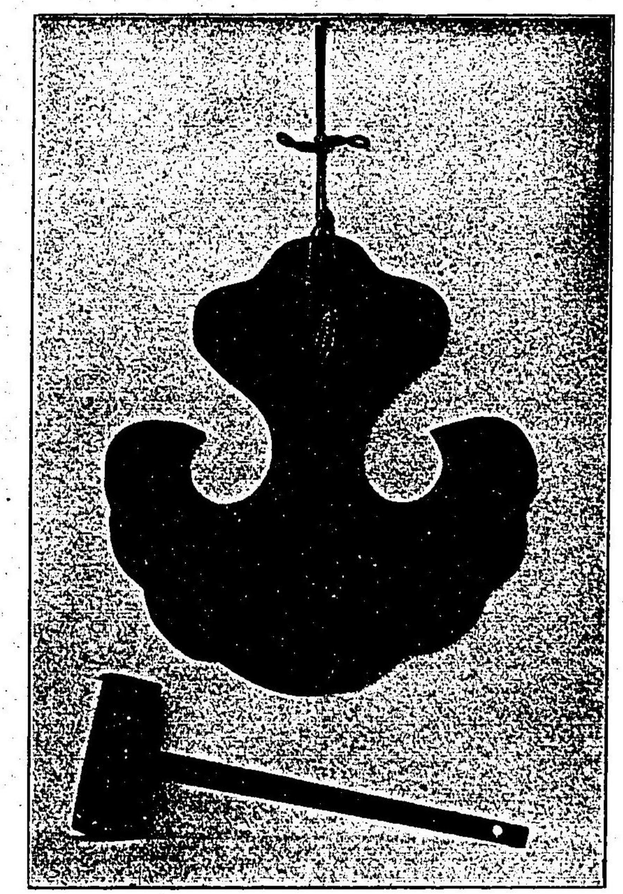
（方き圓）銘安承の金
皆司運東西陝日元上年三安承く曰に文分九寸二個
り な 様 滿 馬 滿 は 紋 其 と ○ 高 使 運 壁 提 ○ 味 緑 造 盤 造

佛藏四
寸藏な材香び及巻盤小に内腹座寸二底座分五寸四さ高

此竹漢の張騫西域に使せし時齎し來り初めて之を叩州の南八里なる邛崍山に植う故に名く幹實して節高し因りて又或は羅漢竹と稱す俗以て杖と爲す所謂虫節の節即ち是なり今叩州瓜慶府叙永廳等の處皆出づ

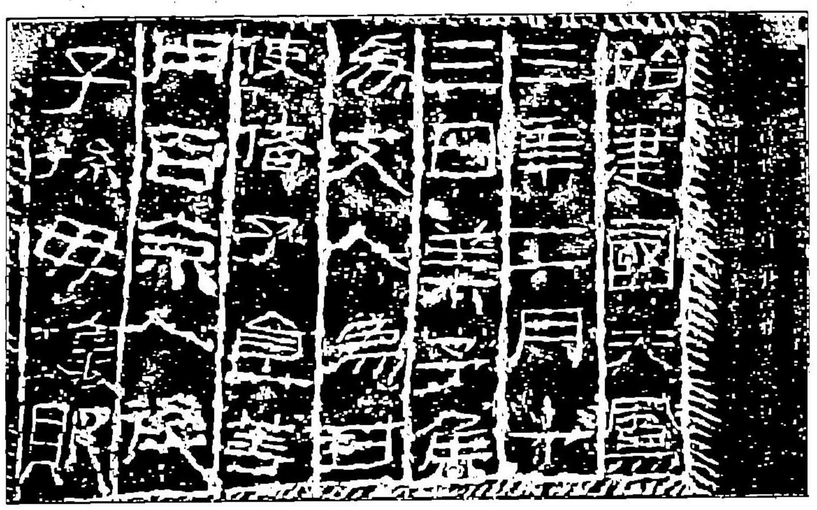
竹　節

中央の一本長さ三尺
七寸節圍二尺一寸



特　磬

文廟祭器の一雲南產なり高さ一尺厚さ五分



漢 始 建 國 碑

甘 國 播 眞 跡

漢天鳳石刻

始建國天鳳三年二月十三日萊子侯爲支人爲封使偖子良等用百餘人後子孫毋墜敗

隸書三十五字大二寸高寸五六分不一偖疑儲字之省余即餘字嘉定丁丑秋見于鄒縣臥虎山今入孟廟

此石在鄒縣南臥虎山下幾二千年無人知者嘉慶二十二年歲日士人孫生口王輔仲見之與滕縣孝廉顏君逢甲送入孟廟考始建國天鳳三年係新王莽僭位之八年其稱天鳳而冠以始建國猶隸續載王莽侯鉦云始建國地皇上戊也其稱爲封者蓋封樹之封猶禮稱三斬拔而已封及史載建武祀泰山使奉車子侯爲封封高一丈二尺之類顏君以爲封田贍族者非也百餘人者用百餘人工築此封顏君釋爲宗人亦非惟萊子侯不可考或以萊州爲古萊子國或以爲葉子侯葉子之泐俱無所據王莽時封侯甚濫有貧而爲備者比史固不勝載而碑字又恍惚難憑闕之可耳其偖字亦不甚了了總之此石雖非後人僞刻亦係當時野制無深長意趣因近時新出始縮刻於西漢之末石宋

蓋其昌の肉筆

某某の肉筆と稱するものあれど、輕しく信せられず、所謂肉筆は、書に張問陶、文徵明、董其昌、張瑞圖等あり、畫に沈石田、仇實父、鄭板橋等あり、其眞僞は須く巳の眼識を以て辨ずべし、徵明、其昌等の如きは、人皆な其容易に眞筆の得られざるを知れば、萬買人の欺くところとならざれど、船山に至りては、其蜀人たるの故を以て動もすれば致さるゝことあり、船山の書、蜀中一字一兩といふ諺あり、其重んせらるゝ概ね此くの如し、坊間決して常に之れ有らざるなり、況んや徵明、其昌おや、然れども、書畫共に明の中葉より、康熙乾隆時代に亘れる、諸名家の眞蹟は、尙中原各處に散見すれば、西陲成都の如きも、未だ全く望を此の種の尤物に絕てりとす可らず、現に成都の書家某は、成都にて購ひたりとて、縱凡五尺橫凡二尺五寸の紙本に、七絕一首を揮へる董其昌の行書一幅を藏せり、其價五十元なりといへり、余も一見したるが、筆力墨色紙質を合せ考ふるに、其眞たるは、疑ふ可らざるに似たり、

成都の骨董は、想像せしよりも寥寥たり、前數年、大坂骨董商藤田某、西安より成都に來りしが其收獲の少なきに痛く失望したりといふ、

個人には佳器を藏する者、往往之れ有り、余が知れる一人の、高等學堂教員龔某といふ者、支那史に通ずると同時に、陶磁に關し一隻眼を備へ、家に藏する所、唐宋元明を

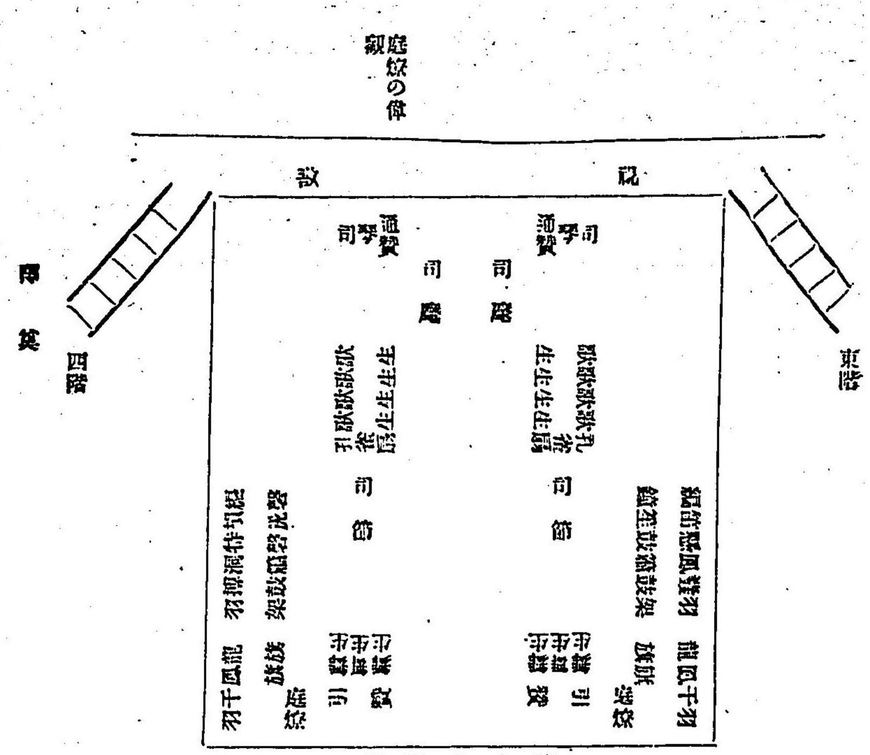
通じて、數十點の多きに達す、其内唐代の陶碗の如き、眞に絶品なり、

釋奠

雍正乾隆中、隋唐以來相因るところの典禮に從ひ、釋奠定式及び樂章を頒布してより、各府州縣、皆春秋仲月上丁の日を以て禮を文廟に行ふ、余成都に在るの間、一び其儀を觀んと欲し、禮に先ちて請ふところありしに、幸ひ其容るゝところとなりしを以て、爰に支那本國の孔子祭を一見するを得たり、

支那本國の釋奠

禮は午前三時より始る、余等邦人三人服を改め、闇を侵し文廟に向ふ、暫く廟外なる舊成都府學署にて控へ居れば、やがて、案内人出て來り、導いて廟門を入る、門内の傍に新聲開の燈を近けて見れば、一群の乞丐、折重りて眠れるなり、此夜は總督初め大官小官廟に朝するを以て、乞丐共、斯くは通路の咽喉を扼すると知られたり、門を入れば、前庭あり、庭左の一門、南に面して立てり、暗夜なれば、其構造の如何は認められず、此門を入れば、廣き中庭あり、對面の廡下に、幾個と無く、提燈の光を見る、祭官等早く已に詰め懸け、時刻の至るを待てるものと覺ゆ、中庭を左に進めば、又一門ありて、高く石を以て築ける臺上に建てらる、此門を入りて、中央の砌路を進めば、古雅にして、少しく反りたる石橋あり、橋を渡れば、始めて祭壇の下に至る、

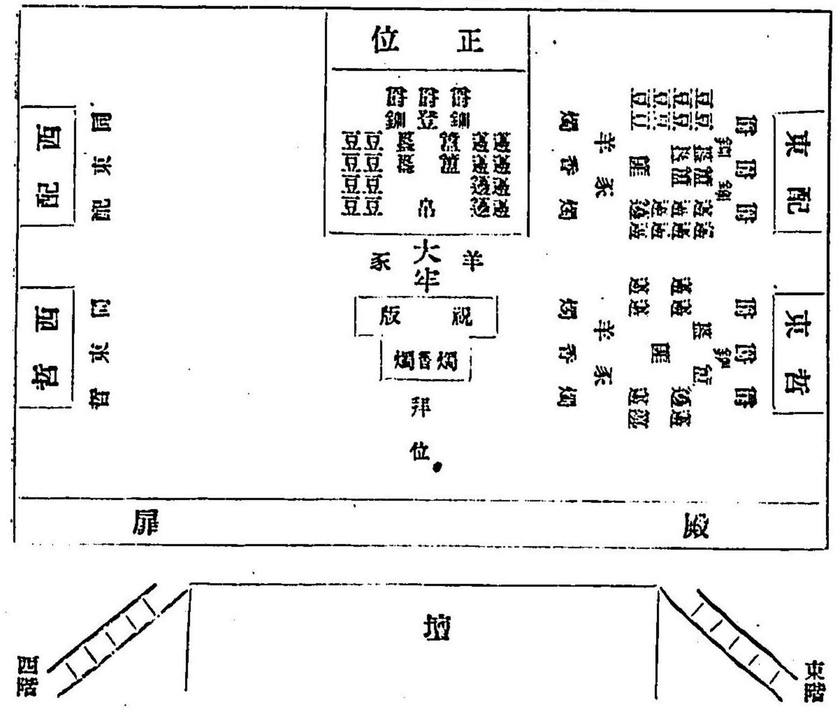


壇、石を築きて成す、高さ五尺、縱六丈四尺、横五丈八尺、壇側東西兩階あり、壇前を大成殿と爲す、

壇の兩隅に、庭燎一對を立つ、燎、蓋竹を束ねて作る、徑凡八九寸、高さ凡二丈、禮將さに始まらんとす、庭燎點せらる、其火初は螢子の如し、待つ暫くにして燦聲漸く起る、風一陣颯と吹き來ると覺ゆるや、炎焰俄に揚り、今まで暗に潛める殿宇廊廡、活とばかりに照り渡り、鬱鬱たる碧林、火影と映して輝けるさま、隋唐の遺制も思はれて壯嚴言ふ可らず、

壇上禮器の陳設、諸員の位次、略ぼ圖に示すが如し、庭燎の點せられたる時は、各員皆其位に就けり、

大成殿内の陳設



余等東階を登り、殿扉の旁に立ちて禮を待つ、

已にして禮始り、大成殿扉一時に悉く開かる、其陳設、圖に示すが如し、四川總督初獻たり、朝服して、東階より登り、殿に入り、跪いて孔子を拜す、司祝、祝版を捧げて、祝文を誦す、拜畢る、退いて西階を降る、布政使以下の大官、亞獻終獻たり、皆次を以て殿に進む、唯だ、配哲兩位を拜して退く、西階を降る、初獻の如し、其間、制に從つて樂起る、歌生歌ひ、舞生舞ふ、

初獻の時、寧平舞を作す、司節頌章を唱ふ、歌生和し、舞生舞ふ、頌に曰

覺我生民　陶鑄前聖　巍巍泰山　實予景行　禮備樂和　豆籩惟靜　既述六經

爰斟三正

安平舞

亞獻の時、安平舞を作す、頌に曰く、

至哉聖師　天授明德　木鐸萬世　式是群辟　清酒維醍　言觀秉翟　太和常流

英材斯植

衆平舞

終獻の時、景平舞を作す、頌に曰く、

猗歟素王　示予物軌　嗜之在前　神其寧止　酌彼金罍　惟清且旨　登獻既終

弗遐有喜

舞生

舞生、左手に籥を執る、籥長さ一尺四寸、孔三、右手に翟を執る、其柄長さ一尺四寸、其首龍を刻す、其口雉尾三根を啣む、其舞ふや、司節先づ覺と唱へば、歌生齊しく之に和し、舞生、式に從ひて舞ふ、次に我と唱へ、次に生と唱へ、民と唱へ、一唱一舞、爰斟三正に至りて畢る、安平景平皆此くの如し、舞生其式樣を啣むせざるを以て、面前に方形の行燈を立て、人其旁に在りて、舞式の圖紙を、順次に燈間に挿み、其映するところを以て、其俯仰屈伸の節度を示すなり、舞は此の便法に由り、覺束乍ら形式だけは違へずと雖も、樂に至りては、其定められたる譜を按する能はず、舞の合間に各自思ひ思ひに

俎上の大牢

行禮の無造作

亂奏す、斯くて三獻各三拜の後、禮始めて畢れば、殿扉は直ちに閉され、總督以下諸員時を移さずして廟を退くなり、禮の始めより、終りまで、僅に一時間に滿たず、釋奠の支那に於ける、大禮の一に屬し、其儀式極めて複雜なるを、能く一時間内外を以て了するの早技、我等日本人には到底眞似も出來ざるなり、

それは扨置き、供物の大牢の壯觀、實に大國の風度を窺ふに足るものあり、皮を剝きたる巨牛を、其儘俎上(俎は高さ四尺餘りあり)に置はせ、首を神位の方に向けたり、牛を供するは、孔子にのみ限られ、其他は羊豕各一頭と爲す、羊も豕も、丸剝のまゝなれば、牛には劣れど、亦た壯觀たるを失はず、以上の犧牲は、祭後、如何に處分せらるゝにや、

他所は知らず、成都の釋奠には、余甚だ其無造作なるに吃驚せり、其禮法は釋奠儀注に遵ふものなれども、余の目には、省かるゝだけ省きたるやうに見ゆたり、僅僅一時間足らずにて濟むは、怪むに足らず、禮と曰ひ禮と曰ふ、玉帛を云はんや、樂と曰ひ樂と曰ふ、鐘鼓を云はんや、吾人は其饌、其祭器の、必ずしも數の如くなるを願はず、ただ祭るに當り、今少しくしつとりとあらんことを望むものなり、

西藏人と巴塘人

西藏隊商

巴塘

成都より雅州府に至り、雅州府より打箭爐に出で、更に西して巴塘を經、金沙江を渡らば、前藏に入るを得可し、西藏人及び巴塘人の成都に來るは、即ち此道に由れるなり、余は滯在間、前後一回、十餘人より成る西藏隊商の、南門より入り來れるを見たり、彼等は悉く馬隊にして、城内に入るに及び、皆馬より下り、轡銜を執れり、體格は、普通の支那人に比せば稍や矮小にして、顏面は銅色を帶べり、服裝は長袖の寬服なりしやうに記憶するも、定かには覺えず、携帶器具等は如何のものなりしか、途中にて行き違ひたるまでなれば、仔細に注意するに遑あらざりき、皇城南門外に、巴塘人の群宿する定宿あれば、彼等西藏人も、多分其處を以て根據とするものと思はれぬ、余は其後彼等を訪問せんと志して、其儘に打棄て置きたるが、彼等も自國の外にては、敢て他邦人に接するを拒まざらん、

巴塘は、雅州府に屬し、四川最西部に位する土司の一にして、金沙江の東岸に在り、成都より約三ケ月の行程となす、氣候寒冷、其雪を見ざるは、盛夏一二個月の間に過ぎず、成都より巴塘に至る、打箭爐以西、地勢漸く高く、山岳重疊、道路甚だ險なりといふ、居民は悉く喇嘛教徒にて、酋長は即ち喇嘛僧なり、

巴塘人俗呼んで蠻子と曰ふ、その成都に來るもの、十人乃至二十人、一群をなせり、其

蠻容堂堂

根據地は上記の皇城南門外なり、彼等は西藏人の如く、整然として隊商を組織するに非ず、僅に西藏佛位を携へ來るのみ、滯在中は、五六人宛相率ゐて、城中を徘徊せり、骨格飽くまで逞しく、身丈け五尺七八寸に餘り、皮膚黃銅色を帶び、五分刈頭には布も捲かず、帽も戴かず、勿論足は徒跣なり、殊に奇なるは、其服裝にて、牛皮製の袈裟やうのものを、半肩より腰に及び、ゆらりと打ち懸けたり、余が見たる時は冬季に屬し、暖地の成都といふ條、人皆裘衣を着けゝるに、彼等巴人は、偏袒赤脚寒しといふ氣配も見ねず、其喃喃缺舌を操りながら、大道狹しと活歩せるさま、蠻容堂堂、迫り近く可らざる概あり、余等外國人に逢ふや、其斷髮の彼等と同じきが爲めか、凝視して物言ひかけ度げなる面持あるは、矢張同族とばし思ふなるべし、

余は蠻子の、人種學上、何種に屬するを知らず、又此人種の果して科學的研究に價値を有すると否とを知らざれども、若し成都に來れるもの等を捉へ、諸般の方面に就き、觀察を下さば、少くとも四川夷族の一斑を知るを得ん、余等成都に滯在中は、左程にも思はざりしが、後日となりては、遺憾に堪ねざること、甚だ多かり、後遊の人獨り巴人に限らず、何事につきても、其場に在りて、務めて研究に客なる勿れ、焦くは悔を貽さゞらん、附記す、西洋人某の著に、西蜀方言といふ書あり、名は西蜀なれど、記するところ、主として四川全省の語言に屬す、卷尾に巴塘語彙あり、今日巴塘語を揭ぐるもの、顧ふに此書を以て唯一と爲す、而してそが著者親ら身を蠻地に入れて研究せし結果なるに至りては、何時も乍ら西洋人の熱心、嘆稱の外なし、

西蜀方言

巴塘人怒る

駐藏大臣を虐殺す

成都軍、巴塘を征す、

余が成都着城の際は、恰かも官兵巴塘に於て蠻族と激戰の最中にて、其年六月提督馬維騏兵を引て凱旋せり、事の起りを尋ぬるに、先きに成都警察總辦鳳某、新に駐藏大臣に任ぜられ、成都を發し、其沿途に當れる巴塘に到るや、時の酋長喇嘛大に兇暴を逞うし、部民を苛遇し、多數の婦女を驅る等、あらゆる虐威を揮へるを以て、鳳之を諭し、若し今にして改めずんば、我れ北京に請ふて、兵を發し、以て汝に臨ましめんと威せり、喇嘛之を聞き、赫として斯に怒り、斯に其屬蠻を整へ、鳳を捕へて之を殺し、其屍骸を寸斷して棄てたり、或は曰く、鳳巴塘所屬の金坑を以て成都の官憲に引渡すべしと迫りたりと、其原因は兎も角も、鳳が喇嘛の激怒に觸れ、慘殺に遭ひ、其屍を粉碎せられて山谿に投せられしは事實なり、鳳大臣遭難の報、成都に至る、四川提督馬維騏兵四營、砲數門を率ゐて征討に向へり、初め戰ふて利あらず、成都兵備道錢某更に若干營を引き、應援として出發せしが、錢は遂に戰死を遂げたり、此役官兵山戰に

成都軍巴塘を征す

征討に向ふ

習はず且つ諸種軍需の運送に困み、非常の惡戰を重ねしことゝて、途中逃遁したる兵極めて多く、到底長日月の滯陣に堪にざれば、僅に巴塘及び其附近を平定し、そこそこに引揚げ歸りしなり、余一日南門外に赴きしに、八人舁の大轎に續き、輜重車、山砲、或は傘を負ひ、或は銃を提げたる兵の、四五人六七人と、武侯祠外の道より進み來れるを見る、これぞ凱旋軍の一隊にして、件の大轎は、鳳大臣の木像を載せ、生ける體に裝ふて、成都に引揚げしものなりき、

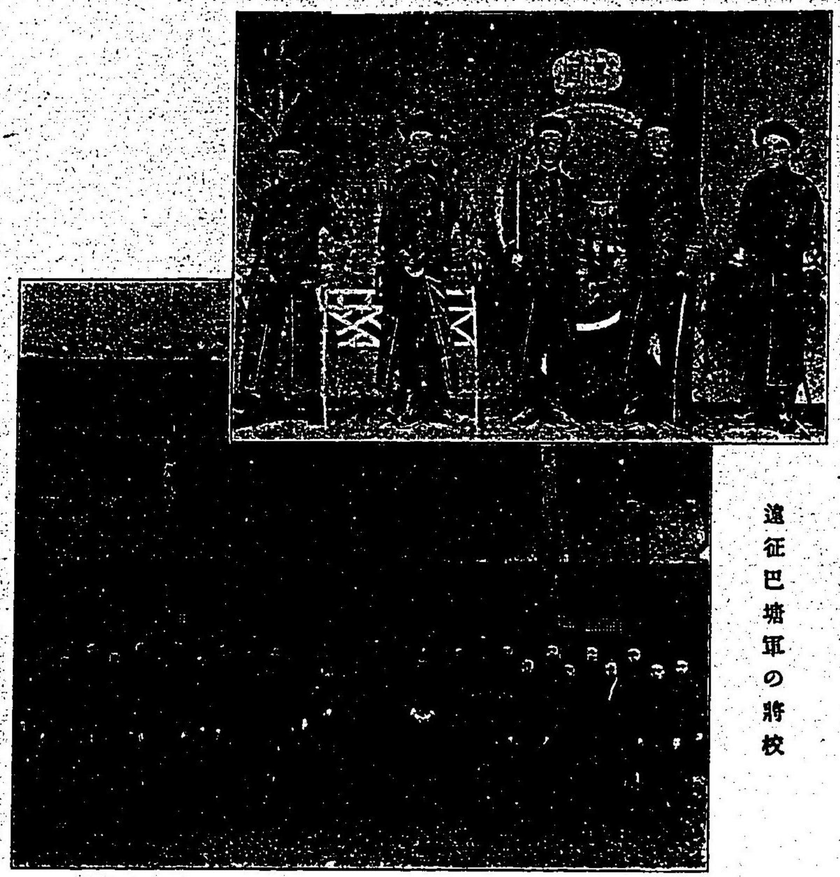
駐蹕大臣の木像

其後、遠征軍の狀況を聞かん爲め、余等邦人三四名、一日提督を其軍署に訪へり、馬、地圖を按じ、先づ此役の極めて苦戰なりしことを語り、且つ徐に說き出して曰く、打箭爐を經て、漸く西するに及び、山岳崎嶇、人烟稀少、加ふるに氣候寒烈を以てし、行軍の難、想像の外に在り、軍已に巴塘に達す、直に其城を屠り、酋長たる喇嘛を誅せり、

提督戰況を語る

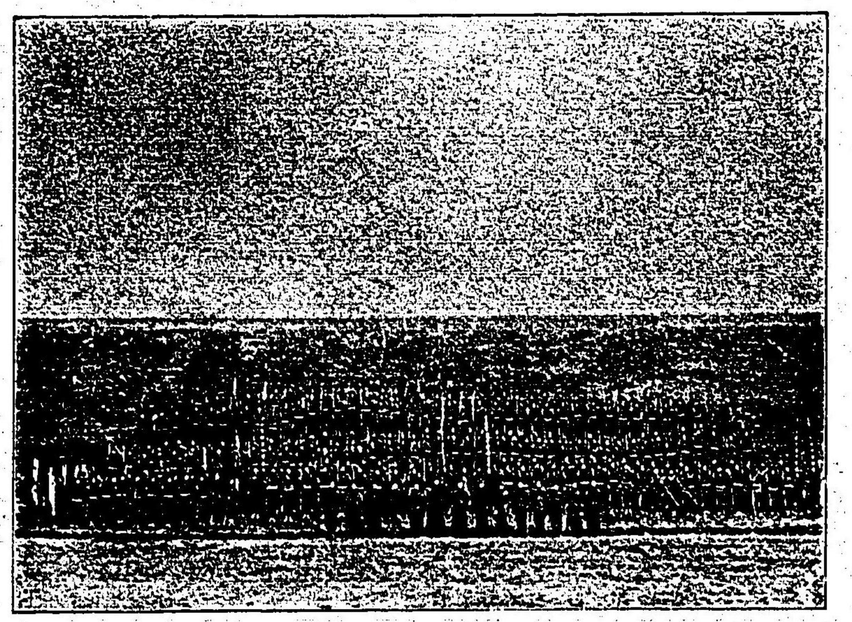
喇嘛を斬りしとても、部下の土蠻、風を望みて降るに非ず、敵勢これより猖獗となり、彼山に一群、此の谷に一團、出沒隱顯、寄せては返し、返しては寄せ、正攻、側擊、其進退の輕捷なること、官兵の及ぶ所に非ず、且つ敵蠻は、大半騎馬にして、皆精巧なる元込銃を携へ、其銃は、銃身の中程に一雙の長脚を付け、之を馬頸に架し、一種の小砲臺として連發する早技には、面を向けん樣も無し、味方の勢は、彼方に見ゆる一部落を攻

發砲の早技



遠征巴塘軍の將校

成都武備學堂學生
中央は敬習西原庫之助氏其右は太田實事氏其左は宮崎喜代松氏



武備學堂練武場に於ける遠征巴塘軍
中央は此軍を教練したる西原氏左は太田氏なり

めんと、足許手許を用心し乍ら、鳥徑熊路を辿りて進み行けば、思ひも設けぬ絶壁上より、急霰の如く打懸けらる、平地ならば見通しも付くべけれど、山峰連疊の間にて、敵の巣窟何處に在るを知る可らず、斯る間を切り拔け、辛くも敵の一部を山外なる金沙江岸に逐ひ出したれば、爰一番河中に攻め落し、塵にして呉れんずと、俄に勇氣立ちて追立つるに、蠻兵等は、岸に繋げる牛皮製の輕舟に飛び乘り、滔滔たる大浪を物ともせず、彼方の岸に漕ぎ上り、立ち直りて遠打する、憎しとも、天晴とも、言はん方なき振舞なり、然れども、舟には限りあれば、乘り後れたる敵は、右往左往に河岸を驅け廻れり、我兵勢に乘じて之を捕獲し、悉く首を河中に斬り込みたり、此くの如くにして、一部分だけは征服したれども、滿山の群蠻、その數幾萬なるを測る可らず、之を擧げて戡定せんこと、朝夕の業に非ざるを以て、一先づ凱旋したるなりと、西清の馬將軍語り了りて大笑せり、

牛皮船

戰利品を見る

馬、語り畢り、戰利品なりとて、酋長が上衣一領、及び其佩刀、蠻兵用ゐるところの馬銃并に腰刀を示せり、上衣といふを見るに、流石は酋長の着用だけにて、形も立派なる支那服にして、其質灰白色の粗大なる羊毛布なり、部下の蠻族に至つては、概ね牛皮の大風呂敷やうのものを引き纏ふといふ、佩刀は革鞘にして、柵は全然銀製に屬す、

堤督の人物

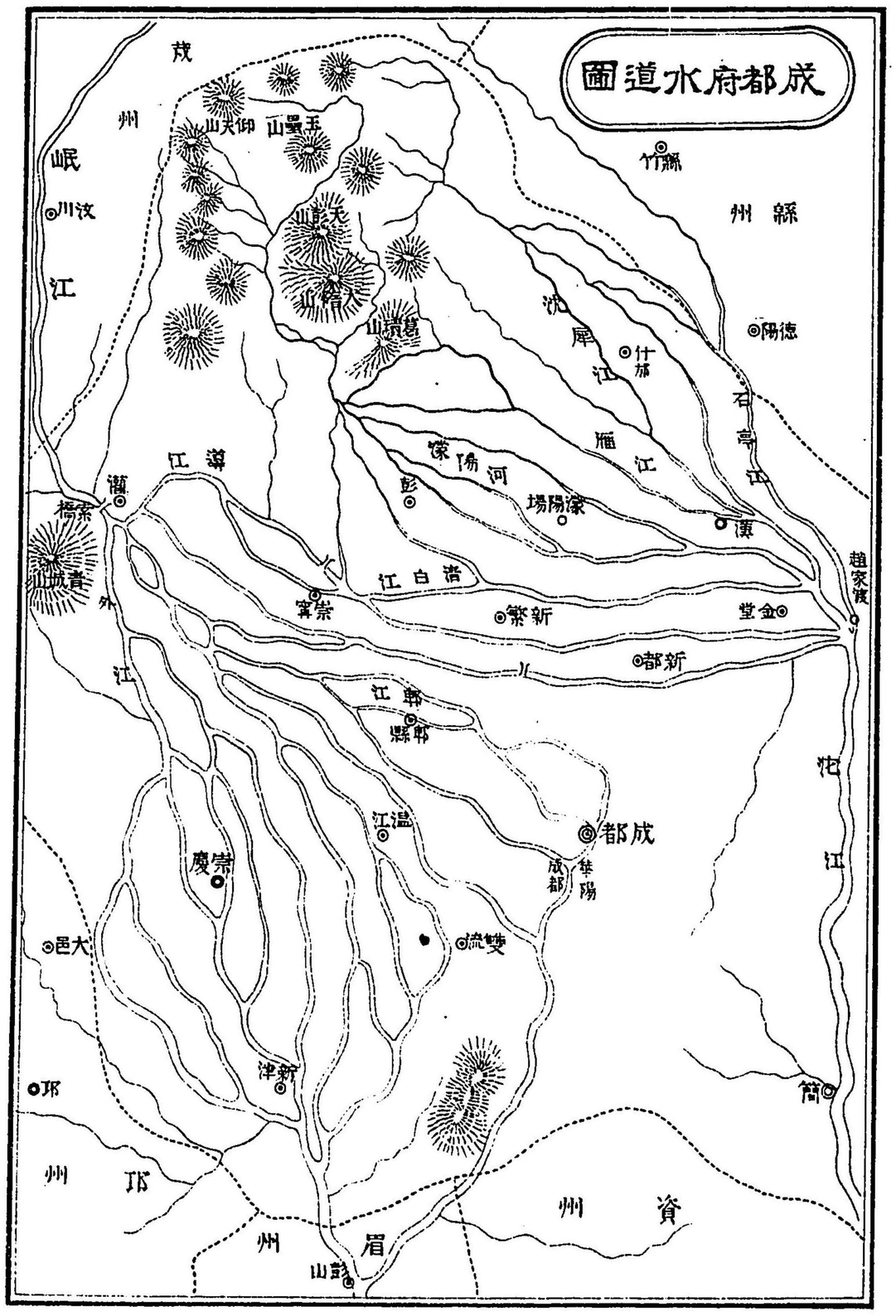
舍長の挾み相な拵なり、馬銃は長さ六尺餘の元込にて、其中程に長さ一尺五六寸の脚二本を出せり、これを以て馬首を挿みて砲臺とはなすなり、凡そこれ等の武器は、喇嘛が北京に於て、某國より買入るゝものなりといふ、

馬提督名を維騏と曰ひ、介堂と號す、雲南の產、軀幹五尺七八寸、年六十に近し、鞍に倚りて顧眄するの狀、自ら是れ一個の好將なるに似たり、英佛聯合軍との戰には、一方に將となり、善く戰ひたる一人なりといふ、此次巴塘征伐の功により、頭品頂戴に叙せられたり、馬又た奇書を作る、自ら稱して顏楷の正法眼を得たりと曰ふ、成都各處の祠廟、往くところとして彼が題字を見ざるは無し、劉備惠陵の千秋凜然の四字、亦た其作るところなり、

巴塘人佛人を殺す

附記す、巴塘には久しき以前より、二名の佛國宣教師居住せしが、鳳大臣と同時に、蠻手に斃れたり、馬の話しによれば、土蠻等、石の牧師を捉へ、銃口を其面部に押し當て、一發の下に斃殺したりとぞ、其結果は清佛の外交問題となりしが、いくら位にて、話が付きたるか、余未だ之を聞かず、

前數年、邦人にて、成都より打箭爐を經、巴塘以西西藏界まで進入したるもの一人あり、其人の話なりとて傳へらるゝを聞くに、四川西藏の國境には、一構の門あり、門の


成都府水道圖
茂州
岷山
玉壘山
仰天山
彭天山
蒼天山
瑞鳥山
汶川
江
沈犀江
什邡
竹縣
綿州
德陽
石亭江
雒江
蒙陽河
彭
蒙陽場
漢
導江
灌
橋索
青城山
外
江
白清江
崇寧
新繁
金堂
趙家渡
新都
郫縣
郫江
成都
華陽
沱江
溫江
慶崇
大邑
雙流
邛
新津
簡
邛州
眉州
彭山
資州

（す影撮て於に爐前打）氏治鍋田木るたけ着を服麻喇

四川西藏の國境

中央が即ち眞の境界にて、其處に一枚の碑板立てられたり、碑の此面には漢文もて、彼面には藏文もて、其國境たることを刻せり、而して碑は巴塘西藏兩地の番人に守られ、何人と雖も擅に足を彼領に入るゝを得ず、某氏は首を延ばし、碑の裏面を窺はんとせしに、これも許されざりしといふ、

打箭爐

余は序に、打箭爐に就き述ぶるところあるべし、

打箭爐は雅州府屬に在り、成都を去る十四日程と爲す、光緒三十二年、始めて成都と、の間に、電線の連絡を見たり、此地は四川最西の貿易地に係り、其貿易は、陸路直接に印度との間に行はれ、商品は茶を以て其大宗と爲す、されば打箭爐にては、四川銀兩以外に印度貨幣の通用せるを發見せん、人民は華夷混合にて、其夷と稱するは、即ち前屢ば記したる喇嘛蠻子の族なり、此處までは、本邦人も少からず其踪跡を留め、余が知れるだけにても、前後十人內外に達せり、木田氏も其一人なり、

打箭爐の外國人

木田氏の遊びたるは、明治三十九年六月の交にして、其目的は專ら商業視察に在り當時外國人は、英國宣教師夫婦、那威人一名、佛國宣教師二名、米國宣教師二名在住せりと云ふ、此內の英人夫婦は、初め入藏の目的にて、印度より陸路四川に入りしが、未だ其志を果すを得ずして、打箭爐に滯在し、已に三年を經過せる趣なり、

四川總督を訪ふ、

着城後十日、四川總督(錫良)を訪ふ、例に仍り、豫め會見の日時を約し、期に及びて其衙門に至る、先づ刺を通じ轎を門外に停めて待つこと凡そ二十分の後、奇なる軋聲と共に、門扉洞然として八字に開く、屬吏趨り來りて「請」と言へば、轎夫疾足して進み入る、中庭あり、中央一條の甃路、直に第二門に通ず、禮裝せる親兵、約五六尺の間隔を置き、左右に直立し、兵と兵との間には、磨きすまさざる青龍刀を植て並へたり、第二門を入り、行く數十歩にして、玄關らしきところに至る、此にて始めて轎を下れば、迎接員延いて客廳に進む、途中の廊下ともいふべき處には、府官の面面、綺羅星の如く左右に立ち並べり、客が支那人ならば、彼等は支那式の禮を行はんも、外國人なる故、皆直立不動の姿勢を取れるは、彼等に取り、結句簡便なるべし、總督は廊の中央まで出迎へ居り、導いて廳内に入る、主客席定り、一遍の挨拶を了すれば、談ば則ち御定りの唇齒輔車に移り、彼我數答數問、凡そ三十分許にして辭し回る、送時の禮、迎時の禮の如し、他省の總督衙門應接所は隨分華美なる趣なれども、四川總督府のは、飽くまで質樸なり、室は三四十疊を敷くべき廣さにて、花形の模樣あるたかむしろを以て天井となす、床は一面に猩猩緋の如き古風の毛氈を敷き詰め、歩むに從ひ、ぶくりぶくりと

門内の光景

して靴あたり甚だ快し、壁には誰氏の筆に成れるを知らざる山水畫幅をかけらりと懸け列ねたり、室の中央に長大なる卓子一脚を置き、白金巾を蔽ふ、卓上には西洋製色ビードロの花瓶を配置し、時花一摘みを挿めり、卓の兩側には、椅子の數だけ、白皿とナイフとを備へ付けらる、主客席に就けば、ボーイ茶を運び來り、尋で菓子パンを配り、小瓶のシャンペン酒を注ぎ廻る、應接所の飾付け、客の取成し方、先づざつとこんなものなり、余は總督の外、布政使、各道、滿州將軍等恐く歴訪せしが、其客間の質素なること、一も總督府に及ぶものなかりき、

應接所の質素

川漢鐵道

四川に於ける目下の大事業凡そ三あり、教育擴張、兵備擴張、及び漢口成都間に敷設せらるべき川漢鐵道是なり、前二者は所謂擴張にて、既成の根柢を培養すれば足れりと雖も、鐵道に至りては、全く新設計に屬し、殊に其線路の中央部に、名に負ふ三峽山脈なる一大難關を横ふるを以て、工事の困難は勿論、經費の鉅額、測り易からざるものあり、之をしも排斥して、その初一念を貫かんとする支那人の意氣込、萬里の長城を築成したる祖先の遺血を傳ふるものたるに負かざれども、今後五年や十年の短日月にては、恐くは成功を期し難からん、

川漢鐵道の線路

線路は湖北省より言へば、漢口を起點とし、宜昌に至り、それより四川省萬縣に進み楊子江に沿ひ、重慶に至り、更に江に沿ひ、敘州府に至り、岷江に從つて嘉定府を經過し、成都に達するの豫定にて、延長約八百哩と稱すれども、實際は千哩以上と思はる其經費は未だ明確には傳へられざるが、凡そ一億萬兩を費さんとの風說なり、而して、こは湖北、四川兩省の合辦に待つべしとせり、現在實收の股銀は、若干兩に達せるや、未だ詳にせざれど、明治三十九年の春頃、成都日報に報告せられしところは、僅に五六十萬兩に過ぎざりしなり、四川にては、其募資の一法として彩票を發行したる、外に、銅元局を重慶府に設立せり、同局の豫算を聞くに、銅元(一錢銅貨)一枚に就き、純益二文(二厘)とし、毎年純益四百萬兩を收むべき計畫なりしに、技師の不揃、器械の運搬途中に於て沈沒せし等の爲め、一頓挫を來し、余が重慶に赴きし頃は、同局は尙ほ開辦の運に至らざりしなり、

銅元局

鐵道學堂日本教習

又四川にては、明治三十九年の春、新に鐵道學堂を設立し、本邦より工學士橘、原、百瀨の三氏を聘し、其教習とせり、當時學生百餘名ありしと記憶す、然るに學生等は普通學の素養なき爲め、直に鐵道專門の技藝學術を敎ふること能はず、三氏は何れも先づ普通學を授くるといふ有樣にて、主眼たる鐵道事業には、直接何の關係も無かりき、川人の目的は、此學堂にて養成したる學生を以て、諸般の經營に任ずるに在るものゝ如し、

該鐵道に關する四川側の實權者は、例の高等學堂長胡峻なり、氏は明治三十八年末より翌年にかけ、或る主要任務を帶び、日本米國と馳け廻りしが、余が在蜀中には、未だ具體的結果を現するには至らざりき、

川漢鐵道に關する余の知れるところは是のみ、支那鐵道中の難業と稱せらるゝ川漢鐵道も、馮虛の說にはあらで、略ぼ其豫備の緒には就き居れども、何樣、經費の莫大なる上に、工事至難のことなれば、今後幾年を待ち、果して開通を見るべきか、蓋し當局者と雖も、ト知する能はざるべし、

漢長安瓦

文日千秋長安

城内史蹟

蜀漢皇城

前に詳なり、

西樓

西樓は城廓西門上の樓なり、益州記に曰く、諸樓年代已久、棲棟非昔、惟西門一樓、雖有補葺、張儀時舊蹟猶存と、今有るところ、固より當年の遺構たるを保す可らざれど、四門の中にて、特に西樓のみ、斯る傳説あれば、或は何處にか、往昔の俤を存せん、

楊雄宅址

楊雄が宅址、寰宇記に少城の西南に在りといふ、少城は今の滿州城なり、其西南は現に半ば滿州人の練兵場となり、半ば菜園となれり、然るに近年に至り、今の華陽學堂の所在地が、雄の宅址と定められたり、余未だ何に據れるやを知らず、雄が成都に住せしは事實なれども、其宅址は迚も正確には考ふ可らざるなり、

楊愼宅址

成都縣狀元街に在り、今の河南會館所在の地是なり、

昭烈即位の處

昭烈の宮址

武擔山

武擔山及び石鏡

武擔山

武擔山、城内西北隅擔山街の西にあり、俗呼むで五擔山といふ、山を以て名くれども、蟻然たる數寗の赭岡に過ぎず、相傳ふ劉備位に此山の陽に即くと、因りて説をなすもの、昭烈の故宮、當さに山の旁にあるべしといふ、曹學佺が名勝志に、故宮當さに城の正中に在るべしとあり、余以爲く、故宮固より城の正中、即ち今の皇城内に在り、位に武擔に即くは、特に高壇の地を擇びしなり、未だ必ずも故宮の在るところとするを要せず、然れども、即位の紀念地なれば、其後に離宮位は設けしやも知るべからず、但だ是れ臆測のみ、史書の徵すべきなし、

鼎錄に曰く、昭烈帝、章武二年鑄一鼎、理山下、名曰受禪鼎と、是或は眞ならん、章武二年は昭烈即位の翌年なり、

武擔山舊名武都山と曰ふ、爰に一小說あり、昔し開明、蜀に王たる時、此山の精、一個の美人に化して現る、王其艶麗を喜び、納れて妃と爲す、然るに妃水土に習はずして疾に罹り、國に歸らんと欲す、王强いて之を留め、東平の歌を作りて之を悅ばせしも、妃幾くもなく物故す、王五丁を發して成都に之き、土を成都の郭中に擔ひ地を蓋ひ、葬りて塚を作ること數畝、高さ七丈、號して武擔と曰ふ、尋で石鏡の厚さ五寸、徑五尺なるを山上に建てたりとぞ、

開明妃の墓

石鏡

其石鏡現に存在す、昔しは山上に建てられたるべし、今は委して山腹に沒し、其半徑を露せり、其大さ舊傳と符す、開明氏が建てしか否や疑はしけれど、一應由緒ある故物に見らる、蓋し石鏡存するところの塚、即ち妃の墳墓なり、又た傳ふ、山下に開明が墓冢あり、豈に妃を葬ひ、遺命して此に葬らしむるものか、又た聞く、其旁一冢あり、開明に比せば稍小、何代の人たるを知らず、俗呼むて太子墓となすと、余此山を觀るに人工を以て築成せしや疑なし、且つ石鏡の存すること、及び開明氏夫妻の墓、太子墓等の傳說より考ふれば、恐らくは、古貴族の遺墳ならん、

開明の墓

太子墓

折石

舊志に曰く、成都縣署內、一方の折石あり、周圍凡そ六尺、長さ三尺許、成都城北六十清里の毘橋にも同形の折石あり、相傳ふ五丁土を擔ふに用ゐたるものと、余並に未だ之を見ず

古へ、山下に武擔山寺、暑雪軒の二字ありしといふ、今共に蹤無し、

支機石

卜肆

滿洲城內、君平胡同(街名)の西端、西郭の下、支機石廟あり、即ち嚴眞觀なり、康熙六年の建立に係る、其地嚴君平か卜肆の蹟となす、君平が成都に卜筮すること漢書に見ゆ、又李白が送友人入蜀の詩に、見說蠶叢路、崎嶇不易行、山從人面起、雲傍馬頭生、芳樹籠秦棧、春流遶蜀城、升沈應已定、不必問君平とありて、卜名著しかりし人なり、

詩人の課題に上れる支機石嚴眞觀中に在りといふ、此石の由來を尋ぬるに、昔し人あり、河源を探らんとて、上流遠く泝りしに、紗を河水に浣ふ一個の婦人あり、其人河名を問へば、婦人天河なりと答へ、且つ與ふるに一石を以てせり、持し歸りて之を君平に問ふ、君平曰く、此れ織女の支機石なりと、想ふに隕石の類にやあらん、

江瀆廟

江瀆廟、成都城內西南隅、今の成都府文廟西隣に在り、南瀆大江の神を祀る、漢志に曰

ふ、秦幷天下、立江水祠于蜀、是れ蜀に江瀆廟あるの始めなり、今の廟は隋開皇二年の創建に屬し、唐の天寶六年の重修なり、曾て王漁洋來りて祭を致せしことあり、其著秦蜀驛程記は其來時の道途を記せしものなり、

文翁石室

蜀景瀘覽に曰く、文翁石室、在華陽縣南、又名文翁學堂、即今之成都府學、石室久廢、康熙四十三年、按察使劉德芳修復之、建錦江書院、六十年、學使方觀增講堂學舍三十餘間、乾隆三十二年掌教顧汝修建魁星閣于講堂後、嘉慶十九年知府李堯棟重建文翁學堂、祀文翁高朕、以司馬相如諸賢配焉、華陽國志文翁立文學精舍、講堂作石室、一曰玉堂、李膺記、後漢中平火延學觀廟廊一時蕩盡、惟此堂火烟不及、壁上悉圖古聖賢、齊永明中劉瑱更圖焉、內有禮殿記、歐陽修謂蔡邕所書、柱上有鐘會隸書、蓋追文翁高君之美而書也、又周公禮殿圖考、禮殿制度、甚古、低房方柱、柱上狹下廣、與今異制、殿有板壁、證先聖像、邱文播畫山水、龕後有板壁、黃荃畫湖灘禮殿之壁、高下三方、圖像世傳晉太康中太守張收之筆、即張載父也、宋嘉祐中王素命摹寫爲七卷、凡一百五十五人、爲成都禮殿聖賢圖、紹興中席益又摹寫于石經堂、凡一百六十八人、明末爲獻賊所毀、舊志文翁立學作石室、在城南、安帝永初間遇火、興平初太守高朕更新、又增一石室、始作禮殿、以祀先聖周公、畫三皇五帝七十二子及三代兩漢君臣、係于壁、と、太平寰宇記記する所と少異同あれども、これを以て略ぼ古制を窺ふべし、今成都府學、成都府文廟と成都府中學堂との間に在り、見る影もなく頹廢せり、余一び其內を縱觀せしが、舊物一存するもの無し、

李冰時代の石刻

石牛

高等學堂庭內一石牛あり、製作極めて奇古、長さ凡そ四尺、高さ凡そ三尺、處處剝落せりと雖も、四足俱全、面鼻猶存せり、堂の隔壁、寺あり石牛寺と曰ふ、漢時の創建にして故の聖壽寺なり、四川總志に據るに、寺中、秦の太守李冰が作るところの石犀ありといふ、水經注に曰く、李冰作石犀五頭、二頭在府中、一頭在市橋、二頭沉之於淵、と、今學堂內置くところのもの、疑くは二頭在府中の一なるべし、別に太慈寺殿前にありといふ一頭、他の一頭ならん、果して然らば、共に是れ漢時の物、當年の石刻を研究するには、屈强の材料と謂ふべし、

大慈寺

東門內東勝街に在り、城中屈指の巨梵とす、唐の至德中の建立に係る、舊と明皇御書太聖慈寺四字の匾額ありしが、明の宣德十年、火災の爲め燒失せり、

諸葛井

東門內諸葛井街武侯祠あり、其中一井あり、形八方をなし、上狹くして下濶し、水甚だ甘美、其深さ測り難し、雲棧紀程に曰く、相傳諸葛武侯欲通井絡王氣、故鑿此井、夏月江漲、嘗有浮瓜出其中、蓋與江通也と、不稽の說なれども姑く之を錄す、

薛濤の宅址

文珠院

院は北門文珠院街に在り、亦た著名の大寺に屬す、此寺多く西藏佛を藏すといふ、

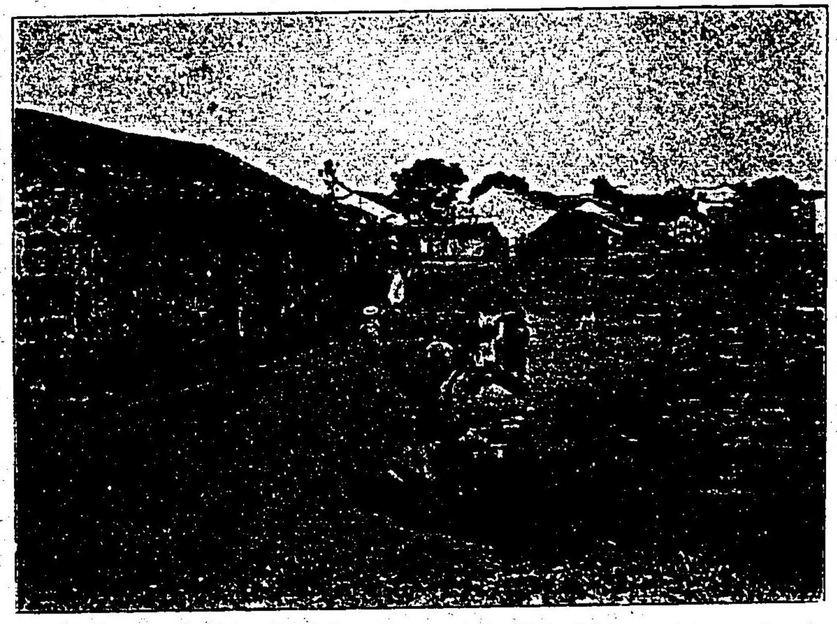
碧鷄坊

文珠院の南、文廟後街昭應寺の東、金馬街の西、紅石柱あり、古碧鷄坊の蹟となす、益州記に曰く成都之坊、百有二十、第四曰碧鷄坊と、坊、唐の時詩妓薛濤、宅をこゝに搆へ吟詩樓を建て、其上に假息せり、坊名これに由りて著る、或は曰く坊、城內西南隅に在りと、今其名を存せず、又曰く、坊址考ふ可らずと、

聖帝行宮

今の提學使司に赴かば、其門內の道左に、古廟らしき一構ありて、二官人馬を曳ける木像を其廡下に置き、楣間に聖帝行宮の四字を揭ぐるを見るべし、當時は格別意に留めざりしかと、後玄宗僖宗駐蹕の跡を尋ねて得ざるに及び、此古廟が、或は二帝の內何れかの行宮には非らざるやと思はるれど未だ詳に考へず、

成都文珠院の僧

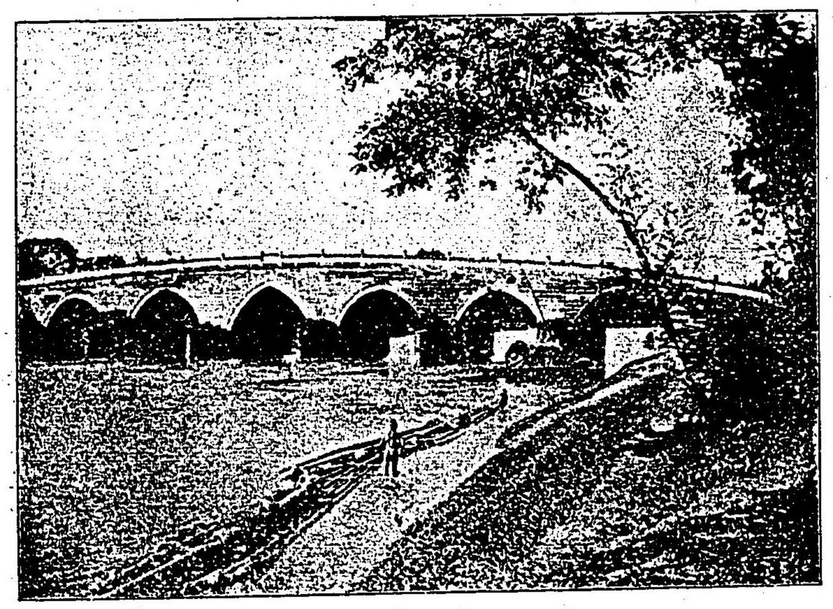


成都婦人の浣衣

萬里橋の歴史

第四十一圖

玄宗橋名を問ふ



萬里橋　錦官城

萬里橋

城外史蹟

萬里橋

萬里橋、城の南門外、錦江に架せり、北門外の駟馬橋と、成都に於て、二史橋たり、駟馬橋、素より舊時のものに非ざれども、萬里橋に至ては、少くとも、其柱基だけにても、必ず當年の遺構なりと信ず、橋舊と篤泉橋、或は南江橋と名く、三國の時、孔明、費禕が呉に使するを送り、此の橋に至りて餞す、嘆じて曰く、萬里の行、此より始ると、これより萬里橋の名あり、蓋し禕、舟を此に發し、岷江に下り、呉に赴きしなり、唐詩家住成都萬里橋、亦た是なり、唐の玄宗帝安祿山が亂を避けて、蜀に幸せしとき、此を過ぎり、橋名を問ふ、左右、萬里を以て對ふ、

帝嘆じて曰く、開元の末、僧一行、更に二十年の後、朕が當さに遠く萬里外に遊ぶべきを言へり、此れ其驗なりと、

往昔を思へば、史的感愴に堪ねざるものあれども、今の萬里橋は南門街唯一の通路に當れるを以て、雜沓混亂、暫くも歩を停むべからず、加之、橋の兩側には襤褸、飲食、廢器の露店等、一面に押し並ばり、欄に倚りて今古を俯仰する抔、思ひも掛けざるなり、余は身を實地に置けるときよりも、寧ろ此圖に對するの感更に深きを覺ゆ、

錦官城

萬里橋を渡れば、道西に小街あり、故の錦官城なり、華陽國志に曰く、萬里橋南岸道西有城、故錦官也と、元和志に曰く、錦城在華陽縣南十里、即故錦官城、錦官猶合浦之有珠官と、往時錦官此城に駐在したるなり、今其錦江に沿へる一街に染靛街といふあり、當時染工の叢居せるところと思はる、錦官城何代に廢したるか、史徵するに足るもの無し、今地錦官の稱を存せず、且つ城垣の設けも無く、尋常の村邑なり、錦官城を記し、應さに言ふべきは、蜀江錦なり、人錦を語れば、必ず蜀江の錦に及ぶ、所謂蜀江の錦は此處にて織り出せるなり、錦江は本と錦を濯ふの水、故に錦を以て名となす、其水今に在りて泔濁と雖も、往時は則ち清澄なりしものか、又古より濁りて

錦官

蜀江錦

而して錦を濯ふに適せしものか、清濁は姑く措き、其絲を濯ふに善き、猶ほ我が鴨川に似たるものあらん、今復た織錦のこと無く、錦水と錦官城址と、徒に其古を懐ふの資たるに過ぎず、吾人は元の費著が蜀錦譜を讀んで、聊か當年の盛を考へんと欲す、其譜に曰く、蜀以錦擅名天下、故城名以錦、江名以濯錦、成都九壁村、(此村考ふ可らず)出美錦、歳充貢、宋朝歳輸上供等、錦帛轉運司、給其費、而府掌其事、元豐六年呂汲公大防、始建錦院於府治之東、募軍匠五百人織造、置官以涖之、創樓于前、以爲積藏待發之所、榜曰錦官、公又爲之記、其略云、設機百五十四、日用挽綜之工百六十四、用抒之工五十四、練染之工十一、紡繹之工百一十、而後足役、歳費絲權以兩者一十二萬五千、紅藍紫茹之類、以斤者二十一萬一千、而後足用、織室吏舍出納之府、爲屋者百一十七間、而後足居、と、是れ宋時の概なり、譜意を以て稽ふれば、元時尚之を存し、元以後に迫んで全く廢滅に歸したるに似たり、

蜀錦譜

現在、四川猶ほ蠶業を以て名を馳す、成都に就いて之を觀るに、數十戸の機房、軒を列ねたる處、幾街もありて、杼梭の聲、衆鳥の和鳴するが如し、然りと雖も其出すところ、綢緞綾綿の類に止り、絲質染法皆頗る劣れり、此中一種巴緞と名くるものあり、蜀人以て今の蜀錦と爲すも、其古法に非ざるや固より明なり、余曾て青羊宮の花市に遊

現今の蜀錦

錦江　關羽衣冠墓　漢昭烈廟　丞相祠堂

び、一古絹の方四尺餘なるを、骨董店に見たり、廟祠の幃帳にでも用ひたるものか、處處に油痕斑點を存し、其地質も痛く故びたりしが、凡品ならざるやう覺ゆ、試に其價を問ふに、二十圓といへり、餘り高價なりしかば、購はで已みぬ、其花文地質より察せば、或は古錦の遺片なりしやも知れじ、費著が錦譜には、當時織製せし錦種の名目を載すれども、費なれば此に錄せず、

錦江

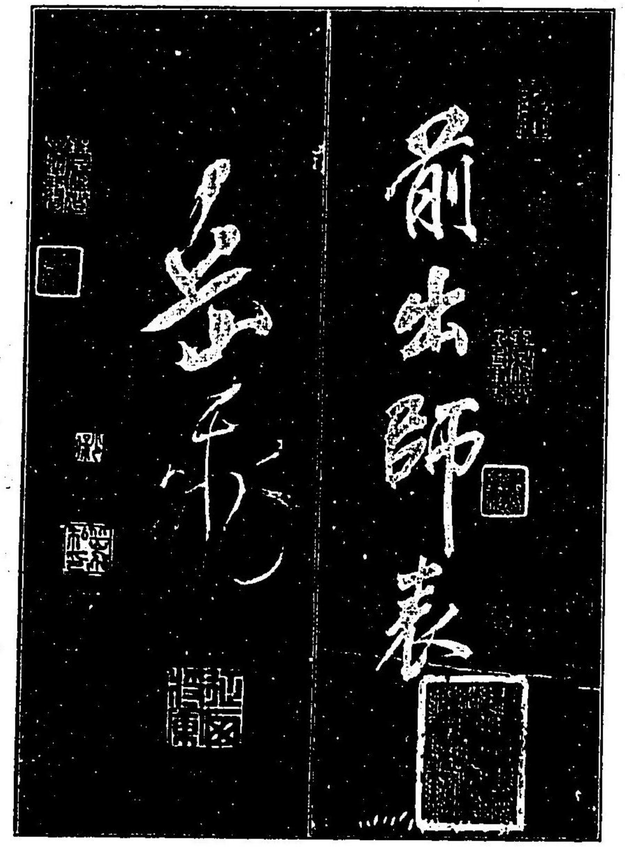
錦江は岷江より出づ、岷江、源を岷山に發す流れて灌縣に至り、分れて數水と爲り、更に支して又數小水となる、錦江は即ち其一なり、流域僅に郫縣の西に始り、成都城南を逕て、城の東南に至り、城北より來れる郫江に會し、又岷江を成す、城西多少の田畝此水の養ふところなり、其名、尤も濯錦を以て著れ、又李白が地轉錦江成渭水に由りて開う、舟を浮べて流を泝る、即ち杜少陵祠に至るべし、

關羽衣冠墓

萬里橋より南に通ずるの道を蜚洗街と曰ふ、關羽衣冠墓其左街の背に在り、羽本と吳中に死す、此墳即ち昭烈其魂を招く爲めに營むところなり、

漢昭烈廟　丞相祠堂

漢昭烈廟　丞相祠堂



岳飛書出師表の一斑

蜀丞相諸葛武侯祠堂碑

蜀丞相諸葛武侯祠堂碑

朝奉郎權知成都府兼四川制置使兼成都府路轉運使上柱國賜紫金魚袋臣趙抃撰

朝奉郎權知成都府兼四川制置使兼成都府路轉運使上柱國賜紫金魚袋臣趙抃撰

蜀丞相諸葛武侯祠堂碑

蜀丞相諸葛武侯祠堂碑

蜀丞相諸葛武侯祠堂碑

蜀丞相諸葛武侯祠堂碑

拓本縱九尺橫四尺五寸五分

節度掌書記侍御史內供奉賜緋魚袋裴度撰　營田副使檢校尚書吏部郎中兼成都少尹侍御史賜紫金魚袋柳公綽書

度嘗讀舊史。詳求往哲。或秉事君之節。無開國之才。得立身之道。無治人之術。四者備矣。兼而行之。則蜀丞相諸葛公其人也。公本系在簡策。大名蓋天地。不復以云。當漢祚衰陵。人心競逐。取威定霸者。求賢如不及。藏器在身者。擇主而後動。公是時也。躬耕南陽。自比管樂。我未從虎時。稱臥龍。詩曰。潛雖伏矣。亦孔之炤。故州平心與元直神交。洎乎三顧。而許以驅馳。一言而定其機勢。於翼扶。劉氏纘承舊服。結吳抗魏。擁蜀稱漢。刑政達於荒外。道化行乎域中。誰謂阻深。殷爲强國。誰謂蕞脆。勵爲勁兵。則知地無常形。人無常性。自我而作。若金在鎔。故九州之地。魏有其七。我無其一。由僻陋而啓雄圖。出封彊以延大敵。財用足而不曰浚。我以生干戈動而不曰殘。人以逞其底定南方也。不以力制。而取其心服。震疊諸夏也。不敢角其勝負。而止候其存亡。法加於人也。雖死而無怨。德及於人也。雖奕葉而見思。此所謂精義入神。自誠而明者矣。若其人存其政舉。則四海可平。五服可傾。而陳壽之評。未極其能事。崔浩之說。又詰其成功。此皆以變詐之略。論節制之師。以進取之方。語化成之道。不其謬歟。

夫委棄荊州不能遂有三郡此乃務增德以吞宇宙不顧武以爭尋常及出斜谷據武功分兵屯田爲久駐之計與敵對壘待可勝之期雖乎居人如適虛邑彼則喪氣我方養威若天假之年則繼大漢之祀成先主之志不難矣且權傾一國聲震八紘而上下無異詞始終無愧色苟非運膺五百道冠生知曷以臻於此乎故玄德知人之明者倚杖曰魚之有水仲達奸人之雄者嗟稱曰天下奇才度每迹其行事度其遠心願奮短札以排群議而文字蜚鄙日日未果元和二年冬十月聖上以西南奧區寇亂餘烈罷甿未息汚浴未清輟我股肱爲之父母乃詔詔相國臨淮公由秉鈞之重承推毅之寄戎軒乃降舊服乃理將明帝道陬落綏懷溥暢仁風閭閻滋殖府中無留事宇下無棄材人知嚮方我有餘地則諸葛公在昔之治與相國當今之政異代而同塵矣度謬以庸薄獲參管記隨旌旆而爰止望祠宇而修謁有儀可象以赫厥靈雖微烈不忘而碑表未立古者或舉舉一善或師長一城尚流斯文以示來裔況如仁之嘆終古不絕其可闕乎乃刻貞石庶此都之人存必拜之感云爾

昔在先主思啓疆宇擾攘靡依英雄無輔爰得武侯先定蜀土道德城池禮義干櫓照物如春化人如神勞而不怨用之有倫柔服蠻落鋪敦渭濱攝跡畏威雜居懷仁中原肝食不測不克以待可勝允臻其極天未悔禍公命不果漢祚其亡將星中墮反旗鳴鼓猶走司馬死而可作當小天下尚父作周阿衡佐商兼齊管晏總漢蕭張易代而生易地而理遭遇豐約亦皆然矣嗚虖奇謀美志天遏于嵯嚴立咸受謫罰聞之痛之或泣或絕甘棠勿翦駢邑斯奪繇是而言殊途共轍本於忠恕孰不感悅苟非誠懇徒云固結古栢森森遺廟沈沈不殄禋祀以迄于今靡不駿奔若有昭臨蜀國之風蜀人之心錦江清波玉壘峻岑入海際天如公德音

元和四年歲次己丑二月廿九日建

右　跋

僰字人名考

予同四川按察司僉憲濟南王敕萊陽曲鋭觀武侯廟碑論裴中立所作文體純正如甘誓允征不華不俚柳于寬所書筆法遒勁如正人端士可敬可愛誠二絕也且于寬在唐元和時與其弟公權皆以善書名於世口嘗以筆法對穆宗曰心正則筆正筆正則可法矣穆宗改容悟以爲筆諫于寬爲山南節度使判納賄舞文吏曰臧吏犯法法在奸吏壞法法亡誅舞文者兄弟皆守正不回所以筆法各臻其妙也中立感望德業比郭子儀以身任天下輕重者三十年歷事四朝以全德終始豈獨工於文字而已哉噫人因文而顯文因而顯然則武侯之功德裴柳之文字其相與垂於不朽也耶大明宏治十年丁巳仲春既望巡按四川監察御史藍田樂

樂跋

碑之來遠矣由唐迄今將盈千載日□□□間嘗過讀竊有感焉而已詢訪遂獲的□補以還其舊庶毀璧復完而覽者無罔□午孟冬之日蜀府承奉滕嵩謹識

左跋

□推殘余蒞茲土表章葬瘞之餘整頁蠹之蕪竊以中立勳名將相包舉于寬正直伯□鑑永相呵護不似薦
福烟銷也皇清康熙十一年三月朝撫蜀中丞羅森識
讀唐碑文瑰麗書端殿稱雙絶匪溢當時不以文□推裴柳乘本也文傳者文乘人傳者人亦乘彬彬君子哉
粵東藩使膠西宋可發識

錦官城外柏森森

蜀丞相祠堂記柳

昭烈の廟

孔明の廟

昭烈廟、丞相祠堂、一處合祀、專ら丞相祠堂を以て聞う、即ち昭烈帝、丞相諸葛亮を祭れるところなり、俗呼んで武侯祠と曰ふ、錦官城の西八清里に在り、杜甫の詩、憶昨路逢錦亭東、先主武侯同閟宮これを指す、滿祠柏林、鬱鬱蒼蒼、數清里の外より望むを得、杜甫又詩あり、丞相祠堂何處尋、錦官城外柏森森、映階碧草自春色、隔葉黃鸝空好音、三顧頻煩天下計、兩朝開濟老臣心、出師未捷身先死、長使英雄淚滿襟、

武侯祠、蜀中第一の名蹟に屬す、其祠南に面す、祠園繞すに丹壁を以てす、頭門漢昭烈廟の四大字を揭ぐ、門を入れば廣庭あり、左右巨碑各一あり、皆碑亭を築きて之を護る、其左なるを乾隆中重修碑となし、右なるを、蜀丞相祠堂記碑となす、蜀碑記に曰く、僅知諸葛名垂宇宙、而不審裴中立之文與柳子寬之書、足鼎峙千秋、惜僻處西蜀、所以好古如趙明誠、都元敬、未搜輯也と、因て又名けて三絶碑と曰ふ、蜀中巨碑凡て三、綿竹の岳飛書某碑及び禹碑と此碑と即ち是なり、就中此碑最も大なり、

第二門を入れば昭烈廟面に當りて立つ、先主衣冠の塑像を安す、大さ等人、左右の長廊文武諸臣の像を配す、每像榜を立て、其官爵姓氏を記せり、面貌自ら其人と稱ふが如し、第三門を入れば、一巨殿あり、之を諸葛亮祠と爲す、龕中孔明の塑像を安す、大さ先主の如し、壇下に大香爐を設けり、立ち騰る香烟濃濃として絶ゆる時無し、賽客皆

諸葛銅鼓

其前に停り、跪拜の禮を行ふ、龕左、所謂孔明が銅鼓なるもの二個を置く、徑一尺餘、長一尺三四寸、厚さ凡そ二分、其面花文を鑄出し、周圍に六蟆を着く(蟆の數は六個と記臆す)、勿論模造なれども、略ぼ其形狀を想像するに足るべし、

益部談資に諸葛銅鼓の記事見ゆたり、曰く諸葛鼓乃銅鑄、面廣二尺七寸、高一尺八寸、邊有四獸、腰束下空、旁有四耳、花紋甚細、色澤如波、皮重二十餘斤、懸于水上、用檜木擊之、聲極圓潤、乃孔明擒孟獲時所制、昔代九絲城得十餘、而在成都府庫中、一名錞于鼓、按今寺廟有尙存者、と、余曾て城內會府街の骨董店に於て一個を見たることあり、大さ略ぼ右記する所と同じくして、但だ邊に四獸無し、固より近代の贋作なり、其價六十元といへり、聞く鳥居龍藏及び榎本武揚兩氏、其眞品と號するを藏せらふと、未だ知らず、談資言ふ所と異同果して如何、

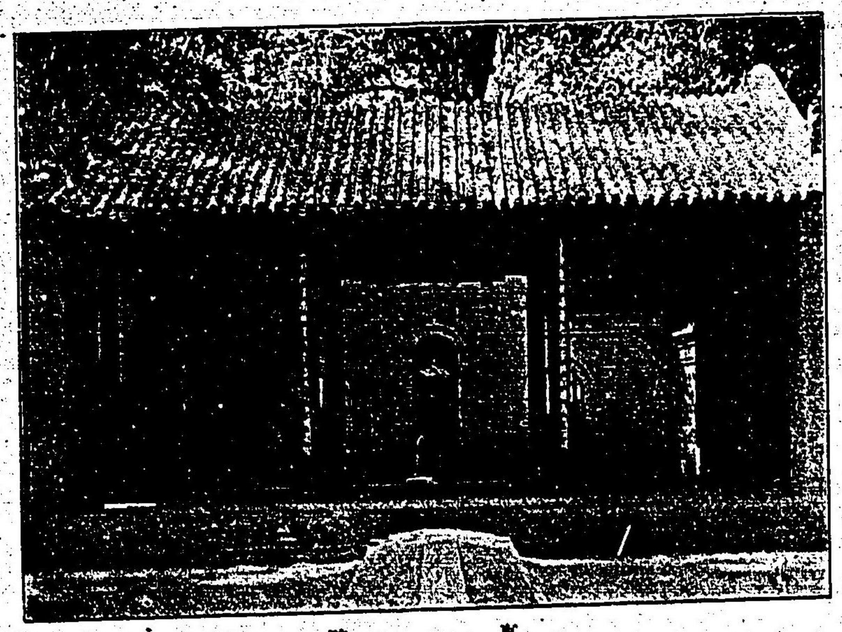
古柏行

殿の內壁諸家題咏甚だ多し、其中顏眞卿草書古柏行の石刻、尤も佳、又杜子美が蜀相の一律を刻せる碑石あり、近代の建立なり、惜くは俗書觀るに足らず、

琴亭

殿の外壁、出師二表の石刻を環俠せり、字大さ略ぼ拳の如し、其書皆篆を用う、殿右池一泓を湛ふ、池邊樓亭一宇、名けて琴亭と曰ふ、亭上古琴一張を置けり、孔明が琴に象れるなり、殿前の屋舍、賽客休息の處となす、其壁岳飛書前後出師二表の拓本を掛く、

丞相祠堂及び琴亭



墓　陵

其國漢昭烈皇帝陵と題す左門より陵域內に入るべし

此屋舍の小門を入りて内に進めば、一圍の庭除あり、花卉蘭竹の盆栽、處狹く立ち並べり、其間を繞ひ、前方に進めば、二棟の閑院あり、窓櫺幃簾、卓椅棚案、極めて潔清なるは、支那にて多く見受けざるところなり、余は祠に謁する毎に、必ず此院に休息せしが、其幽寂典雅の趣、人をして日の終るを忘れしむるものあり、

翠亭の前を過ぎりて右行すれば、一條の石路あり、修竹左右より盛りかゝり、琅玕相摩するの聲、鳥語と和して物淋し、路窮るところ一陵あり、之を昭烈の惠陵と爲す、蜀書、五月梓宮自永安還成都、秋八月葬惠陵、是なり、闕廻して漢昭烈帝陵と曰ふ、闕右の門、常に鎖して開かず、余特に守者に請ふて其内に入り、具に陵の形狀を見たり、陵墳半球狀を成す、規模の小、帝王の陵墓とは思はれざる程なり、墳下より頂上に及び、一筋の細徑を通せるは、人の登りて踐踏するを禁せざるを證すべし、墳外は墻壁を繞らし、墻外は小溝を穿てり、想ふに是れ墳を築くとき、土を取りし痕ならん、

昭烈皇后甘夫人、惠陵に祔葬せりといふ、諸葛亮が建議に本けるなり、事三國志に見ゆ、其略に曰く、先主甘皇后沛人也、隨先主于荆州、產後主、値曹公軍至、追及先主于當陽長阪、於時困偪棄后及後主、賴趙雲保護、得免于難、后卒、葬于南郡、章武二年追諡皇思夫人、遷葬于蜀、未至而先主殂隕、丞相亮上言、皇思夫人、履行修仁、淑慎其身、大行皇帝昔在

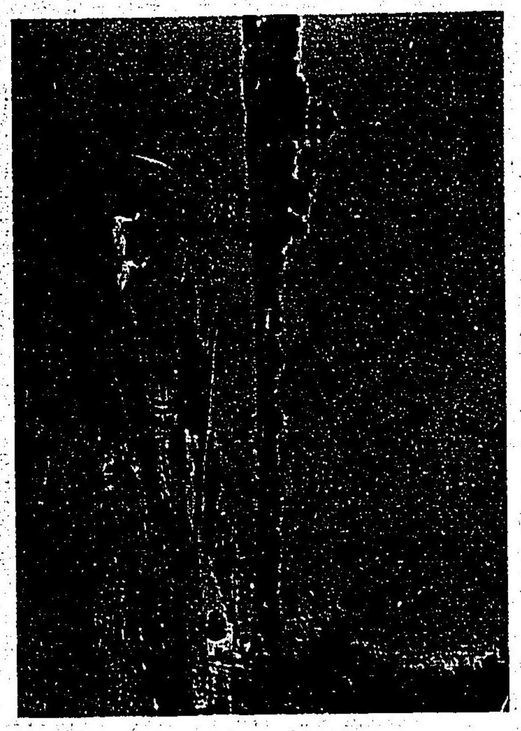
上將、嬪妃作合、載育聖躬、大命不融、大行皇帝存時、篤義垂恩、念皇思夫人神柩、在遠飄飄、特遣使者奉迎、會大行皇帝崩、今皇思夫人神柩以到、又梓宮在道、園陵將成、安厝有期、今皇思夫人宜有尊號以慰寒泉之思、輙與恭等案謚法、宜曰昭烈皇后、詩曰毅則異室、死則同穴、故昭烈皇后、宜與大行皇帝合葬、臣請太尉告宗廟、布告天下、具禮儀別奏、制曰可、

或曰、今の惠陵、先主の壽宮に非ず、其衣冠を埋むるところと、知らず何に據りて之を言ふや、昭烈には魏武の如く、疑塚を作りたることも、他に眞陵の存することも史書に見ねざれば、余は惠陵を以て其遺體を埋むる處として疑はず、爰に又一の小說墟上記に載せたり、曰く有盜發蜀先主墓、見兩人張燈對棋、惟懼、一人顧曰、爾飲水乎、各飲一盃、兼與玉帶數條、令速出、盜至外、口已漆矣、帶乃巨蛇也と、一噱を發すべし、

廻瀾塔

錦江の下流、九眼橋を過ぎれば、一廢塔あり、之を廻瀾塔となす、明の萬曆年間、布政使余一龍、江流激迅なるを以て、高く標して之を鎭せんが爲めに建つるところ、獻賊成都を侵すに及び、其毀つところと爲る、其後乾隆二十五年四川總督開泰その趾に就いて同慶閣を建つ、今の塔是なり、然れども尙舊稱に從ひ、廻瀾塔と呼べり、蜀碧に曰く、成都錦江橋畔、有廻瀾塔、賊登其上、見內城宮殿、語從官云、橋是弓、塔是箭、彎弓正射承

獻賊に毀たる



七星橋を橋脚九眼及塔廻瀾より岸邊江橋外門前都成

天殿、遂命毀之と、又曰く、就其地、築將臺、穿穴取磚、至四丈餘、得一古碑、上有篆文、云、修塔余一龍、拆塔張獻忠、歳逢甲乙丙、此地血流紅、妖運終川北、毒氣播川東、吹簫不用竹、一箭貫當胸、炎興元年、諸葛亮記、至蘇王督師、攻獻于西充、射殺之、廼知吹簫不用竹、蓋蕭字也と、獻忠、成都に臨むに先ち、何人か豫め埋め置けるものと見ねたり、

望江樓

廻瀾寺を過ぎ、流に順ひて下れば、望江樓に至る、舊名玉女津と曰ふ、成都城外第一の遊園と爲す、樓を以て名くれども、實は園の總稱なり、城南諸勝、武侯祠、雙孝祠、二仙菴、青羊宮、杜少陵祠等數有る中にて、此園こそ、最も遊人の集る處なれ、門前、妓を挾んで進むを禁ずると書せる榜示あり、園内樹竹翳蔚、幽徑曲池、柴門石梁、陶砌雲根、備さに支那流の趣を極めて遺すところなし、而して高樓低樹、其間に點綴せり、皆人の臥遊するに任す、尋常酒飯に至りては、大抵園内の小肆に就て辨ずるを得べし、

其江に臨めるところ、濯錦吟詩の二樓あり、眺望殊に妙、酒を置き、宴を張る者、概ね此樓に於てす、三樓の間、三層塔高く樹頭に屹立せり、崇麗閣と名く、園中此塔あるが爲め、更に一段の生色あるを覺う、此塔は專ら人の登臨に備へたるものにして、彼の野外に在る旅人の目標塔とは、結構自ら異れり、其窓際に接せる瓦は、悉く黄陶に係り、

園内の景致

吟詩樓濯錦樓

薛濤井

往往其上に天子萬年の字樣あり、塔頂頗る矚目に宜しく、江舟の去來は言ふも更なり、先づ東を望めば九眼橋より廻瀾寺、北は成都城の一角、收め一轉眸に在り、西南遙に蛾眉山の淡影を認む、是れ最も此塔の擅長と爲す、

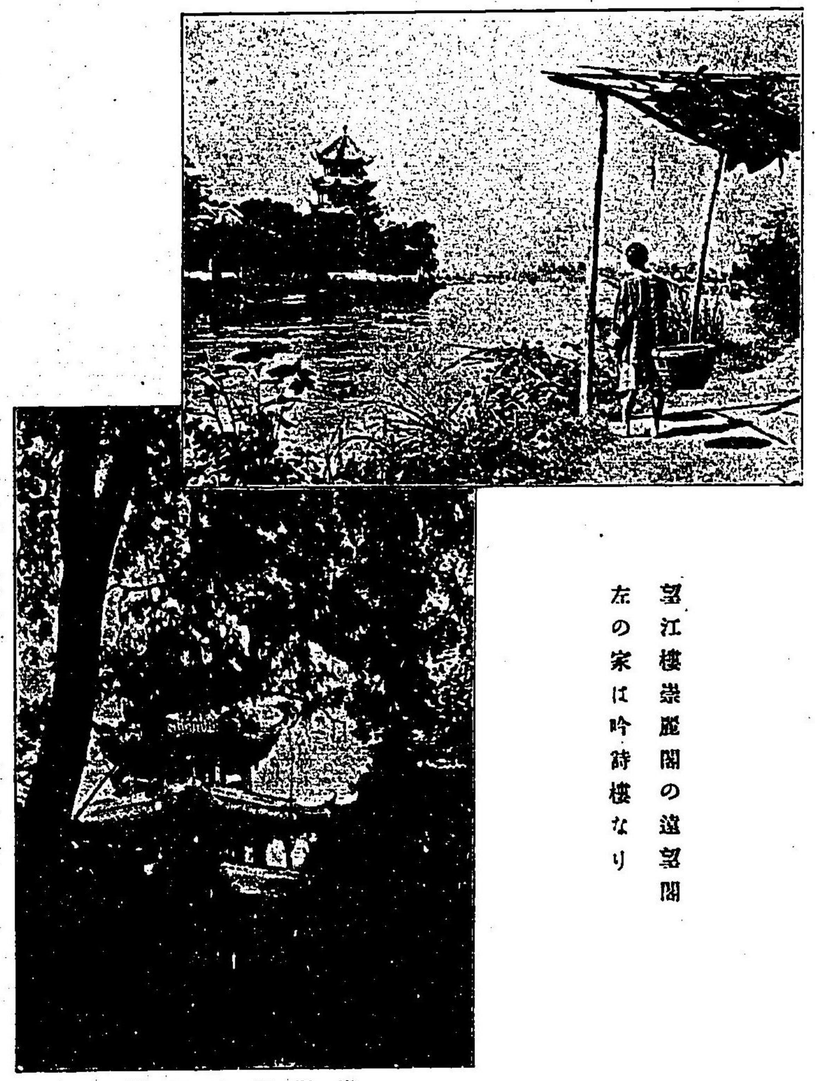
望江樓は薛濤が家せしところなり、濤の成都に在るや、其居一處ならず、蓋し望江樓は其碧鷄坊に住する以前の宅なるべし、園中古井あり、薛濤井と曰ふ、濤昔し此水を取りて十色牋を造り、浣花牋と名けしとぞ、今成都坊間、見るところの薛濤牋は、これに象れるなり、明時、蜀藩、毎年三月三日、此水を汲み、牋二十四幅を製し、十六幅を入貢したりと云ふ、井北、碑亭あり、濤が像碑、其中に在り、

成都の井、率ね飲む可らず、獨り薛濤井、水質極めて純美、四川總督の如きは、毎日特に此水を徵して、茶を煮るに用う、我が德川將軍が、駿河臺の泉を引き、御茶の水に供せし類なり、

送客の餞場

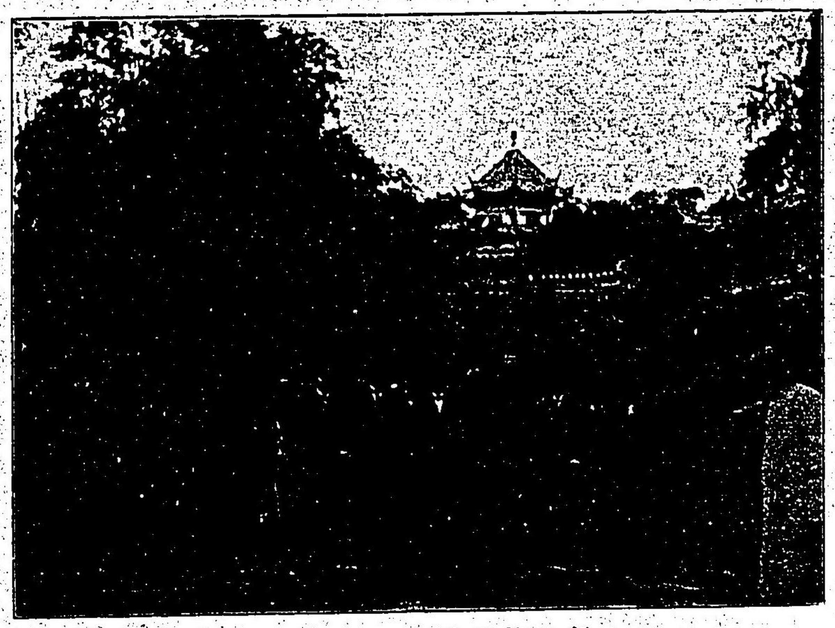
望江樓は遊園の外、又た送客の餞場に用ゐらる、成都より水路吳に下る者、例舟を東門外大碼頭より發し、江樓に至りて纜を繫ぎ、主客皆俱に濯錦樓に上り、更に一番の離盃を擧ぐ、

雙孝祠

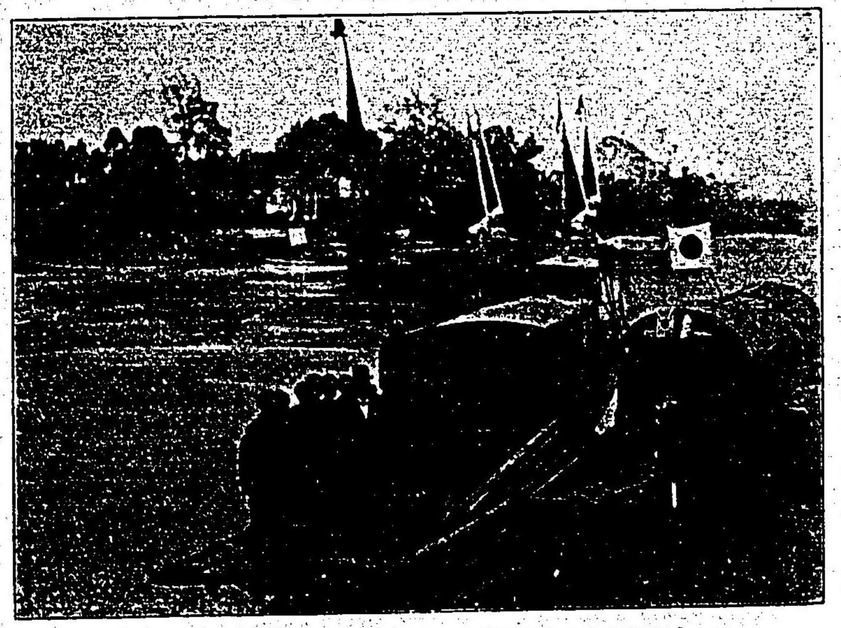


望江樓崇麗閣の遠望閣
左の家は吟詩樓なり

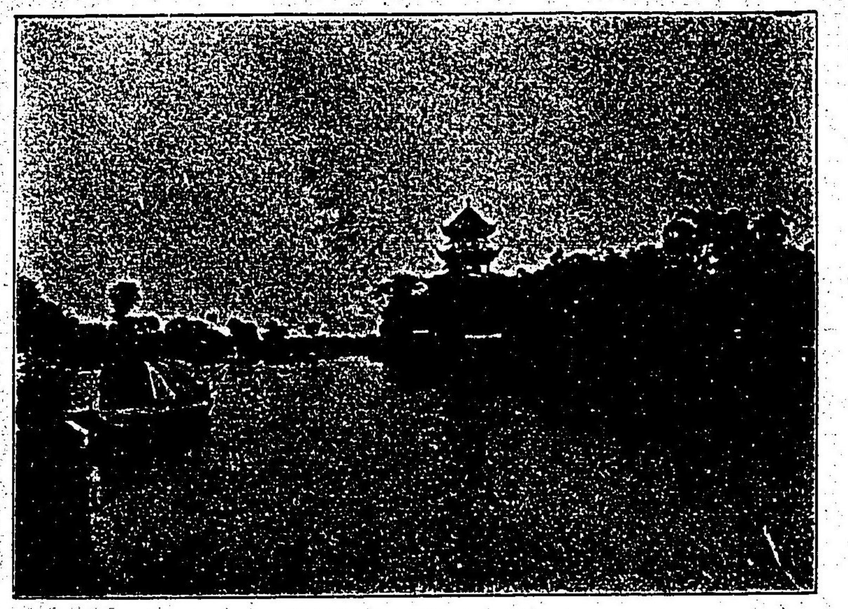
崇麗閣の近觀



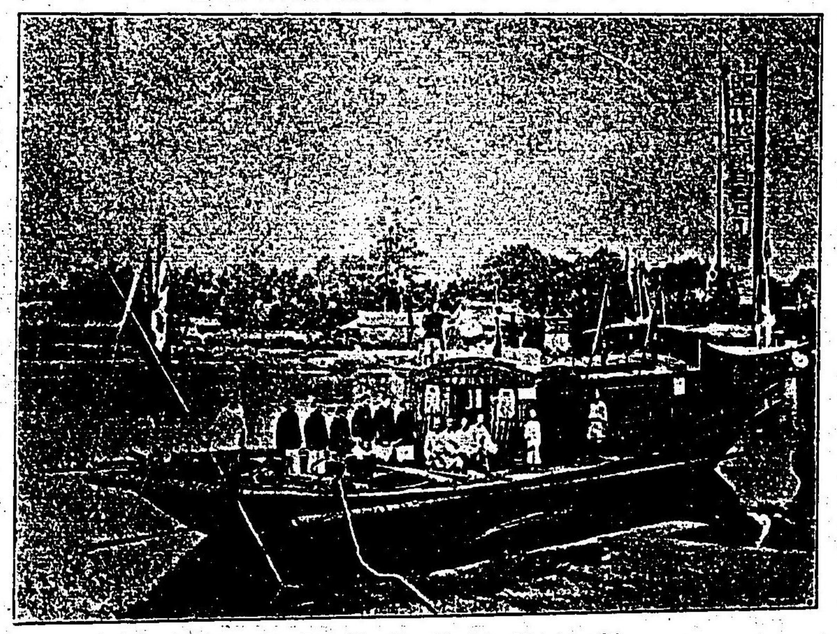
別送の氏田大前門樓江望



小船は其旗舟大船は護衛の砲槍中央の洋裝者は大田氏草
野氏は舟中の病夫に在り峽江水師皆此種の砲槍を用う



望遠の樓江望
國旗を掲げたる草野太田氏の乗船



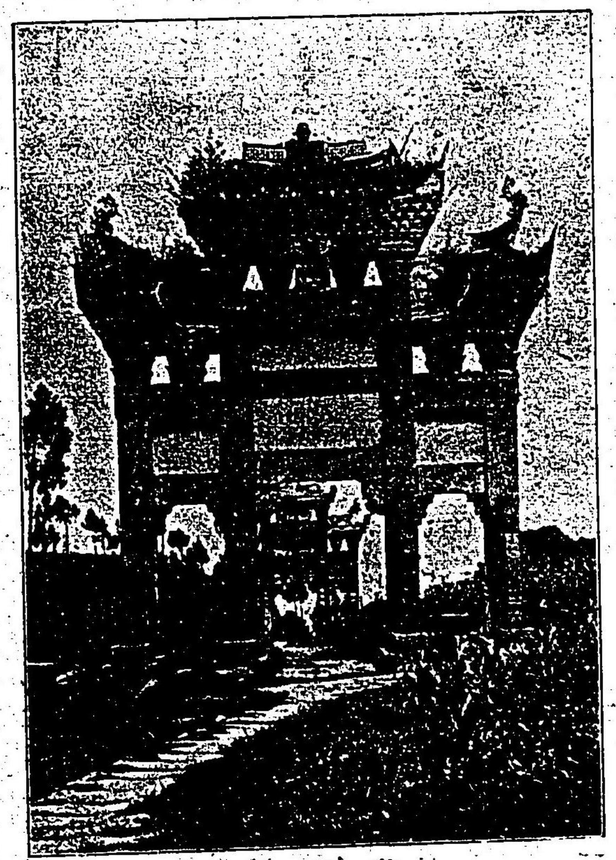
望江樓四川總督の乗船

余は轉じて城西を紹介すべし、南門を出で、錦江に沿ひ、行く三清里餘、雙孝祠に至る、祠、二孝子某某を祭る、庭園の布置頗る觀るべし、祠前の路上二孝子の旌表牌を立つ、彫刻精妙、金碧眼を射るばかりなり、余、蜀中各處に此種の牌を見しが、未だ雙孝牌の如き華麗なるものに逢はざりき、試に此種の牌の構造を記せんに、其材は悉く石を用ゐ、必ず之を路上に建つ、兩面無雙形にして、中央に旌表せらるゝものゝ姓名を刻し、兩柱及び其他の空處には、それに因める聯句、古語を刻せり、中央の最上方に聖旨旌表の四字を刻せる石額を掲ぐ、此額こそ牌主の最も誇りとするものなれ、凡そ此牌を立つるには、被旌表者所屬の官吏より皇帝に上奏し、然る後勅命を以て、之を建設するものとす、聖旨と云ふ所以なり、此制は遠く漢代より剏まり、今日に至るまで繼續せり、往古は門閭に旌表すといひたれば、村里の入口に爾爾と公示したるに止り、今日の如く、特に巍然たる石門は設けざりしものと覺う、

爰に掲ぐる圖は蜀中某處にて取れるものにして、形式の稍簡單なるものに屬す、其複雜せるものに至ては、前二圖の如し、雙孝祠の牌は、前二圖に比して、更に鮮巧なり、旌表牌は各被旌表者の家にて建設し、其構造の精粗は、やがて、其家の富力を計るの標準ともなるものなれば、務めて華麗を競ふなり、其經費、極めて粗末なるものにて、

支那人の石刻技術

第四十二圖

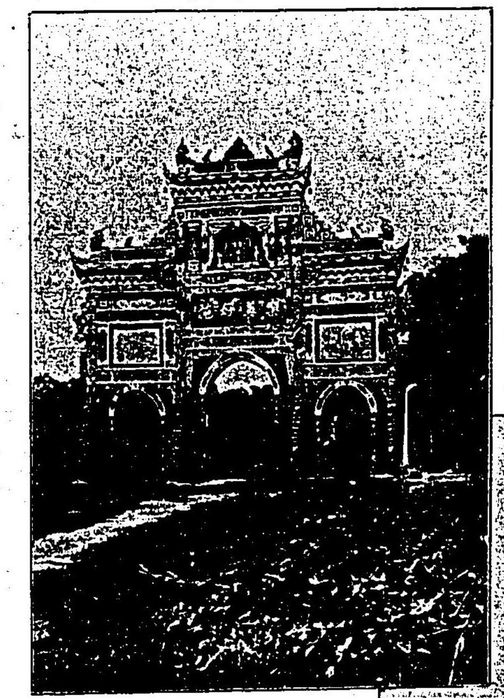


旌表門

尙ほ數百圓を下らず、精巧なるものは實に數千兩を超ゆるといふ、支那人は石工に於て、特獨の技能を有せり、橋梁、形像、柱楹、華表等、一び彼等が石を以て之を作るや、意匠と曰ひ、彫刻と曰ひ、皆人目を驚すに足るものあり、明の十三陵前に立てる八象、四駱駝、四神獸、四甲士、四緒紳及び數個の圓柱の如き、殊に其手腕の凡ならざるを窺ふべし、旌表門は則ちこれ等の技巧を有せるものに由りて作らるゝなり、

青羊宮

雙孝祠の西數町、小邑あり、邑中道敎の一大寺、之れを青羊宮と曰ふ、四川道敎本山の一なり、武侯祠と併はせ、成都城外の二大觀たり、俗傳に曰く、昔在、老子將さに關を出



蜀中旌表門の一斑

でんとす、關の尹喜に謂つて曰く、千日の後、我を蜀の青羊の肆に見んと、後人其地に因て一宮を作る、青羊宮是なりと、此宮も亦た崇禎中獻賊に燬かれたるを以て、舊時の觀は尋ぬ可らざれど、現在の建築のみにても、其規模の壯、優に蜀都の旁飾とするに足れり、

八角堂

門前に殘損せる一對の石華表を立つ、皆刻するに雲龍纏繞の像を以てす、或は是れ殿前の遺物なるべし、庭間八角堂一所あり、結構の精好、宮中第一の傑にして、又余が入清以來未だ曾て觀ざるの奇巧なり、今其梗概を方弗せんに、其基、琢石に成る、八角にして階八所を設く、堂其中央に挺立す、基端は石楹を以て八簷を支ふ、楹色黝黑、皆金升龍を刻す、避けて之を望む、八龍一時に屋に蟄ぢんとするが如し、堂に就て其内を窺ふに、青銅鑄るところの老子騎牛の像を安せり、牛大さ猪の如し、此像蓋し宮の本尊なり、仰いで天板を見る、深く穹狀を成し、細に畫して井格を作れり、材皆素木、清雅言ふ可らず此堂實に青羊宮の眼目と爲す、

老子の像

古銅羊

華陽縣志に曰く、銅羊在青羊宮、高二尺餘、長三尺、明末獻賊之亂、失去、雍正元年遂寄張文端公於京師肆中、見有青銅獸類似青羊宮畜物、因市歸、仍遣青羊宮內、以補其蹟、上有隸書藏梅閣珍玩五字、と宮中殿堂甚だ多し、今何處に收むるや、余屢ば尋ねて之を得

ざりき、

八角堂の後に、鐵製蠟臺二座、地上に露立せり、高さ六尺餘、明の正德三年の鑄造に屬す、青羊宮中にての古物と目せらる、

成都の十二市

花市

花市

成都古今記に據れば、成都古へ、十二の市あり、正月燈市、二月花市、三月蠶市、四月錦市、五月扇市、六月香市、七月七寶市、八月桂市、九月藥市、十月酒市、十一月梅市、十二月桃符市是なり、其何代に創れるか未だ詳ならず、此中今存するもの唯だ一花市のみ、其餘何代に廢せるか、亦た考へ難し、宋の田況、花市を詠する詩に曰く、花市春風繡幕褰、陸放翁が詩に曰く、歸途細踏槐陰月家在花行更向西と、宋前已に此俗あるを知るべく、名けて花市と曰へば、往昔は單に成都の花戸が、春時に乘じて、花卉盆栽等の市を催したるに止ると見ゆ、今や則ち名は花市なるが、實は四川大博覽會にして、昔しありしと傳ふる他の十一市をも總括したるが如き觀を具へ、蜀人の稍や氣の利きたる輩は、敢へて花市と稱へずして、賽會を以て之を呼ぶに至れり、

會場は二仙菴を正場とし、其西隣の青羊宮を副場とす、此地は俗に青羊宮と曰ふを以て、之を取りて花市も青羊宮の花市とぞ呼ぶ、余が着城當時は恰も開會の最中なりしが、事に妨げられて往くを果さず、翌三十九年の開會に及び、初めて見物を遂げたり、會期は凡そ二週間にて、開場は每日白晝のみに限らる、場所と曰ひ、時候と曰ひ、聊か申分無き上に、入場料を取らるゝに非ざれば、成都六十萬人は言ふも更なり、近府近縣より出懸くる見物人にて、かねては寂しき錦江河畔も、人馬轎輿の絕間なく、蹴揚げ蹴散す沙烟に、前後を見分かぬばかりなり、

花市の俤

賽會の光景

雙孝祠を過ぎ二仙菴の前にかゝれば、早や人波打つて雜沓せり、路の左側には活動寫眞の小屋掛あり、樂隊拔きにて物足らねど、亦た一廉の景氣を添へたり、二仙菴の境內に入れば、幾百の植木店、廣場一面に陣を取る、蜀土に產する奇草珍木、大方はこゝに集れり、そが中に西洋草花さへ交りたる、早や植木屋にまで文明の花は咲きけり、此植木店の一區域こそ、古の花市の俤と思はれたれ、植木店の東隣は花に緣ある鳥市なり、鸚鵡鸚哥、其外色色の小鳥、擅木に止らせたるもあれば、美しき籠に入れたるもあり、春風に轉づる聲、喈喈嚶嚶、青陽の天、一層の長閑さを加ふ、

植木店を通り過せば、二仙菴の建物ありて、此會の主場と見られたり、敎育部、工藝部、美術部、演藝部抔の紅旗、群集の頭を掠めて飜る、陳列處は悉く菴の殿堂廻廊を以て充てられぬ、道筋は往路と復路とに分ち、樫の棒を杖ける巡査、要處要處を警めたり、

教育部の出品は、重に官報局出版の教科書、掛圖、體操器械等にて、工藝部は勸工局の製作物を陳列す、美術部は城內屈指の骨董店が、藏の底を叩いての持寄りなり、其書畫部の方こそ見るものにて、徵明、子昂等の眞筆と號するものは、幾幅なるを知る可らず、其外西洋雜貨店、支那雜貨店、古本屋、骨董店、擔下、中庭に立ち並び、通路を除けば、爪にて押す程の隙地無し、正門より青羊宮に通ずる路筋には、簀子張りの飲食店も て充たされ、おでん燗酒、蕎麥、饂飩の氣、蒸蒸として人を壓せんと欲す、男女の間の嚴正なる御國柄とて、婦人席は別に一圍ひの簀子張の內に設けらる、本邦教習の一人、とある、おでん屋に飛び込み、酒一本、鮒の煮付一皿、蕎麥一杯、御したるに、二圓の勘定を取られ、翌日となり、俄に腹が立ちたると見れば、四川總督に不當利得の告訴を提起せんと敦圍きたる珍談あり、演藝館は會場の東偏、森一叢の其奥なり、同じく簀子張りのだゝ廣き大小屋にて、藝當は成都團菊一座の演劇、朝より夕まで、のべつ幕無し、惜しいことには、場所の餘りに偏せる爲め、客足甚だ稀なるは、座元の當込外れたるべし、

二仙菴の見物を了へ青羊宮に向ふ、農工部と記せる紅地に白拔の大旗翻る、此方の木の下、彼方の門內農具、具及び帶塵取諸荒物の類を陳列せり、門の入口に當り、虎豹

豺狼猿熊狗豕の頭骨、爪牙を飾けるものあり、何の用に供するを詳にせず、總して青羊宮の出品は、粗物多きを占め、其店がゝりも鎭守の祭の露店に似て、光景甚だ寂寥たり、但だ書畫店は店數品數共に二仙菴を凌駕せるもの、陳列所に充つる建物の廣大なる爲めなり、一軒殘らず見廻りしが、先づは碌碌たる長物のみ、されど成都の書畫店は、過半此處に集り居れば、十瓶にいかるものばかりと斥けられず、動もすれば、逸品を發見することあり、

青羊宮を出で、其前の古青羊肆に入れば、手磨れの雜沓にて、兩側悉く飲食店なり、中には表を居酒屋に裝ひ、奥にはいかゞはしき寶品を陳ねたるものありと聞けり、此會の出品は皆即賣なり、其價も官報書局勸工局の出品以外は、法外の懸直を吹く代りに、又法外に負くるところ、未だ緣日的たるを免れざれども、成都商工業の消長を窺ふには、好個の縮圖と謂ふ可し、他日交通機關具備し、省內各處より輻湊し、更に大規模の花市となし、從つて諸般の設備も整へば、其時こそ眞に四川全省の大共進會或は大博覽會なるべけれ、現在にては、尙ほ其於玉杓子時代に在るなり、

神仙碑

青羊宮前、南西兩路あり、西を取れば送仙橋に至るべし、宮より以西、人家稀少、野水曲

流、樹丘起伏、四圍の風物、人を撩めんと欲す、宮を去る四五清里、錦江右より來る、一石橋を架す、即ち送仙橋なり、右岸、橋に傍ふて六方石柱一根あり、俗に神仙碑といふ、余屢ば此地を過ぎり、其碑を認めしも、尋常路傍の石筍と思ひ、親しく之を檢せざりしが、後ち省城街道圖を見、其凡ならざるを知れり、圖に曰く、送仙橋畔、有六方石柱一根俗稱神仙碑、字半模糊、文亦古奥、天主二字、見數十處、頭上石寶蓋新鑽、南無阿彌陀佛六字、想是後人爲之、或謂與唐景教碑、一時同出物也、と、余匆匆看過して奇品を逸せり、凡そ發見なるものは、率ね偶然に屬す、路旁の碑石石筍の如き、足を停めて一顧したりとて、左程の面倒にもあらざれば、努努注意を怠るまじきなり、

送仙橋六方石柱

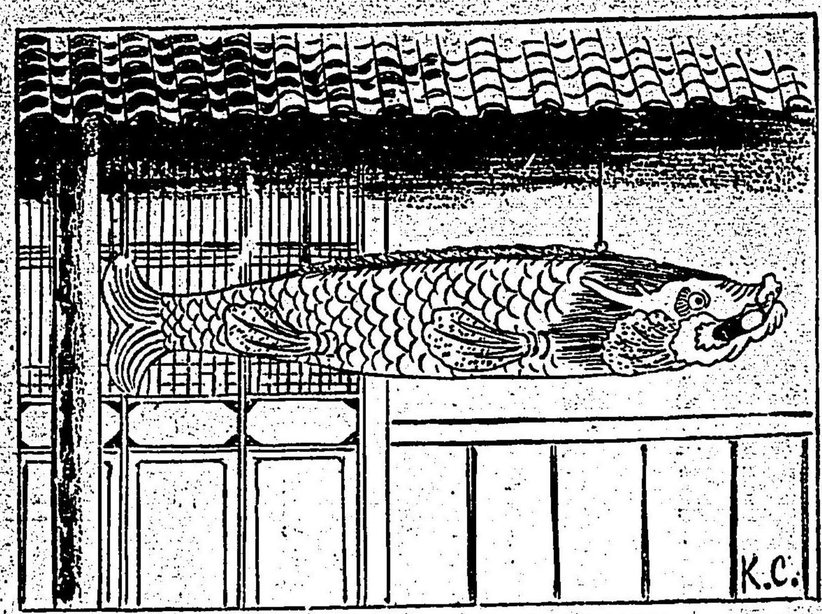
景教碑と同時のもの

草堂寺

送仙橋を渡り、田畔を往く凡そ六清里、面に當りて鬱蒼たる柏林を望む、之を草堂寺と爲す、已に近つけば、錦江左より至り、林を繞りて右に流る、其水草堂寺を離れざるの間、稱して浣花溪と名く、又二に百花潭と呼ぶ、老學菴筆記に曰く、四月十九日、成都謂之浣花遨頭と、蜀檮杭に曰く、乾德五年四月十九日、王衍出游浣花溪、龍舟綵舫十里綿亙と、往時は成都人此日を以て溪上舟遊を催せしと見ねたり、今此俗亡び、滿岸蘆荻、昔をしのぶよすがも無し、

浣花溪

草堂寺　浣花溪



草堂寺の沿革
古梵安寺
第四十三圖
草堂寺

溪上の一石、羅漢橋を渡り、林路を往く一町餘、草堂寺に至る、重門巨殿、庭地開豁、堂堂たる伽藍なり、寺、古へ桃花寺或は梵安寺と名く、抑建何代なるを知らずと雖も、唐の大曆中、崔寧、蜀に鎮たるや、其妾任氏、浣花の人の故を以て、重ねて之を修せること、舊志に見ゆれば、唐代若しくは唐以前の建設たるを想像すべし、其後宋に及び、成都の尹呂大防、又た重修の舉あり、明末、獻賊の亂、遂に兵火に燬かる、今存するところ、康熙四年の重修なり、名に負ふ名刹なれば、往時は珍什寶器を藏したるべけんも、今の觀るべきもの、正殿內掲ぐるところの黃山谷が書拓數幅のみ、

第四十三圖（魚板）

門を入り中庭に出づれば、右側に長廊あ

り、其簷魚板一枚を懸く、長さ六尺に餘れり、康熙以後の製作なるべけれど、其劍粗雅を極めたり、

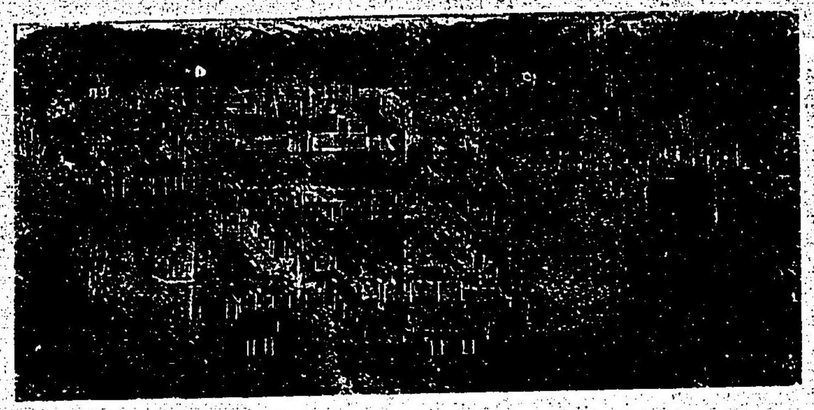
少陵草堂

正殿の傍、發徑右に通ず、徑首の門に杜公祠と題す、その奥、院落あり、少陵草堂即ち是れなり、子美、東都に在り、事頻りに心と合はず、乾元二年の冬を以て、同谷より劍南に至る、時に年四十八、其翌上元元年、劍南節度使裴冕、子美が爲めに草堂を浣花溪上に營み、以て栖隱の處と爲す、子美、浣花流水水西頭、主人爲卜林塘幽、已知出郭少塵事、更有澄江銷客愁、無數蜻蜓齊上下、一雙鷗鷺時沈浮、東行萬里堪乘興、須口山陰上小舟、の詩あり、大曆元年杜鴻漸獨に鎭たり、此時成都大に亂る、子美南行して東川に浮び、復た成都に歸らず、乾元二年獨に來りてより、是に至りて前後七年、其間、射洪梓州の諸地に遊びしも、多くは浣花草堂に住せり、宋の呂大防其宅址に就て一祠を建つ、今の少陵祠即ち是なり、

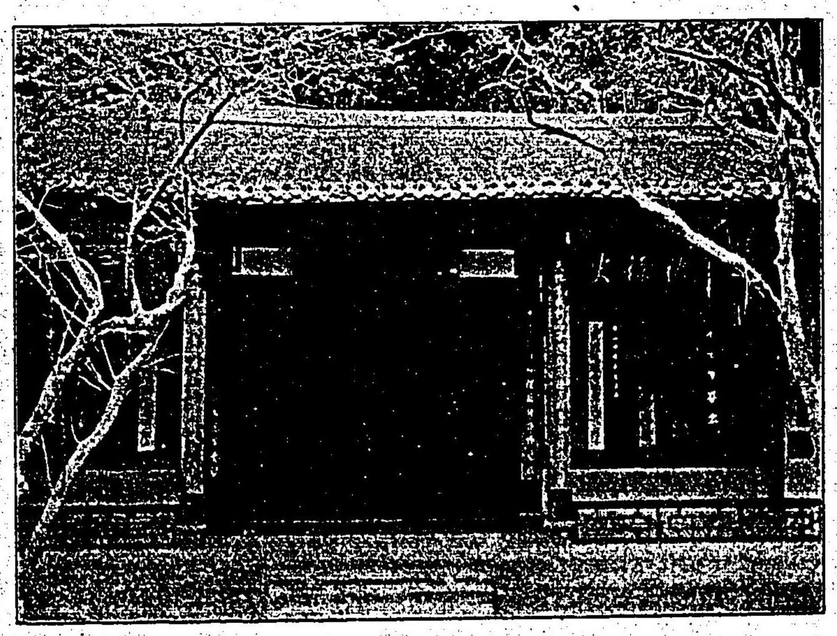
杜子美の宅址

少陵祠

正殿、少陵祠となす、顏しで騷壇鼎峙と曰ふ、內、三像を祀る、中央を杜子美となす、其右は陸務觀、左は黃魯直、像皆高さ三尺餘、陸氏、嘉慶十七年の配祀に屬す、蓋し黃氏も之と同時なるべし、像前各神位一方を置く、題して曰く、唐檢校尙書工部員外郎賜緋魚



少陵草堂
最奥中央の殿を杜少陵祠となす



少陵祠正殿

杜公祠所建之馮碑

承帝曰咨（一作嗟）佐（一作禪）翼輔佐卿洲渚與登鳥獸之門參身洪流而明爾與久旅忘家宿岳麓庭智營形析心罔弗辰往求平定華嶽泰衡宗疏事裒勞餘神禋欝塞昏徙南濱衍亭衣制食備萬國其寧竄舜永奔　升庵釋文

楊升菴禹碑歌序云碑在衡山絕頂韓文公詩所謂字青石赤科斗鸞鳳者述道士口語耳若見之矣發揮稱贊豈在石皷下哉攷宋立集古錄趙明誠金石錄鄭漁仲金石略古制臚列獨不見所謂禹碑者則自昔好古者流得見是刻亦罕矣碧泉張季文得墨本于楚特以呪余作禹碑歌以紀之

季明德云碑本在岣嶁山尖宋嘉定壬申何子一始得之蘿葛之中當時曹轉運疑其狂也及摹刻于嶽麓書院之後爭欲得摹本以觀鵬按今之摹刻禹碑者孔多矣篆法頗簡不同釋文亦別究之皆臆度也與其以它人臆之寧以升菴臆之　石宋

袋杜公神位、宋秘書監賓章閣待制渭南陸公神位、宋涪州別駕監鄂州稅簽書鎮國軍判官知舒州吏部員外郎黃公神位、

祠三面、樹叢竹篁を以て圍まる、廂廡曲折、砌、庭廻檻、具さに高雅の趣を成す、中央の庭上、木犀、木蓮等の名樹を植う、其下排するに花卉蘭竹を以てす、其亭榭に名けて、看雲亭と曰ひ、餘清軒と曰ひ、慰忠祠と曰ひ、招魂亭と曰ひ、聽籟閣と曰ひ、俯青山房と曰ふ、皆客の偃息に供せり、客至れば、祠人茶を薦む、其茶碗には皆杜公祠の三字を刻せり、廊間禹碑一方あり、岣嶁碑を模するもの、少陵祠後、舊と明の成化十七年立つるところの草堂八景詩碑あり、字已に磨滅して讀む可らず、華陽縣志其詩を載す、曰く、闌若招提古梵安、草堂相近枕江干、百花潭淨浮烟雨、萬竹房開歷歲寒、戚苑石橋應博濟、祇林泉井未曾亂、森森綠柳森森柏、道側莊前總耐看と、作者詳ならず、

禹碑

草堂八景の詩碑

薛濤の宅址

薛濤亦た曾て浣花溪上に住せしことありといふ、史唯だ之を載するのみ、其蹟傳らず、

草堂人日

少陵草堂、平常は寂寞として人の訪るゝこと少なけれども、毎年正月七日、所謂人日に當りては、成都より日本里數二里の野道も、參拜者絶間無く、草堂は時ならぬ賑を呈するなり、

司馬相如の舊居

司馬相如の舊居、太平寰宇記、益州の西四里とし、明統志府城の西南五里とし、一統志單に成都縣の西南として里數を記せず、かく諸志正しくは符せざれども、其城西に在るは疑ふ可らず、今西門外西南凡そ一清餘里、撫琴臺と名くるところありて、俗以て相如が舊居、即ち他が文君と酒を貰する處といふ、田間坏然小丘實に是のみ、

望鄉臺

唐の王勃が蜀中九日の詩を以て聞ゆる望鄉臺是なり、其位置成都城北九清里に在り、寰宇記に曰く、昇仙亭夾路有二臺、一名望鄉臺、蜀王秀所建と、新志に曰く、望鄉臺在成都縣北九里と、今北門外五里、昇仙橋あり、昇仙の二字を以て考ふるに、臺應さに橋北に在るべし、成都より新都に至るの沿途に當らんと思はる、予未だ之を訪はず、

駟馬橋

駟馬橋一名昇仙橋、城北五里、成都新都間の路上に在り、水經注に、城北十里、曰昇仙橋、有送客、觀司馬相如將入長安、之其門曰、不乘高車駟馬、不過汝下也、後入叩蜀、果如志焉と、橋に駟馬と名くる、此に出づ、今亦た專ら駟馬橋を以て行はる、凡そ北門路より城に進む者、必ず此橋を渡る、行客轎に坐する者、牽ね其史蹟たるを知らず、余も亦た其の一人なり、今の橋の其舊に非らざる言を俟たずと雖も、其の相因りて駟馬を以て呼ぶ、聊か往昔を憑弔するの資となすべし、橋畔、遂寧の張鵬翮が撰並に書に係る詩碑ありといふ、

女校書薛濤墓

薛濤が墓、城の東南四清里、黄家壩に在りといふ、唐の鄭谷小桃花繞薛濤墳の詩あり、余屢ば城東諸村を遊歩せしも、當時未だ濤が墓あるを知らず、蓋し東門路と岷江南岸との間に在るべし、香祖筆記に曰く、成都有耕者、得薛濤墓、悉石室中、四圍環以彩箋、無慮數萬、顏色鮮好、觸風散若塵霧、夫濤死而箋殉在地下、歷千年不壞、皆理之、不可信、殆好事者爲之耳と、

宋濂墓

宋濂が墓、城東五里淨居寺に在りと聞く、其旁近は即ち潛溪書院の有りし處なり、

蜀城懷古

唐　劉希逸

蜀土饒水竹、吳天積風雪、窮覽通表裏、氣色何蒼蒼、舊國有年代、青樓思艶妝、古人無歲月、白骨冥邱荒、寂歷彈琴地、幽沈讀書堂、元龜埋卜室、彩鳳滅詞場、陣陣一一在、柏樹雙雙行、鬼神清漢廟、鳥雀參秦倉、歎世已多感、懷心益自傷、願蒙靈邱境、時當明月光、

成都

宋　楊億

五丁力盡蜀川通、千古成都綠酎濃、白帝倉空蛙在井、青天路險劍爲鋒、漫傳西漢祠神馬、
已見南陽起臥龍、張載勒銘堪作戒、莫矜函谷一丸封、

成都書事

宋　陸游

劍南山水盡清暉、濯錦江邊天下稀、烟柳不遮樓閣斷、風花時逐馬蹄飛、芼根筍似稻山美、
斫脍魚如笠澤肥、客報城西有園賣、老夫白首欲忘歸、

後蜀孟昶故宮

宋　張立

四十里城花發時、錦囊高下照坤維、雖經蜀國三秋色、難入幽風七月詩、
去年今日到成都、城上芙蓉錦繡舒、今日重來舊遊處、此花憔悴不如初、

摩訶池

唐　武元衡

摩訶池上春光早、愛水看花日日來、穩李雪開歌扇掩、綠楊風動舞腰回、燕臺事往空留恨、
金谷時危悟惜才、世短欲將清夜繼、西園自有月徘回、

夏日過摩訶池

宋　陸游

烏帽翩翩白芋輕、摩訶池上試閒行、淙潺野水鳴空苑、寂歷斜陽下廢城、縱轡迎涼看馬影、
袖鞭尋句聽蟬聲、白頭散吏元無事、却爲興亡一愴情、

宴西樓

宋　范成大

西樓遺迹尚豪雄、錦繡笙簫在半空、萬里因循成久客、一年容易又秋風、燭光低映珠幃麗、
酒暈徐添玉頰紅、歸路迎涼更堪愛、摩訶池上月方中、

西樓秋晚

宋　范成大

樓前處處長秋苔、俯仰旁杓又欲回、殘暑已隨涼燕去、小春應爲海棠來、客愁天遠詩無託、
吏案山橫睡有媒、晴日滿窓危鵲散、巴童來接鳴爐灰、

楊雄宅

唐　岑參

吾悲子雲居、寂寞人已去、娟娟西江月、猶照草元處、精怪喜無人、唯肝藏老樹、

楊雄宅

宋　蒲瀛

寂寞一區宅、沈冥千載豪、但輕執戟賤、孰識草元高、蝌蚪翻墨、提壺欲載醪、著書端有意、
不必反離騷、

武丁擔

宋　宋京

君不見蜀王妃子墓突兀、成都城中若山積、墓頭寒鏡瀝無光、妬月欺花化爲石、鴻荒無根
憑野史、直謂山妖化妃子、臨終未免懷首邱、運土山中葬于此、山名武擔錦江邊、用是得名
千萬年、如今拂閣倚空翠、老木盤鬱摩蒼天、晴雲入穴西山出、捲簾坐見風光滴、安得文如

汲家書、免使後人疑往昔、

行五擔有感　宋　陸游

騎馬悠然欲斷魂、春愁滿眼與誰論、市朝遷變歸蕪沒、硐谷谽谺互吐吞、一逕松柟遙見寺、數家鷄犬自成村、最憐高家臨官道、細細烟莎遍燒痕、

石鏡　唐　盧照鄰

古墓芙蓉榻、神明松柏烟、鬱沈仙鏡底、花沒梵輪前、銖衣千古拂、寶月兩重圓、隱隱香臺夜、鐘聲徹九天、

石鏡　唐　杜甫

蜀王將此鏡、送死置空山、冥冥憐香骨、提携近玉顏、衆妃無復歎、千騎亦虛還、獨有傷心石、埋輪月宇間、

題武擔寺西臺　唐　段文昌

秋天如鏡空、樓閣盡玲瓏、水暗餘霞外、山明落照中、鳥行看漸遠、松韻聽難窮、今日登臨意、多歡笑語同、

和　唐　姚康

桃逕引清風、登臺古寺中、江平沙岸白、日下錦川紅、疎樹山根淨、深雲鳥跡窮、自慙陪末席、便與九霄通、

卜肆　唐　岑參

君平曾賣卜、卜肆蕪已久、至今杖頭錢、時時地上有、不知支機石、還在人間否、

支機石　明　曹學佺

一片支機石、傳來牛女津、客槎何處所、卜肆已生塵、較似昆明古、長從漢月新、每逢秋夕裏、吟眺倍相親、

石室　唐　岑參

文公不可見、空使蜀人傳、講席何時歇、高臺豈復全、豐碑文字滅、冥漠不知年、

石犀　宋　呂大防

江水初漲滿、蜀人幾爲魚、向無爾石犀、安得有邑居、始知李太守、伯禹亦不如、

萬里亭　武侯祠

萬里橋西萬里亭、錦江春漲與隄平、納舟直入修篁裏、坐聽風湍激骨清、

執簡焚香入廟門、武侯神像儼如存、因機定蜀延衰漢、以計聯吳振弱孫、欲盡知能傾僭盜、善持忠節轉庸昏、宣王請戰遺巾幗、始見才呑亦氣呑、

武侯祠

宋 張震

勳業塲中託汗青、詩書壇上復誰登、顧慮可是依元帝、持釣何妨屈子陵、力挽狂瀾休轉石、功虧累土不成層、他年一笑三生夢、應愧多情碧眼僧、

謁先主廟

唐 杜甫

慘憺風雲會、乘時各有人、力侔分社稷、志屈偃經綸、復漢留長策、中原仗老臣、雜耕心未已、歐血事酸辛、霸氣西南歇、雄圖歷數屯、錦江元過楚、劍閣復通秦、舊俗存祠廟、空山泣鬼神、虛簷交鳥道、枯木半龍鱗、竹送清溪月、苔移玉座春、閭閻兒女換、歌舞歲時新、絕域歸舟遠、荒城繫馬頻、如何對搖落、況乃久風塵、孰與關張並、功臨耿鄧親、應天才不小、得士契無鄰、

蜀先主廟

唐 劉禹錫

天下英雄氣、千秋尚凜然、勢分三足鼎、業復五銖錢、得相能開國、生兒不象賢、淒涼蜀故妓、來舞魏宮前、

青羊宮

宋 何耕

一再官錦城、咫尺望琳宮、未始得得來、正墮役役中、今朝弄晴雨、策蹇臨春風、頗愛意像古、停參小從容、標緲百尺臺、突起凌半空、憑闌俯修竹、決眥明孤鴻、信哉神仙宅、不受塵垢蒙、

稽首五千言、衆妙一以通、靜觀萬物復、豈假九轉功、區區立訓詁、亦哂河上公、痴人墓羽化、心外求鴻濛、要騎白鶴背、來訪青羊蹤、

錦江

元 丁復

蜀江二月桃花春、仙子江頭裁錦雲、牙檣定子雙蕩槳、蘭葉衝波愁殺人、浣花時客茅堂小、醉眼看春狎花鳥、柳絮拋風乳燕斜、畫簾捲雨啼鶯曉、蘼蕪草生蘭葉齊、碧流黛石清無泥、郵筒有酒君莫惜、明日殘紅如雨飛、

夜聞浣花江聲甚壯

宋 陸游

院花之東當笮橋、犇流齧橋橋爲搖、分洪初疑兩蛟舞、觸石散作千珠跳、壯聲每挾風雨橫、巨勢潛借雷霆驕、夢回聞之坐太息、鐵衣何日東征遼、銜枚度磧沙颯颯、槊槊斷隴風蕭蕭、不然投檄徑歸去、短蓬臥聽錢塘潮、

春日出遊浣花

宋 宋祁

側蓋天長蕩曉扉、晙風繞滿使君旗、水通江渚容魚樂、草偏山梁報雉時、塲雨滅塵盤馬疾、樓雲礙日進觴遲、少陵宅畔吟聲歇、楊碧梅青欲向誰、

浣花溪

明 范溪

百花潭接浣花溪、饒笑堂開傍水西、新綻天桃帶微雨、輕飛柳絮半沾泥、尋芳力倦年非壯、

懷古愁多日欲低回首白雲家萬里深林偏喜杜鵑啼

偶過浣花感舊遊戲作　宋　陸游

惜昔初爲錦城客醉騎駿馬桃花色玉人携手上江樓一笑鈞簾賞微雪寶釵換酒忽徑去三日樓中杳未滅市人不識呼酒仙異事驚傳一城說至今西壁餘小草過眼年光如電掣正月錦江春水生花枝闕處小舟橫間倚胡牀吹玉笛春風十里斷腸聲

經杜甫舊宅　唐　雍陶

浣花溪裏花多處爲憶先生在蜀時萬古只應留舊宅千金無復換新詩沙堋水淺鷗飛盡樹壓村橋馬過遲山月不知人事變夜來江上與誰期

杜甫宅　宋　喻汝礪

亂後飄零歇此身風光無賴更清新客懷易感酒添病詩思苦堅花減春南枝北枝鶯舌巧前村後村兩脚勻暫借溪邊老爲客花心柳眼莫撩人

遊草堂　明　陳南寶

西出秦關道路長岷峨東望鬱蒼蒼蓬萊三賦舊無敵同谷七歌今可傷茅屋秋高風瑟瑟布衾鐵冷雨牀牀浣花溪上應回首千載令人憶草堂

過子美草堂　宋　馬俌

棲遲九月錦水行獨過草堂西出城村樹苒苒秋照白浪花滃滃江水明溪邊三重結茅屋松蘿翳疎晚雨清往來沽酒且有客胡爲奔走不自停四海紛然雖隱多我憂豈但白馬盟蓼蕁未足飽我腹況又一頃供耕耘只今騎驢望八極終日飄飄浪如許可堪顏色太糾生憂愁盡入篇章苦信眉一笑古復作却似韓宣適東魯此生蕩漾胡能留兩脚風塵奚所休此道滄浪付一渢喚之千古與爾謀吾亦往矣作春秋

登琴臺　梁　簡文帝

蕪階踐昔陰復想名琴遊音容萬春罷高名千載留弱枝生古樹舊石染新流由來遞相歎逝川終不收

琴臺　唐　盧照鄰

相如琴臺古人去臺亦空臺上寒蕭條至今多悲風荒臺漢時月色與舊時同

琴臺　宋　岑參

聞有雍容地千年無四隣園院風烟古池臺松槨春雲疑作賦客月似聽琴人寂寂啼鶯處空傷遊子神

琴臺　宋　邵博

長卿本豪傑禮外安可處手彈南風琴心謂東鄰女雖身備保閭初不忘笑侮大者固已立

下、此皆可補三賦爭日月、一書起今古、其餘不自秘、輒爲人所取、見曹爾何知、杯酒那可汗、故臺已邱墟、勝絕誰敢據、我來訪遺蹟、低徊不忍去、詩成欲叫君、雲車隔烟霧、

昇仙橋　唐岑參

長橋題柱去、猶是未達時、及乘駟馬車、却從橋上歸、名共東流水、滔滔無盡期、

成都府領史蹟

成都府領、三州、十三縣、州、簡、崇、慶、漢是なり、縣、成都、華陽、金堂、雙流、溫江、新津、郫、新都、新繁、崇寧、灌、什邡、彭是なり、此中成都、華陽兩縣に屬する者、前の城內史蹟城外史蹟に於て、略ほ採錄せり、以下其餘に就て述べんと欲す、但た新津、雙流の兩縣、峨眉山記中に收む、本篇の外に在りと知るべし、

本篇其新都、新繁、郫、灌、彭諸縣に係る者、元と彭縣中學堂教習秩父固太郎君の說明に屬す、記中一字を下ぐるもの余の補ふ所なり、

郫縣方面

成都城西門を出で、廿五清里、西甫に至り、又た八清里、高店子に至り、高店子より往く十二清里にして郫縣に至る、縣は北、磨底河、南、清水河の間に位す、縣城內何公祠中、漢の將軍何公の墓有り、祠今高等小學堂に充てらる、何公の墓、其後部の茶園に在り、門を設けて人の擅に入るを禁ず、其墓折釘狀を成し、其上小木雜草を生す、頭より尾に至る、長さ凡そ四間餘、高さ凡そ一間有半、墓前碑あり、乾隆中建つるところ、高さ凡そ一間、幅凡そ三尺、題して漢前將軍氾鄉侯何公墓といふ、

漢將軍何武墓

四川總志に曰く、何武字は君公、郫縣の人、漢の宣帝の時、王莽、已に附かざる者を誅

す武因て自殺せり、

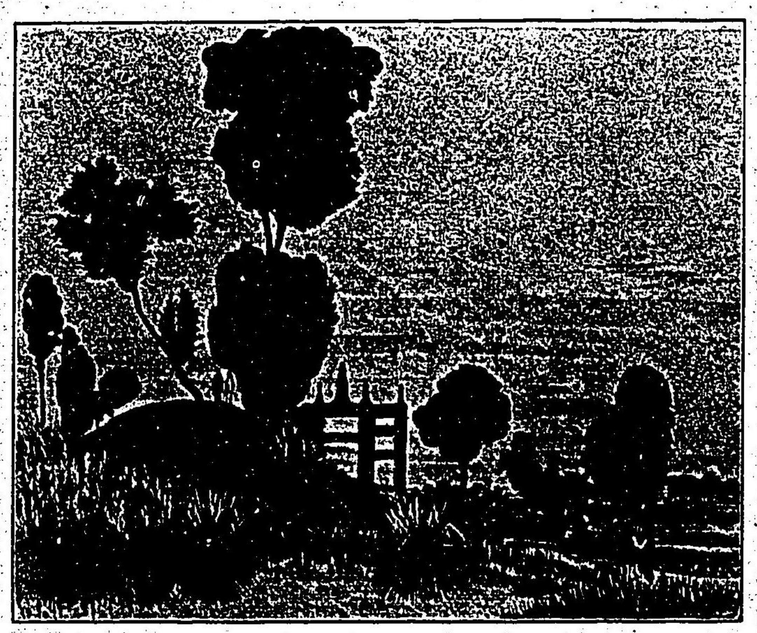
郫筒井

郫筒井、縣衙門内に在り、徑凡そ三尺、水極めて甘洌、現に飲料に供す、古へ汲んで以て郫筒酒を作すもの是なり、今此酒無し、

郫筒酒

范記亦た郫筒酒に及び、今此酒法無しといふ、則ち宋時已に其法の存せざるを知るべし、然るに明の樹榛が送謝少安稿師固原因還蜀會兄葬の詩に、一對郫筒腸欲斷の句あれば、當時其の俗と雖も認むるもの遺りしやも知れざるなり、其創始、未だ明かならず、或は曰く晉の山濤、郫を治むるに當りて作るところと、或は曰く、濤か前に始ると、其釀法、華陽風俗錄に曰く、郫署有池、池傍有大竹、郫人刳其節、傾釀於筒、苞以藕絲、蔽以蕉葉、信宿香達於外、然後斷之と、其原料酴醾花を用う、寰宇記に曰く成都出有三種、一名白玉椀、一名出爐銀、一名雲南紅、香色甚美、蜀人取以造酒と、范記又た其容器を記して曰く、郫商截大竹長二尺以下、留一節爲底、刻其外爲花紋、上有蓋、以鐵爲提梁、或朱或墨、不漆、大率挈酒竹筒耳と、玄宗蜀に幸せし時、郫商曾て之を獻せりといふ、

舊志に據れば、井本と二あり、雙井と曰ふ、郫署の東偏に在り、一は方、一は圓と、名勝志に曰く、池中土臺突起、方圓二井、名鴛鴦井と、



蜀望帝（杜宇）の陵
秩父氏畫

杜宇の墓　獨王杜宇の墓、郫城の東、路傍に在り、墓前小溝外、一石筍を立て、古蜀望帝墜道の六字を題す、

杜鵑

四川總志に曰く、杜宇氏繼魚鳧之後、教民務農、一號杜主、時朱提有梁氏女利遊女利江源、宇悅之納以爲妃、移治郫邑、或治瞿上七國稱王、杜宇稱帝、號曰望帝、更名蒲里、自以功德高、諸王乃以褒斜爲前門、葭萌爲後戶、玉壘爲城郭、江潛綿絡爲池澤、以汶山爲畜牧、南中爲苑囿、會有水災、其相鼈靈決玉壘山、以除水害、帝遂委以政事、法堯舜禪授之義、遂禪位於鼈靈、升西山隱焉、時適二月、子鵑鳥鳴、故蜀人悲思曰、吾望帝也、因呼以爲杜鵑云と、杜鵑の說は姑く措き、上文に由り、杜宇が曾に鳥有の人たらざると、又其功業の一班とを想像するを得ん、

杜宇が墓は、往古鼈靈が墓と對峙したりといふ、そは下に揭ぐる、宋の陳臯が杜宇鼈靈二墳記を見て明なり、今其全文を錄し、以て一考に供す、曰く、

戰國時、蜀災昏墊、杜宇君於蜀、不能治、舉荊人鼈靈治之、水既平、乃禪以位、死皆葬於郫、今郫南一里、二冢對峙、若邱山、獨鼈靈墳隷淨林寺、僧夷其崇、爲臺觀、隱士張俞慨其遂湮沒、請於郡而碑之、因置祠其上、與杜宇岡勢相及、宇之墳尤盤大、民舊祭之、其來遠矣、皇祐壬辰春、淨林僧死、寺籍爲田、許氏(一作民)墾匊、而鼈靈墳與寺俱化、爲民畝、張俞聞

之、建言於縣尹虞曹外郎郭公、公愀然動色、駭而省之、明日進士杜常等五十八人、以狀理於庭、公報曰、昔者七國相血生民、肝腦塗地、獨杜宇亡、戰爭之競、有咨命之求、以拯斯民、雖藍靈均洪水之功、微宇不立、議其賢、則杜宇居多、戴其烈、則藍靈爲大、二人嗣興、其舜禹之業、九之一焉、況勤民禦災、皆載祀典、微此則古之聖賢、暴於原莽、而吾不之知矣、於是乎、其不可籍之議、聞於郡、郡嘉其請、俾復其寺、訪名僧以主之、得景德寺禪者、垂白焉、好靜退、能禪寂、邑人所仰、公於是命之、因盡域、二墳隷於寺、命刻石志其事、庶來者知二人有大造於西土、宜與惠無窮、皇祐四年九月一十四日記、とされど、現今にては、藍靈が墓を說くものなければ、其後湮沒したるならん、

望帝の宮址

新志に曰く、望帝の宮址、郫縣の北、五十步に在り、即ち古の郫城にして、杜宇が都するところ、晉時李雄自ら益州の牧を稱する時、亦た此に都せり、今並に廢すと、四川總志に據れば、李雄が墓、成都縣北七里に在り、

楊雄の墓

四川總志に曰く、楊雄が墓、郫縣の西二十里に在り、土人之を子雲亭と呼ぶ、提學郭子章、漢法玄先生楊子雲墓と題せりと、

郫縣の南凡そ三十清里、成都の西凡五十清里にして、溫江縣あり、醬油を以て名高し、古今集記に曰ふ、金烏池、治西三里に在り、唐の高宗、金烏益州の巨木上に集ると夢み使を遣し、此に至らしむるに、三足の金烏、此地に浴するを見たりと、

成都の西一百清里、崇慶州あり、唐時高適嘗て州守となる、明統志に曰ふ、適、杜市と酬唱して、尙友閣を建て、二公の詩を其內に刻すと、新志に曰く、尙友閣、州の西湖上に在り、新志又曰く、東閣、崇慶州の東に在り、州志に曰く、東閣、唐の杜市、和裴迪登蜀州東亭送客の詩を以て名を得たり、閣前枯枏一株あり、大さ合抱、蓋し千歲の物なりと、

尙友閣

新都縣方面

昭覺寺

成都城北門を出で、八清里、左折二清里、昭覺禪寺あり、城北第一の巨刹に屬し、僧凡そ一千人を有す、寺を出で、別路を往く五清里にして、舊路に復し、北行凡そ二十八清里、新都に至る、明の楊升庵の遺蹟を以て、名を馳す、城門前三清里一石牌、路中に當る、題して明の楊升庵先生故里と曰ふ、

楊愼の故里

桂湖

城內、縣署、湖あり西湖と曰ふ、即ち升庵讀書の處、升庵在る時、桂樹數百株を以て湖畔に植う、因て一に桂湖と名く、樹今尙ほ茂盛、蒼然林を成す、因て又一に其處を謂て、桂林と稱す、八月の交、金粟天香、所謂冷露無聲濕桂花の趣あり、水邊繞すに廊を以てし、又間ゆるに亭榭を以てす、成都園池多し、未だ西湖の佳に及ぶものあらず、

縣志に據るに湖廣さ淸尺四十餘畝、乾隆中、水偶ま涸る、嘉慶十七年知縣楊遊南之

を重濬して古に復す、道南、重修桂湖記を作り、詳に其事を述ぶ、記に曰ふ、升庵、桂を植ゑ、桂湖曲の作有りと、其後道光十二年知縣汪樹舫、居方亭を結び、又其東岸に樓閣を建て、南岸に觀音堂を營む、道光十九年知縣張奉書、新に升庵祠を興し、其木像を祀り、以て今日に至る、縣北一清里、又升庵が宅址ありといふ、

又縣北八清里、路西、東漢循吏王稚子墓及び石闕あり、余成都に在る時、人を倩ふて之を拓せしむ、書中挿むところ是なり、闕舊と左右二あり、故に古來雙石闕と稱せり、右闕は、雍正九年溝水に沒し、今獨り左闕を存せり、其現狀に就き、和田氏に問合せたるに、氏答へて曰く、新都王稚子闕は、御手紙の如く、左闕のみにて、石柱に見る上部の階段樣のものは無之、今は堂の樣のものを送りて風雨を防ぎ、尙ほ後方には高二丈餘もあらんとおもはるゝ王子が墳有之候と、王子闕は漢石中にて有名のものなり、斷碑ながらも、現存して、斯く亭護せらるゝは、喜ぶべき限りにこそ、

新都縣志に曰く、雙石闕即王稚子墓前石闕也、後有宋陽安劉沆記云、西漢循吏稱文翁、葬於成都、其石室在學宮(石室今無し)東漢循吏稱王稚子、葬於郪縣、即今之新都、其石闕在道旁、然石室依古、禮殿得不廢滅、而石闕獨暴露骨立、可憐歷兩漢千二百餘年間、二人爲古今吏師、而遺跡亭亭、勢參峨嵋、氣凜雪山、蓋官學者、所當臣於下風、以幸敎

漢兗州刺史雒陽令王稚子闕銘
高さ三尺五分幅一尺五寸五分

髣髴而至有未及者其不雖如此予訪古石類得秦石犀石笋漢石室石柱石闕凡物五若犀笋與柱無甚損益事而石闕苟不朽則實二人之甘棠也於是新都令王君天常趣古甚力得予說因請大尹莆陽蔡公爲稚子作屋書榜以昭昏昏按闕面有隸字三十一法度勁古過於鍾梁闕上下有衣冠鳥獸等象僅可辨氣韻精簡過於顧陸並以告來者王士禎蜀道驛程記云王稚子闕下方上銳疊石如累石其巔如蓋覆之望之如卒堵波狀疊石凡五層二層刻人物之形三層象虎海馬五層獅子也又記後人題字(其名略)金石錄云按後漢書循吏傳王渙字稚子嘗爲溫令而石刻爲河內令者蓋史之誤渙以元興元年卒然則闕蓋和帝時所立也朱竹垞云漢書河內郡有溫縣無河內縣所謂河內縣令者謂河內郡之縣令也史未嘗誤方綱按洪氏隸續已云謂河內之縣令爾即溫也碑中縣字反系作縣今以所見舊拓本驗之信然王稚子闕洪氏隸續所錄凡三見其第五卷第十三卷皆各爲之圖一圖其闕式一圖其畫象也又其第二卷別出雒陽稚子一題云右先哲雒陽稚子六字其大小與王稚子闕相若而波磔不越乎規矩之外亦刻於稚子闕上但殘闕不具無先後之序愚按此六字即其額也不應別出一題其哲字蓋即靈字之譌耳又新城王文節秦蜀驛程後記詳錄闕上題記之文按文節此記作於康熙三十五年丙子在黃子羽爲新都令倩工拓碑後之五十三年而其時不但雙闕具

存、且闕上所刻人物象虎海馬獅子之形、及逐層、後人題記之字、皆無恙、則黃子羽作、令時、其完好更可知矣、然此拓本漫漶甚、蓋出於工人之鹵莽、若州字中直之岐出、河字下點令字、上半皆屬描失、且其上數層之文、皆置之不拓、誠可憾也、然洪氏所得拓本、又在黃子羽之前五百年而已、餘靈爲置、則其剝泐已久、又可知也、前年門人陳和軒覩察、入蜀以拓本見寄、則僅存雒陽令一闕及闕後陰之二半行耳、然其拓法、轉勝於此本、是以嘆善本之難得、而此冊雙闕具存、尤可貴也、予既重感秋盦所獲之不偶、因爲遍考前人錄之文、臨寫於後、翁方綱跋、小蓬萊金石文字、崇正十三年太倉黃翼聖、知四川之新都縣、以拓本見寄、余按隸續以二闕字屬之、至十七年解縣事歸、出此爲贈、云闕已橫臥榛莽中、各失其下半截矣、後四川兵戈雲擾、人烟斷絕、正不知二闕尚存否也、洪趙所藏二闕俱有全文、故知其名渙、歐陽所藏、止刺史一闕、而又失去王君下二字、遂不知爲何人、止據雒字、去水加隹、爲光武以後字、定爲後漢人耳、苟非洪趙兩君子、則今之見二闕者、何從知其爲稚子哉、丁酉正月顧苓記、又云、漢王稚子石闕、戴洪趙二錄、甚詳、崇正庚辰、余之官新都、即古郫縣、道旁二闕儼然在焉、癸未余量移彰南、命工榻數本、以歸、中間殘闕共十一字、據葛君常云、吳中藏本皆同、其漫漶自何年、已不可考矣、歲次屠維大淵獻、如月望日、掇六老人識、

金石圖に曰く、闕在新都縣北十二里、官道西墓前、高一丈五尺、濶三尺、厚二尺五寸、字逕三寸五分、東向、按王君闕有二、其一云、漢故先靈侍御史河內縣令王君稚子闕、雍正九年沒於溝水、兩漢金石記、新城王文簡秦蜀驛程後記所錄、西闕正面曰、漢故先靈侍御史河內縣令王、隸書、其陰曰、西漢循吏云云、行楷直下書、又云、石闕、闕字中畫已失之矣、然此陰以今拓本驗之、乃是雒陽令一闕之陰、非河內縣一闕之陰也、文簡蓋偶誤記耳、又云拓本楷書二半行、乃王稚子闕之陰殘字也、

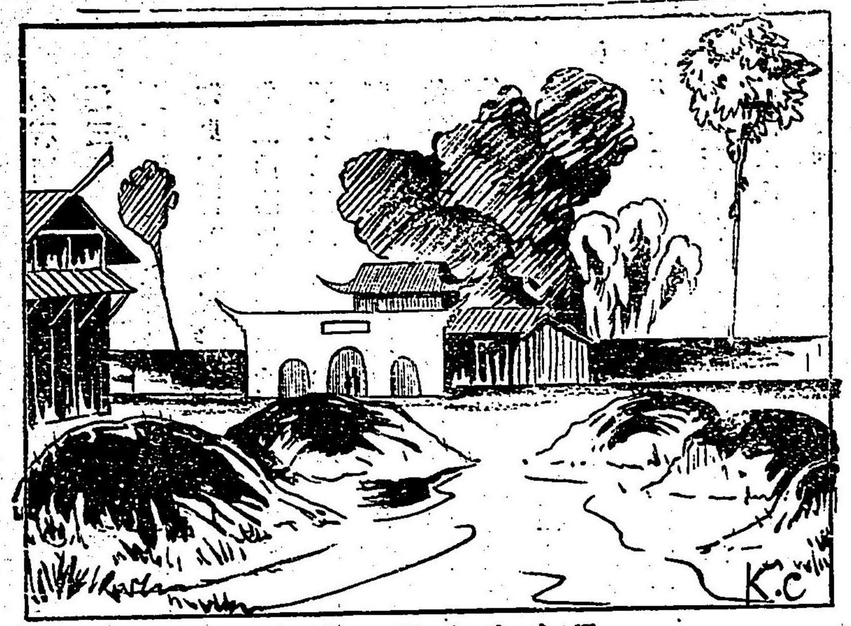
所謂雍正九年、溝水に沒したる右闕は、其後發掘したること諸書に見はされば、依然溝底に存在せん、而して其場所の如き、必ず應さに現闕の旁近なるべし、吾人は後來好古者の兎も角も一探を試みんことを希望して已まざるなり、

新都城北門を出で、灌陽に向ひ、往く二十清里にして、小邑あり、彌牟鎮といふ、鎮に入り、右折凡一町、又平野に出づ、此中武侯祠あり、即ち孔明八陣圖蹟の在る所なり、余の觀るところ、土堆六個のみ、各堆高低大小稍や異なれども、高さ五尺弱、基周三十餘尺の間に在り、每堆相距る平均一丈二三尺、其上草芊芊として生ず、武侯祠境內に在りては、他に八陣圖なりと傳ふるものあるを聞かず、祠旁常に露市あり、多く雜貨飲食の類を鬻ぐ、

彌牟鎮

八陣蹟

第四十四圖　新都八陣の舊形



諸葛鎮八陣の遺蹟

三國志諸葛亮傳に曰く、亮性長於巧思、損益連弩、木牛流馬、皆出其意、推演兵法、作八陣圖、成得其要云と、其位置陣法、構作の先後を記せず、然れども、舊志、傳へて其に四處ありといふ、(其位置入蜀十一日記に見ゆ)新都に在る者、其一なり、新都は成都の近郊なり、此陣蓋し孔明常に兵を講ずるの場なり、舊制諸書記するところ皆同じ、益州記に曰く、稚子闕北五里、有武侯八陣圖、土城四門、中起六十四魁、(魁は塊なり、小阜なり)八八成行、方一丈、高三尺と、綽略に曰く、八陣圖在新都者、峙土爲魁、植以江石、四門二首、六十四魁、八八成行、兩陣竝峙、周凡四百二十七步、魁百二十有八と、其後壘土漸く夷し、將さに舊觀を留めざらんと、

寶光寺　唐僖宗行殿

す、乾隆五十五年知縣薛諧律といふ者、之を補修し、圖蹟故の如し、然るに道光十七年の春に至り、邑人等房屋を其地に造り、大に舊蹟を毀滅す、時の知縣張奉書、之を惜み、踏査して、其侵占せられたる地界を合せ、三十六畝餘を丈計し、七十一魁を存せり、爾來七十年、復た修補の擧あるを聞かず、今秩父君見るところ、僅に六魁、四門二首の如き、並に其蹤なし、若し果して現存する者、六魁に過ぎずば、已に六十五魁を失へるなり、而して舊制に照せば、其二十一分の一のみ、棧雲峽雨日記、現に城門に象れる四旁及び土壘七十有一を存すとあり、即ち張奉書が修むる時の如し、竹添氏親しく遺堆に就き實算せられたるにや、余疑無き能はず、圖旁新都縣八陣圖記碑あり、楊愼の撰なり、明の正德十一年建つ、余其拓本を得たり、其長さ六尺五寸、幅三尺五寸、

新都城北門を出で往く二清里、寶光寺に至る、圖境柏林、外繞すに丹壁を以てす、唐の僖宗、黃巢の亂を避け、蜀に幸する時、曾て蹕を駐むるところなり、寺中行殿の遺礎ありといふ、未だ見ず、舊志に據るに、礎寶光寺後に在り、周圍一丈二尺、徑二尺、高さ一尺八寸、舊と明の御史盧雍が銘及楊升庵が詩を鐫せしが、今俱に存せず、詩、載せて縣志藝文に在り、其詩に曰く、唐帝行宮有露臺、礎蓮幾度換春苔、軍容再向蠶叢狩、王氣遂從

無垢淨光塔

馬超が墓

毘橋

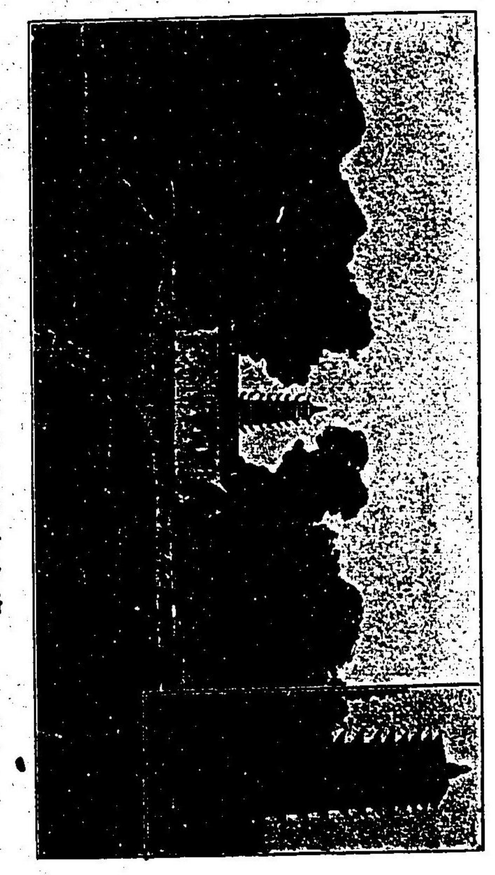
漢州

駱谷來、萬里山川神駿宅、老五風雨杜鵑哀、始知蜀道蒙塵駕、不及胡僧渡海盃と、寺中の高塔、無垢淨光塔と名く、相傳ふ、僖宗蜀に幸するや、悟達國師蹕に扈して此に至り、地を掘りて、石函を得たり、其中舍利十三顆あり、爲めに塔を營んで之を貯ふ、塔名けて無垢淨光と曰ふと、今多く寶光塔を以て行はる、塔形四角、其基凡そ二間餘方、高さ十三級、新都第一の壯觀に屬す、今の塔は乾隆年間、知縣高明遠の重修するところなり、此塔の沿革、新都縣志、藝文、黎重國が寶光寺重興道場序に見えたり、

縣志、藝文、知縣陳銛が漢故征西將軍馬公墓碑記に曰ふ、蜀漢の馬超が墓、新都の南郊一里に在りと、

縣志、藝文、知縣曹焜が重修毘橋記に曰ふ、毘橋、新都の西偏に在りと、寰宇記に曰く、毗橋側、一折石長さ丈許なるあり、古へ五丁土を擔ふの擔なりと

新都縣の西北、凡そ六十清里、漢州に至る、州城、雁江の南岸に在り、古の廣漢の地と爲す、雁江、一に洛水と名く、因て又た洛城の名あり、三國の時、劉璋が子此に據る、蜀志に先主進軍圍雒、時璋子循守城、被攻且一年、十九年夏雒城破とあるもの是なり、益部耆舊雜記に曰く、劉璋遣張任劉璝率精兵拒桿先主於涪、爲先主所破、退與璋子循守雒城、任勒兵出於雁橋戰、復敗禽、任先主問任之忠勇、令軍降之、任厲聲曰、老臣終



塔光淨垢無のそと寺光寶
藤氏父秋

不復事二主矣、乃殺之、先主歎息焉と、雁橋は今の城北雁江に架せる金雁橋なり、張任已に殺さる、後人祠を建て、奉して土神と爲すといふ、劉青黎、雁橋戰の詩あり、曰く、却怪巴州守、至竟不斷頭、輸也雁橋戰、一死足千秋と、任か墓、橋北二里許の處に在り、或は曰く橋南に在りと、

殿君平の卜筮講道臺

太平寰宇記に曰く、漢の嚴君平かト臺、雁橋の東に在り、臺高さ數丈と、新志に曰く、講道臺、州東開元寺前に在りと、程明道程伊川、其父珦か漢州に守たるに從ひ、道を講する處なり、其址今尚存すといふ、

南軒院

治北南軒院あり、宋の張南軒を祀る、南軒本と綿竹の人、曾て漢州に居る、院は其讀書の處なり、後人、先賢堂を作り、明道伊川南軒を祀る、堂舊と漢州學宮前に在り、址尚ほ存すといふ、

彭縣方面

龍興寺

新繁縣の西北四十清里、成都府の西北九十清里にして、彭縣に至る、縣城の北半清里、此地にて有名の古刹あり、龍興寺と曰ふ、寺、梁の武帝の大同二年の建立に屬す、寺中巨塔あり、高さ十丈、級を爲す十七、何れの時よりか、其東北部の一角崩壞して、唯た其三面を存す、而して又中分して二となれり、

破塔

塔上簷馬あり、其形朱雀に擬し、口、銅鈴を銜めり、舌上大同二年の四字を刻す、又銘を刻して甲子年といふ、咸豐元年、簷馬、盜に竊み去られしが、今寺中に藏して、唯一の寶什と爲す、但だ其銅鈴なるもの、傳はらず、簷馬、青銅之を作る、高一尺二寸、蒼雅喜ふべし、守僧、人に示し、常に以て誇りとせり、余特に之を影存す、書中挿むところのもの即ち是なり、

尙書敬誓、庸、蜀、羌、髳、微、盧、彭、濮人の彭、即ち今の彭縣なり、以て其年所の久しきを知るべし、

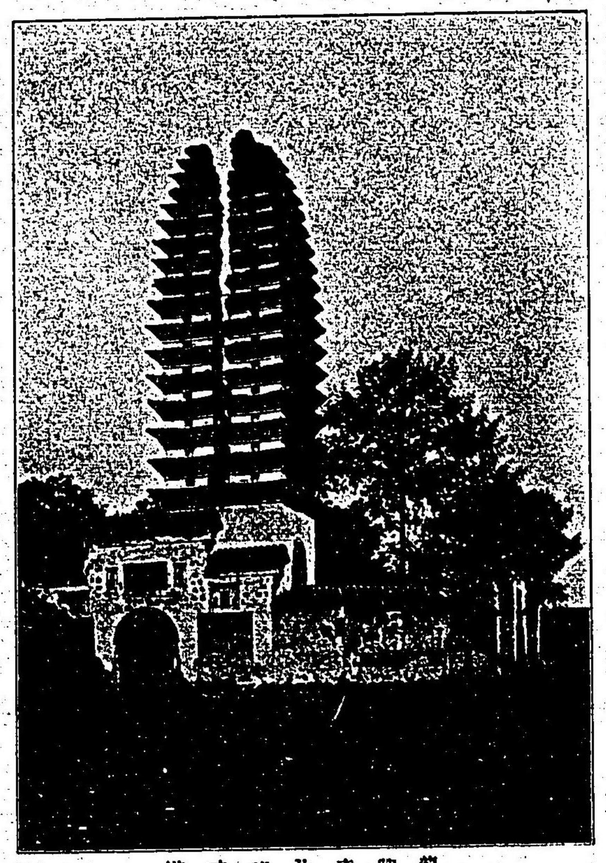
丹景山

城北三十五清里、丹景山あり、縣中遊覽最勝の處と爲す、山上一庵あり、白衣と名く、巷後牡丹園あり、園甚だ廣からず、花亦た甚だ盛ならずと雖も、蜀の牡丹を言ふもの必す先づ指を丹景に屈す、彭縣の牡丹、其由來極めて久しく、往古に於ては、洛陽の牡丹と、其盛を媲べたり、中ごろ花勢稍や衰へたりしが、新種を洛陽より買ひ來り、縣中各處に種え、濃艶の名、天下に聞ふ、其後再び衰へ、遂に舊時に復せず、僅に殘色を丹景の一角に留むるのみ、彭縣牡丹の沿革及び花品は陸游牡丹譜に詳なる外、又陸游花釋名、胡元質か牡丹譜節錄に見ゆ、今具錄せず、

丹景の牡丹

葛仙山

丹景山の東、葛仙山あり、彭中の名山と爲す、山一に葛瓊と曰ふ、觀あり、葛仙と名く、山



龍興寺及び破塔

破塔の簷馬及び古鏡

中三十六洞穴あり、余其中の朝天洞を探る、道士炬を翳して導をなす、洞、始は地に直穿す、徑凡四尺、梯を垂れて之を下ること一丈にして横穿す、其高さ凡七尺、進むて其奥に至れば、無數の蝙蝠驚いて人を撲つ、之を捉へ見るに皆菊頭蝙蝠なり、

葛仙山、彭縣志山川志に詳なり、其記に據るに、洞、名を著して出すもの、凡そ十六、每洞皆異あり、葛璜山唐書地理志に見ゆ、王勃傳に曰ふ、勃劍南に客たるや、曾て葛璜山に登り、慨然として諸葛武侯の遺を思ひ、詩を賦して志を見すと、

彭縣の西北、群山連疊、沱江の源、大半此間に出づ、彭縣志大別して北山、西山、東山の三幹に分つ、各山の名、爰に備載せず、北山脈中、尤も名を著すを玉壘山と爲す、玉壘一名を背光と曰ふ、縣城を距る九十清里、山上玉壘の二大字の石刻有り、此山左右兩臂、横亙壘の如し、山中の玉石巖、美玉を産す、華陽國志又た山間壁玉を出すと稱す、山名の因りて起る所以なり、左思蜀都賦包玉壘以爲宇、郭璞江賦、玉壘作東別之標、杜詩玉壘浮雲變古今、李詩天廻玉壘成長安、皆此山を指す、西山脈中、縣城を距る五十清里、彭闕山あり、其東、陽平山あり、山一に金城と名く、縣城を距る、西北四十六清里と爲す、山中太平寺あり、古の陽平化なり、五代史、蜀王衍與其太妃遊青城山、遂至彭州陽平化とあるもの、之を指す、又王勃が益州九隴縣夫子廟碑に云ふ、霜鋭墨

玉壘山

太平寺

龍懐山

天彭山

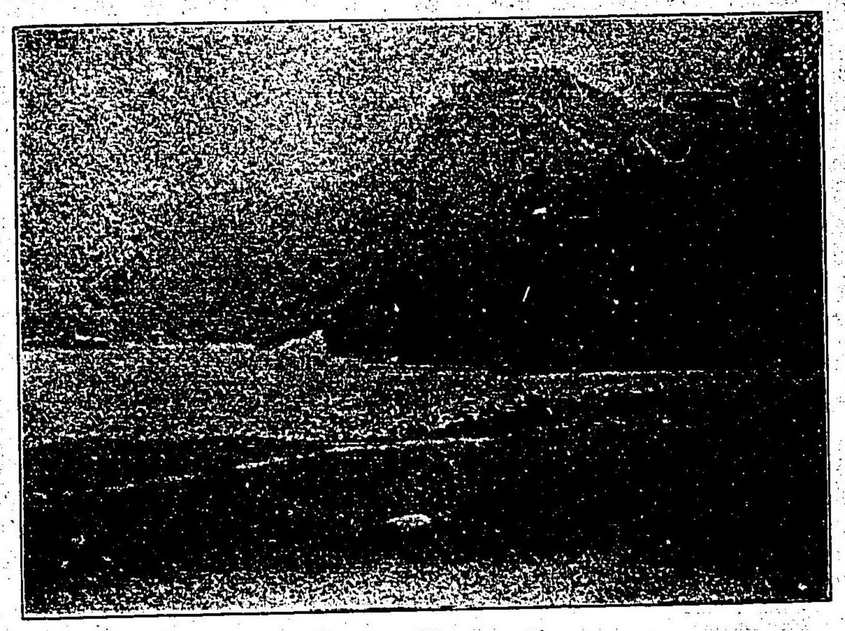
灌縣

二郎廟

明、下映金城之域の金城、即ち亦た今の太平寺に外ならず、陽平山の東南、龍懐山あり、龍懐寺、山東に在り、王勃か彭州九隴縣龍懐寺碑の立つ所となす、丹景山、其東南に位す、東山脈に在りては、天彭山尤も高し、其山、縣城の北六十七清里に位す、天彭山の東、崌山あり、山中の小魚洞、細鱗魚を産す、其魚、水經注の所謂鱤魚なり、蜀都賦、嘉魚出于丙穴、亦た復た是なり、葛瓚山又其東南に在り、彭縣の山勢、大略右の如し、而して成都平原の西北部は之を以て限界となす、

彭縣の西七十五清里にして灌縣に至る、縣は秦時の蜀守李冰か岷江疏水工事を行ひたる處として、獨り四川のみならず、支那全國にても、著名なる處なり、その城、山を負ひ、江に瀕す、其江は内江にして、即ち李冰の鑿するところなり、縣城に入り、西門を出で、江に沿ひ、山岩の上を進めば、一關あり、之を鎮夷關と名く、古玉壘關是なり、關を出で、江岸に下れば、巨廟三所あり、東なるを禹王宮と曰ひ、西なるを楊泗廟と曰ふ、中央に位するを二王廟と曰ふ、

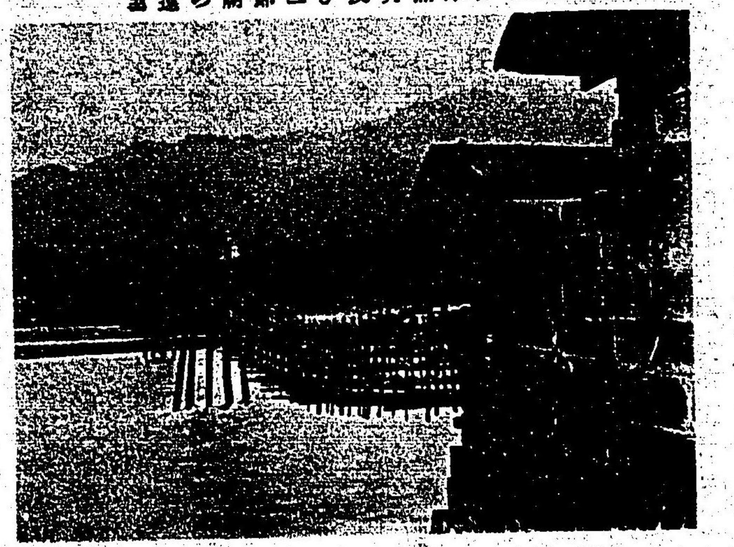
二王廟一名二郎廟、李冰及び其子二郎の木像を祀る、別に一小殿、廟中に在り、一女人の像を祀れり、想ふに是れ李冰夫人なり、廟内は常に遠近よりの參拜者を以て充たされ、香燭曾て霎時も絶ゆることなく、蜀人尊びて禹廟に亞ぐ者となす、以て其澤の



二郎廟

灌縣附近の郊野

東橋分水魚嗜及び二郎廟の遠望



同上東橋の近景

内江外江

索橋

離堆

大なるを知るべし、廟前一水西より來る、之を岷江と爲す、廟下に至りて、分れて兩水と爲る、隔つるに一長島を以てす、島の此方なるを內江と曰ひ、彼方なるを外江と曰ふ、島の上端を分水魚嘴と名く、此處を中央點として一大釣橋を架せり、灌縣の索橋即ち是なり、橋長さ九十六丈、廣さ約一丈强、載するに木板を以てせり、橋索皆竹製に係る、其兩端の大さ、實に圍一尺有五寸に達せり、橋端の地は、支郡固有のセメントを以て固め、六穴を穿ちて六大木桿を植う、桿長さ九尺、徑一尺を超ゆ、此くの如く大ならざれば、以て九十六丈の長橋を支ふるに足らざるなり、凡そ幾條の橋索、悉く此桿に卷き附けらる、索弛めば、人桿を廻して之を張る、其制の簡にして、其用の便なる、創意者の苦心を見る、

分水魚嘴より流に沿ひて下り、縣城前に至れば、一巨巖、內江に臨みて突立す、之を離堆と名く、堆上、廟あり、即ち伏龍觀なり、一亭、堆の上端に立つ、亭基廣さ十疊を敷くべし、亭後空地若干坪、環らすに石欄を以てせり、欄に倚りて江に俯す、足、水面を去る、目測凡そ三丈を算す、水、堆に觸れて怒し、白を噴き、沫を飜し、蛟龍躍り、龍體狂ふの概あり、離堆古へ對壁の寶瓶口と石地相連れり、李冰之を鑿斷し、以て江を導けるなり、所謂內江、即ち此を指す、江、城下に至りて、兩枝となり、遂に分れて數十條となる、皆李氏

父子の疏する所なり、餘澤無窮、人以て其功禹に亞ぐとなす、亦た宜ならずや、

岷山江を導く

岷江、源を四川松潘廳の西北なる岷江に發す、即ち岷山、江を導くといふ者是なり、江源二あり、南源を那克都母精山と爲し、北源を岡出山と爲す、其の初めて流るゝや、極めて微弱、所謂發源濫觴なるもの、其水、松潘、茂州を經て、成都府領に入り、灌縣に至るや、乃ち分れて內外兩江となる、外江は、成都府內を過ぐる間、數十に分派し眉州の界に及び、各派を總滙し、別に叩州河を受け、眉州に入り、內江の一枝たる郫江に合し、南流して嘉定府に至り、大渡河と合し、東南流して叙州府に至り、金沙江と合して、楊子江となる、內江又た數十枝に分れて東流し、彭縣高地より來れる諸水と合し、更に東流して、金堂縣、趙家渡に至り、茂州より來れる馬尾河を受け、會して沱江と爲り、西、成都を問てゝ、外江(即ち岷江)と雙流を成し、南流して簡州、資州、富順等を經、東南流して、叙州の下流なる瀘州に至り、楊子江に注ぐ、故に沱江は內江、彭縣高地に發する諸水及茂州の水を合せたるものにて、專ら內江の下流とすべからざれども、世尚ほ冒すに內江の名を以てせり、王漁洋か詩、錦官城東內江流、錦官城西外江流、直到江陽始相見、暫時小別不須愁、即ち此水を謂ふなり、

內外江考

內江の外江は、右の如し、而して內江は趙家渡以上灌口以下の間、外江は、彭山以上、灌

灌口の岸角水分嶺

口(岷江の内外兩江に分るゝ點を指す)以下、各支派數十股に分れ、此間、蜀水中第一の紛紛を致せり、其中何れか是れ外江の正流、何れか是れ内江の正流、歴代地理家の言ふところ、異同錯出、最も辨し難し、

事理を推して考ふるに、李冰以前、岷江は、岷山より松潘茂州を經て成都府領に入り、唯だ今の外江の派流を生じたるだけにて南流せり、此時未た外江の名あらざる論無きのみ、何となれば、李冰、離堆を穿ち、岷水を導きたるより、岷分れて二大派となり、此に始めて内外江の稱を出せしを以てなり、李冰、離堆を開鑿したるは、疑も無き事實なり、而して其運河の幹線の、今の郫江たること諸史の一致する所なり、然れども、郫江の支派が、悉く李工に成れるものかは、若しくは支派中の某某河が李氏の手に開かれたるかは、古今尤も議論の存するところにして、之を考定せんば昕夕の業に非ざれども、吾人は郫江は勿論、其各支流に由れる灌利の過半は、之を李氏の遺功に歸せんと欲するなり、

離堆は其巖に名くる稱なり、蓋し離は析離の意、堆は崒と通じ、高く崒嵂たる意にて、其巖、時時崩陁析離して、ころころと轉下すること、鳥の食を啄むに當り、ぴよッぴよッと進むが如きに象れるなり、離堆の上游、鎮夷閣下の巖壁、本と李冰が治水の法

として垂れたる深淘灘低作堰の六大字を書す、此字今尚ほ存するや否やを知らず、

李冰の像

李冰は秦の昭王の時の人なり、四川總志に曰く、李冰仕秦爲蜀郡太守、行部至湔山、見水爲民患、使其子二郎作三石人、以鎮江流、五石犀以壓水怪、鑿離堆山、以避沫水害、穿三十六江、灌溉稻田、國號天府、野稱陸海、冰之功偉矣、と、諸、李冰の傳として記するところ、概ね此くの如し、其三十六江と稱するは、大數を擧ぐるのみ、必ずしも實數を以て見る可らざるなり、

楊妃池

灌縣の東二十清里に楊妃池あり、妃の父楊玄琰、蜀州の司戶たる時、妃を此地に生む、妃幼時誤て此池に墮ちたりと傳べられ、因て一名を落妃池と呼べり、古蹟といふ程ならねど、楊貴妃の生地を考ふるに、少補なしとせじ、

青城山

灌縣に、峩眉山と並ひ稱せらるゝ名山、青城山あり、成都よりの避暑地として、尤も便利の處なり、山は灌縣の西南大約六十清里、成都の西北大約一百清里に位す、高さ山脚より計りて三千尺と稱す、其中腹までは轎に坐して躋るを得べし、山上巨廟あり、登山の客以て宿房に充つ、余等一行四人にて遊び、廟中に一泊し宿賃として二元を給せり、勿論旅店にあらざれば、實は宿泊料なるも、名義は喜捨に外ならず、蜀中名山最も多し、一一登攀を試みんこと、身蜀に居るものと雖とも、能く爲すところに非ず、若し成都を中心として、遠く峨眉に躋り、近く青城を探らば、尋常林泉の遊に於て、恨みなきに庶からんか、

早發新都驛　宋　陸游

喔喔江村鷄、迢迢縣門漏、河漢縱復橫、繁星月如晝、愛涼趣上馬、未曉聞兩候、高林起宿鳥、絕澗落驚狖、寺樓揷蒼烟、沙泉瀉幽竇、我行忽萬里、坐嘆關河溜、官如廣文冷、面作拾遺瘦、今年盍歸哉、勿落春雁後、

彌牟鎮孔明八陣圖　宋　王剛中

我稽八陣圖、規模載方冊、竭來鎮西川、夔門覩壘石、賦詩數百字、字字究來歷、進涉溪州西、彌牟鎮之北、平原列堆阜、灘石同一式、細思作者意、孔明有深策、高岸或爲谷、灘石存遺蹟、滄海變桑田、平原猶可覓、故今兩處存、千載必一得、再歌遂成篇、當有智者識、

過彌牟鎮閱武侯八陣圖　清　劉侃

彌牟鎮前秋色碧、臥龍祠下秋蟲泣、我來息馬一登臨、荒碑重拭龍蛇跡、西風吹草綠烟開、萬里蕭蕭滿目來、縱橫欲吐風雷氣、錯落還如星斗回、圖中雲鳥人不識、圖上遺塵人共惜、蜀國山河幾變更、中原鹿走無時息、古來戰塵滿乾坤、落葉隨風不復存、何似彌牟一坏土、

勢抗玉壘爭崑崙、

彌牟鎮道中望八陣圖遺址　清　王士正

落日彌牟道、霜風百戰場、青天廻玉壘、遠樹出華陽、陸海三都潤、雄圖八陣荒、臥龍空故蹟、駐馬惜降王、

彌牟鎮八陣圖遺址　清　鄭王臣

臥龍氣卷中原土、彌牟原頭秋講武、纍纍石藉儼成行、二十八宿羅部伍、風雲合沓龍虎纏、直追風后師尚父、常山蛇勢非其倫、鄭國魚麗詎足敵、想見當年號令嚴、變化從心揮白羽、琱戈貝胄出祁山、魏人如鼠蜀如虎、司馬家兒走且偃、王雙張郃安能禦、長驅欲蹴鄴都平、往繫曹叡尸諸俎、大星一夜墮營中、長使英雄淚如雨、臨邛火非久無光、彌牟鎮圖留萬古、風旗雲馬神歸來、夜夜荒原聞戰鼓、

桂湖曲送胡孝思　明　楊愼

君來桂湖上、湖水生清風、清風如君懷、灑然秋期同、君去桂湖上、湖水映明月、明月如懷君、悵然何時輟、湖風向客清、湖月照人明、別離俱有憶、風月重含情、含情含情重、含情攀留桂枝樹、珍重一枝才、留連千里句、明年桂花開、君在雨花臺、隴禽傳語去、江鯉寄書來、

新都題楊升庵先生故宅　清　王士正

侍臣遷謫後、常憶泰陵園、詞賦留金闕、生還望玉門、交州無士燮、南海得虞翻、廢宅西風裏、連帷桂樹存、

謁楊升庵先生祠　清　李調元

蔓草高墳最凜碑、楊氏祖宅繚垣頹、公子戍死滇南陲、始康郭外留荒祠、當時議禮主者誰、撼門一慟先生爲、紛紛濮議何其卑、程朱正論我守之、批鱗履尾何敢辭、吾輩不朽方在茲、大禮未定身先危、折檻牽裾忠見疑、瑤蕚首事居貨奇、豐坊曲論天子毗、逢君不顧千載嗤、明堂聚訟復參差、餘寄得毋鈐山遺、嗟哉南竄無歸期、越嶲老過群相嬉、蟒膽爍腐濕淋漓、天使老啖蛤雌雄、了髻盤頭面傅脂、插花擁妓相嫵媚、胸中錦繡何處摛、醉來裙衫當臨池、吐氣蟠屈成蛟螭、鵂兒撫掌都盧吹、簪會峒獠皆來窺、丹鉛錄成識者稀、何異正則離騷詞、小橋獨樹明斜眺、聲聲鵑鴂啼竹籬、松杉一逕流水澌、古屋破窓風颼颼、葛巾草屨山人姿、遺像突兀難委隨、湖陽僧耳同一悲、淚沾楓菊爲殘萎、先生亮節夙所思、況逢瞻拜欽丰儀、試哦海畔孤臣詩、不覺泣下如綆縻、

遊桂湖懷升庵先生　清　馬永修

曾從墳下拜先生、爲訪遺踪又入城、丹桂香中傾耳聽、月明恍覺有書聲、

新都道上見桂花　清　王夢庚

楊家雙樹久經摧、又見黃金粟一堆、色潤尚含宵露濕、香濃恰趁曉風催、子飄鶯嶺龍宮外、種自瓊樓玉宇來、愧我征衣塵未撲、一枝披拂幾徘徊、

井絡　唐　李商隱

井絡天彭一掌中、漫誇天險劍爲峯、陣圖東聚夔江石、邊柝西懸雪嶺松、堪歎故君成杜宇、可能先主是眞龍、朅來爲報奸雄輩、莫向金牛訪舊蹤、

題丹景山金華宮　前蜀　徐后

碧烟江霧撲人衣、宿露蒼苔石徑危、風巧解吹松上曲、蝶嬌頻采臉邊脂、同尋僻境思携手、暗背遙山欲畫眉、好把身心清靜處、角冠霞帔事希夷、

丹景山至德寺

周圍雲水遊丹景、因與眞妃眺上蜀、晴日曉升金晃曜、寒泉夜落玉丁當、松梢月轉金栖影、柏徑風牽麝食香、虔爍六銖宜禱祝、惟祈聖祚保遐昌、

憶天彭牡丹之盛有感　宋　陸游

常記天彭送牡丹、祥雲徑尺照金盤、豈知身老農桑野、一朵妖紅夢裏看、

遊龍興禪院　清　許儒龍

爲訪前朝寺、聊成海暮遊、塔開危欲墮、碑久剝難留、古寺憑僧詫、殘花引客愁、坐見西嶺日、欲去重回頭、

青城山　唐　岑參

五嶽之丈人、西望青瞢瞢、雲開露崖嶠、百里見石稜、龍谿盤中峯、上有蓮華僧、絕頂小闌若、四時嵐氣凝、身同雲虛無、心與谿清澄、誦戒龍每聽、賦詩人則稱、杉風吹袈裟、石壁懸孤燈、久欲謝微祿、誓將歸大乘、願開開士說、庶以心相應、

再題青城山　宋　范成大

萬里清遊不厭情、雙旗換得一枝節、來從井絡直西路、上到江源第一峯、海內間身輸我佚、山中佳氣爲人濃、題詩試刻巖前石、付與他年蘚暈重、

離堆行

殘山狠石雙虎臥、斧跡鱗皴中鑿破、潭淵油油無敢唾、下有猛龍蟄鐵鏁、自從分流駐石門、西州杭稻如黃雲、封羊五萬大作社、春秋伐鼓蒼烟根、我昔官稱勸農使、年年來激西江水、成都火米不論錢、絲管相隨看蠶市、款門得得酹酒尊、椒漿桂酒刪類輩、妄欲一語神豈聞、更願愛羊如愛人、

離堆伏龍祠觀孫太古畫英惠王像　宋　陸游

岷山導江書禹貢、江流就山山爲動、嗚呼秦守信豪傑、千年遺跡人猶誦、決江一支溉數州、

至今禾黍連雲種、孫翁下筆開生面、茂樹高冠摩屋棟、徙木遺風雖峭刻、取材尚足當世用、
寥寥後世豈乏人、尺寸未施讒已乘、要官無責空賦祿、軒蓋傳呼眞一閧、奇勳偉蹟曠世無、
仁人志士臨風慟、我游故祠九頓首、夜遇神君了非夢、披雲激電從天來、赤手騎鯨不施鞍、

宋　范成大

戲題索橋

織篦勻鋪面、排繩疆架空、染人高曬帛、獵戶遠張弧、薄薄雖承雨、翻翻不受風、何時將蜀客、
東下看長虹、

文曰蜀故侍
中楊公之闕

自蜀赴秦驛程

蜀道の奇は三峽と雲棧とに在り、恨むくは余の行程、往復並に三峽に係り、未た北路の勝を踏まず、本と應さに其記無かるべきなり、然れども、已に峽を記して、獨り其棧に闕ぐ、甚た心に歉焉たるものなくんばあらず、乃ち群書を參考し、又二三本邦人の實跡するところを交へ、以て本篇を作る、最近の入秦者友人和田君、喜八郎特に訂閲を賜はる、即ち讀者幸に以て憑虛の文字と爲すなかれ、

天廻鎭

新都縣

第一日　成都城北門を發し、五清里にして古昇仙橋即ち今の駟馬橋を渡り、更に五清里、昭覺寺を右手に望み、又五清里將軍墳を經、北する十清里、天廻鎭に至る、鎭人家三百餘、成都以北初めて逢ふとことろの場市なり、鎭、古、玄宗蜀に幸するより還り、駐を駐むるところ、因て天廻を以て名く、李白の詩、天廻玉壘作長安是なり、此地古へ天廻山と名くる山あることは圖經に見ゆ、今、山と覺しきもの見當らざるは、陵谷形を變したるなるべし、鎭を去る二十清里餘、新都縣城に至る、成都を距る四十五清里

第二日　新都城を發し、北行凡そ十清里、王稚子闕を過ぎ、又た北する五清里彌牟鎭に至る、鎭一名唐家寺、即ち孔明八陣遺堆の在る所なり、進むで清白江を渡り、藍家店、

萬人墳

房公湖

漢州城

殿君平の舊居

姚景橋を過ぎ、又た馬木河を渡る、橋あり石梯橋と名く、橋下一種の緇土を出す、以て墨に代ゆべしといふ、其北五清里、路西萬人墳といふあり、蜀碧に据るに、献賊漢州を略す、るや、州人を城西に驅り、盡く之を屠れり、楊展、賊を追ふて漢州に至り、及はず、即ち其遺骨を封して還り、其碣に識して萬人墳と曰ふと、以て献賊一時の慘猛を想見すべし、萬人墳を經れば、故の房公湖の遺地に至る、湖は、唐時、房琯、刺史たりし日、鑿るところ、一名西湖、廣さ數百畝、水中洲島回環、亭堂臺榭、甚だ風致を極む、同時、高適、杜甫皆詩を其中に賦す、後ち李德裕、劉禹錫、鄭澣諸人亦た相唱酬し、傳へて盛事となす、宋の熙寧中奏して田となし、さしも の名池も其蹟を存せざるに至れり、今人此地を過ぎる者、多く其名流周旋の址たるを知らざるなり、房公湖より東北し、直ちに漢州城に入る、城、新都を去る五十清里、

第三日　漢州城北門を出づ、門外、一川左より來る、之を雁江とす、其橋は即ち金雁橋なり、橋東殿君平の卜臺の遺址あり、碑を樹て、題して殿君平舊居と曰ふ、雁江を過ぎ沈犀橋を渡り、雲阪山西を往き、二十一清里にして小漢鎮に至る、漢州、德陽間、第一の巨邑と爲す、鎮北數里、大河あり、石亭河と名く、即ち水經注所謂洛水なり、河を去る十清里、大漢鎮に至る、又十清里竹林舖に至る、其東北十清里、德陽縣に達す、漢州城を去る五十三清里、

姜子遊の故里

桑宓の故里

城内、東漢の孝子姜士遊の故里あり、其事蹟詳に後漢書に見えたり、城北五清里、五里堆あり、漢の大司農秦宓の故里なり、宓字は子勅、廣漢綿竹(今の德陽縣)の人、少うして才學を以て著る、同郡に王商といふあり、劉璋の時、仕へて治中從侍たり、書を宓に與へて曰く、貧賤困苦、亦何時可以終身、卞和衒玉以燿世、宜一來與州尊相見と、宓之に答ふる書、文辭最も矯、其書に曰く、昔堯優許由、非不弘也、洗其兩耳、楚聘莊周、非不廣也、執竿不顧、易曰確乎其不可拔、夫何衒之有、且以國君之賢、子爲良輔、不以是時建蕭張之策、未足爲智也、僕得隱背乎隴畝之中、誦顏氏之簞瓢、詠原憲之蓬戶、時翱翔於林澤、與沮溺之等儔、聽玄猿之悲吟、寫鶴鳴於九皐、安身爲樂、無憂爲福、處空虛之名、居不靈之龜、知我者希、則我貴矣、斯乃僕得志之秋也、何困苦之戚焉と、劉備已に益州を定るに及び、宓を辟して從事祭酒と爲す、備將さに東の方、吳を征せんとす、宓、天時を陳し、必ず其利無きを言ふに因り、獄に幽せらる、後貸され出づ、建興二年、丞相亮、益州の牧を領し、宓を選んで迎へて別駕と爲す、吳使張溫を遣はして來聘するに當り、百官皆往き餞す、衆人皆集りて、宓未た往かず、亮累りに使を以て之を促かす、溫、其何人なるやを問ふ、亮答ふるに益州の學士たるを以てす、宓至る、溫問ふて曰く、君學べるか、宓か曰く、五尺

の童子も皆學ぶ、何んぞ必ずしも小人のみならん、溫復た問ふて曰く、天に頭あるか、必か曰く、之れ有り、曰く、何れの方に在るか、曰く、西方に在り、詩に曰く、乃眷西顧と、此を以て之を推せば、頭西方に在り、曰く、天に耳あるか、曰く、天高きに處りて、卑きに聽く、詩に云ふ、鶴鳴九皐、聲聞于天と、若し耳無くば、何を以て之を聽かん、曰く、天に足あるか、曰く、有り、詩に云ふ、天步艱難、之子不猶と、若し足無くば、何を以て步せん、曰く、天に姓あるか、曰く有り、何の姓ぞ、曰く劉、曰く、何を以て之を知る、曰く天子姓は劉、故に之を以て知る、曰く、日、東に生するか、曰く、東に生すと雖も、西に沒すと、溫其警に服す、必學醇ならざれども、其才の奇、往往此くの如し、官左中郎將長水校尉を歷て、大司農に至り、建興四年を以て卒せり、此餘詳に三國志本傳に載す、今具記するに遑あらず、

五里堆を去り、進む五清里、牛耳舖に至る、又十清里仙人橋に至る、秦時韓仲修棘の所となす、橋名之に由りて起る、橋北五清里、孟家店に至る、漢州城を距る七十八清里、

第四日　孟家店を去る、北三清里許、黃許鎭に至る、人家三百餘、鎭は、漢時、綿竹の故城なり、漢の更始二年、公孫述、漢將李寶と戰ひたるところとなす、又炎興の初、諸葛瞻、鄧艾を拒くところなり、又太平寰宇記、綿竹の故城、德陽縣北三十五里に在りといふもの、亦た此處に外ならず、鎭北一河あり、之を綿陽河と爲す、河北十五六清里にして鹿

鹿頭關

頭關に至る、關、鹿頭山上に在り、相傳ふ、往昔張鹿頭といふ者、此山に居る、因りて以て名と爲すと、按ずるに、鹿頭山、今の白馬關にして、今の白馬關、即ち古の鹿頭關なり、杜市鹿頭山の長詩、鹿頭何亭亭、是日慰飢渴、連山西南斷、俯見千里豁の句、即ち之を指す、關側、諸葛公龐靖侯祠あり、孔明及び軍師中郎將龐統を祭る、其墳祠背に在り、祠、明末獻賊に燬かる、今の祠は後の重修に係る、祠門石幾猊、其一を存す、尙ほ是れ災に免るゝものなり、祠旁、碑あり、龍鳳二公祠と題す、蓋し龍は孔明を指し、鳳は龐統を指す、蜀書の註に曰く、襄陽記曰、諸葛孔明爲臥龍、龐士元爲鳳雛、司馬德操爲水鏡、皆龐德公語也、公襄陽人、孔明每至其家、獨拜牀下と、統字は士元、襄陽の人、少うして朴純、潁川の司馬徽一び之と語り、甚た之を異となし、稱して當さに南州士の冠冕たるべしといふ、これより名漸く顯る、後ち劉備に仕ふ、劉未た甚だ重んせず、吳將魯肅が、書を備に遺り、其百里の才に非ざるを言ひ、又た諸葛亮が推稱するに及んで、備與に語り、始めて大に之を器とし、任じて治中從事と爲す、眷遇諸葛亮に過きたり、備、劉璋を成都に襲ふに隨ひ、衆を率ゐて雒縣を攻む、途、鹿頭關下を經るとき、流矢に中りて卒す、備痛惜して措かず、其父を諫議太夫に拜し、統に追賜するに關內侯を以てし、諡して靖侯と

龍鳳二公祠

曰ふ、

血墳
落鳳坡

鹿頭關を出て下路に就く、鹿士元の血墳、路左に在り、靖侯盡忠處と題せる碑を立つ、其地稱して落鳳坡と曰ふ、即ち士元の命を委する所、落鳳坡の稱、則ち後人、元の死所に因りて名くるところに屬す、鹿頭關、實に東西兩川の要道たり、唐の建中四年、劒南西山兵馬使張朏、亂を作して成都に入らんとす、鹿頭の戍將叱千といふ者、討ちて之を平げたり、元和元年劉闢西川を以て叛く、高崇文に詔して之を討す、闢乃ち鹿頭關に城き、八柵を連ね、兵を屯して拒守す、崇文之を敗る、闢更に柵を關以東の萬勝堆に置く、崇文又た之を奪ふ、前後八戰して、闢遂に擒にせらしが、常に鹿頭を以て其本據とせんことを務めたり、中和四年楊師立東川を以て叛く、高仁厚西川より進みて討ち、德陽に屯す、師立、將鄭君、雄をして鹿頭關に據りて之を拒かしむ、仁厚曰く、之を攻めば、彼れ利にして我れ傷すと、因て二寨を列ねて之を圍み、衆を擧げて關下に陣す、君雄出で戰ふ、利あらず、關を棄てゝ走る、後唐同光三年、李紹琛蜀を侵す、綿州に至るに、綿江の浮梁、蜀人の斷つところとなれり、紹琛曰く、吾、懸軍深く入る、利速戰に在り、但た百騎を以て鹿頭關を過ぎるを得ば、彼れ迎へ降るに暇あらざらんと、遂に馬に乘りて徒涉し、關に入り、進んで漢州に據る、果して蜀人出で迎へて降れり、其險要概ね此くの如し、寔に杜甫か連山西南斷俯見千里豁といひたりし如く、關より以西、七

鹿頭關の要害

四川の曰明
大霍山
龍洞

皆坦平なるを以て、西川恒に恃んで、此を以て巨防とは爲すなり、

鹿頭關の西、五清里を隔てゝ大霍と名くる一山有り、山、一に羅瓌と呼ぶ、太平寰宇記に、羅瓌山、在羅江縣西南、羅公遠曾隱于此といふもの是なり、山上龍洞と名くる巨洞あり、其大なる、葛仙山の三十六洞中にも其類あらざるに似たり、誌の記する如くんば、洞、其口に當りて一大石を横ふ、口初めは甚狹く、僅に一人の佝僂して入るに堪ゆ、進む數歩、漸を以て濶く、廣さ六七人を容るべく、高さ約一丈許、其旁溝水あり、流聲瀏瀏、洞に隨ひて曲折す、兩崖修潔、人の洒掃したる如し、進むて洞口を去る約十清里の處に至れば、巨石あり、形磨磐に似て、徑凡そ一丈、其面光平面を鑑すべし、磐中一柱突起す、高二尺許、宛然たる玉筍なり、嘗て人あり、炬を時して洞に入る、行く數晝夜にして窮る所を得ず、此中異類無し、唯た無數の大蝙蝠の、蒲扇の如く、車輪の如きものを見たりと、又關の東南三清里、羅眞觀あり、廟宇甚だ壯麗、滿山松柏、皆數百年のもの、觀中古銅鼎を藏す、製作最も巧雅となす、

萬安驛
玄宗駐蹕の蹟

鹿頭山を下り、行く十清里、企仙亭に至る、又二清里、羅江縣城に至る、城、德陽縣城を去る五十清里、羅江は古の萬安なり、唐の天寶元年より改めて羅江と稱す、玄宗蜀に幸し、萬安驛に至り嘆じて曰く、一安且つ不可、況や萬安をやと、乃ち輦を回らして眞明

寺に宿す、此寺尚存するや否やを詳にせず、昔時、驛中玄宗親書の一安且不可の碑ありしと傳ふ、宋の張縯、萬安の詩あり、曰く、勁兵重鎮付胡奴、毆雀毆魚計自疎、地入萬安知幾許、堪憐此地始回車と、城北一清里接王亭の遺址あり、亭、縣令、玄宗を祗候する爲めに營むところと云ふ、城北に出で羅江を過ぐ、江一名潺水、水經注に所謂五城水是なり、羅江を去る三十清里、金山舖、又十清里、鷄鳴橋、又十清里、新店を經て皂角舖に至る、孟家店を距る九十清里、

綿州

思賢堂

第五日　皂角舖を發し、行く凡そ三十餘清里、綿州城に入る、城、涪江の西岸に枕す、古の涪縣なり、今、成都府に直隸し、德陽、綿竹、安、梓潼、羅江の五縣治を領す、州城、乾隆三十七年の夏、涪水の溢るゝに因りて壞る、乃ち州治を羅江に移す、是に於て名けて舊綿州と曰へり、後又た現地に復置す、思賢堂、治東に在り、揚雄、李白、杜甫、樊宗師、蘇易簡、歐陽修、司馬光、蘇軾、黃庭堅九人を祀る、又六一堂あり、宋の歐陽觀、此州の推官たりしとき、子修を城東の漁父村に生む、後人因りて記念の爲めに作るところの堂なり、涪江を渡り、仙人橋、濫泥溝、炕香舖、蔡家舖の數驛を經て、沈香舖に至る、涪江より此に至る、大約三十七清里、皂角舖を距る六十七清里、

第六日　沈香舖を發し、東北に向つて進む、十餘清里にして銅瓦舖に至る、更に十清里、魏城驛に至る、驛、西魏の魏城縣なり、此地鹽を產するに因り、唐の武德三年、改めて鹽泉縣を置く、驛繞らすに小城壁を以てす、尚ほ當年一縣たりし時の殘影を認むべし、市景蕭索たれども、人家五百餘を過ぐ、二十清里、宣化驛に至る、十清里、石牛舖に至る、邑外一石牛を置く、地名之に由る、又十清里、板橋驛に至る、二十清里、梓潼河を過ぎ、梓潼縣城に入る、沈香舖を距る八十清里、河の此岸を去る西五清里、長卿山あり、山、舊名神山、漢の司馬相如、書を讀むところ、玄宗、蜀に幸する時、遙に此山を望み、相如が遺蹟あるを聞き、名を長卿山と賜へり、王士正、詩あり、深舟潼水碧潺湲、一抹青峯想玉顏、留得文君好眉黛、渺雲初散長卿山と、山上長卿寺あり、縣城南門外後漢の李業が石闕あり、漢侍御史李公之闕と題す、其闕、漢隸を以て兩行に分書す、金石史上極めて著名なり、業、字は巨淵、梓潼の人、公孫述が聘するを拒み、毒を仰いで死せり、

長卿山

李業の闕

送險亭

劍泉

第七日　梓潼を發す、北行十清里、石表あり、題して送險亭と曰ふ、其亭路の左側に在り、秦より蜀に入る、此に至りて、險始めて盡く、送險を以て名くる所以なり、然れども、入秦の客は迎險亭とこそはいふべけれ、これより十清里にして七曲山に至る、山脚に觀音廟あり、廟西の石壁下、清泉を出す、因て水觀音の名あり、泉は即ち古の劍泉なり、觀音廟より上り、千佛崖に至る、崖間多數の佛像を鐫せり、又た進むて峯頂に至る、

文昌宮

文昌神考

張亞子廟あり、廟の附近、桂香殿、毘連子母聖殿、啓元殿、天尊殿あり、これ皆文昌の配享なり、

文昌宮は此國到るところに在り、尊むで文神と爲すこと、猶ほ我が首廟の如し、而して其七曲山に在る者、全國の宗本なり、史乘に見ゆるは、漢書地理志に、梓潼五婦山、神廟ありとあるを以て初めとなす、其神、本と秦の惠王時の人なり、圖志、續搜神記、續文獻通考等を併せ考ふるに、神、姓は張、名は亞、其先越嶲の人、道術を以て著る母の仇を報するに因り、徙りて劍州の七曲山に居り、晉に仕へて戰沒すと、其實蹟の傳ふるもの僅に是のみ、然れども、靈異の顯、未だ此神の如きはあらず玄宗の南狩するや、神又た利州の桔栢津に見る、因て封して濟順王とし、帝親しく其廟に幸し、劍を解きて神に贈れり、其後宋の眞宗、詔して祠宇を修し、英顯王に追封す、理宗、神文聖武孝德忠仁王に封す、道家、上帝、梓潼の神に命じ、文昌府事及び人間祿籍を掌らしむと謂ふに基き、元の仁宗、輔元開化文昌司祿宏仁帝君を加封し、天下の學校亦た多く祠を立てゝ之を奉ず、史記天官書、斗魁、戴筐、六星を文昌と爲す、六星の第六を司祿と曰ふ、乃ち之に由りて文昌の神なるものを作り出し、之を人間に求め梓潼の張亞子に當てたるなり、後人之を以て科舉を司るの神と爲す實に此に本く、因に云ふ道家、文昌大洞經一卷、文昌孝經六篇、寶訓一篇あり、其書或は符籙咒訣を說き、或は因果應報の理を述ぶ、文詞、亦た科第と交涉するところ所沒し、然れども、道家者流、一び文昌宮を作り、其司祿の神たるを唱ふるに及び、天下爭ふて之を分祀するに至りては、此國人士の如何に科舉に熱中するかを想ふに足るべし、文昌宮の由來、大略斯くの如し、文昌神の科舉に關係せる一二の靈驗譚あれども、今は略しつ、

琅璫驛

玄宗鈴を聽く處

雨淋鈴

七曲山を下り行くこと二十清里、上亭鋪に至る、鋪、人家十に滿たざる山村なれども、古の琅璫驛は即ち此村にして、玄宗が蜀に向ふの途、雨中鈴聲を聞きける所なり、玄宗曩に貴妃を馬嵬に失ひ、仙仗蕭然、劍閣を度り、行く行く上亭に至る、彌旬の霖雨、尚ほ未だ霽れず、夜偶ま鈴聲の山を隔てゝ相應するを聞き、從臣黃旛綽に、鈴語、何と云ふやと問ふ、對へて曰く、三郎郎當と謂ふに似たりと、帝既に貴妃を悼む、因りて其聲を采り、雨淋鈴の曲を作り、以て恨を寄す、樂工張野狐從ふ、帝其曲を以て之に授けて奏せしむ、蓋し馬嵬の坡下と、上亭の驛とは、帝が南狩の途に在りて、最も心を傷しめたる處なり、至德中、玄宗復た華清宮に幸するに迨び、張野狐をして、再び此曲を奏せ

しむ、覺えず悽愴、流涕之を久うせりと云ふ、張祜が雨淋鈴の詩に曰く、雨淋鈴夜却歸秦、猶是張徽一曲新、長說上皇垂淚敎、月明南內更無人、

此邊一帶の山間、白茇甚だ多し、隴蜀餘聞に曰く、白茇花、白色五瓣、瓣中有苞、白質紫點、內吐黃鬚、極可玩と王士正又詩あり、武連縣南雲氣遮、郎當驛北石槎枒、西風盡日濛濛雨、開遍空山白茇花、

上亭を去る二十清里、演武店となす、古の沔陽戍是なり、又行く五清里、保寧府屬劍州の界に入る、又十五清里、瓦子舖を過ぎ、盤龍山を踰え、武連河を渡り、武連驛に達す、瓦子舖を去る十清里とす、梓潼縣を距る八十清里、武連驛往昔は獨立せる一縣なりしが、元に至り、廢して驛となせり、驛北、覺苑寺あり、唐の貞觀中建つ、當時、規制宏敞、佛殿畫壁、金碧眼を射るの觀ありしが、今は衰頽して言ふに足らず、寺中顏眞卿が逍遙樓の三大字碑あり、字大さ尺餘、鐵畫雄勁、最も珍とすべし、又陸放翁宿武連驛詩碣、及び二三の宋碑あれども、其字皆獻賊に毀損せられ、今僅に殘石を存せり、

白茇花

覺苑寺

武侯坡

第八日　武連驛を發す、驛外長阪あり、之を武侯坡となす、武侯祠、坡上に在り、相傳ふ、武侯師を出す、常に此に憩ふと、二十清里垂泉舖に至る、又二十清里垂泉山を踰え、明の兵部尙書趙炳然が墓側を過ぎ、柳池溝を經、十清里を進み、講書臺に至る、此地、宋の黃兼山、讀書の處、兼山名は裘、劍州の人、宋の乾道中の進士なり、官、朝請郎に至る、卒して忠文と謚す、朱熹を光宗に勸めて、第一等の人と稱せるは、即ち此人なり、亦た張南軒呂東萊の流亞と爲す、又十清里梁山舖に至る、又十清里、青涼橋を經、鶴鳴山を踰ゆ、山下重陽亭の遺蹟あり、唐の李商隱、之が銘を作れり、亭の南、唐の元結が中興頌の磨崖碑あり、其書顏眞卿に係る、按ずるに、中興頌の磨崖碑、湖廣祈陽縣浯溪口に在り、今亦た劍州此刻あるもの、豈に玄宗曾つて蹕を此に駐め、眞卿の生地、之を去る遠らざる武連に屬するが爲めなるか、又普翠山を踰え、劍州城に入る、武連驛を距る七十清里、梓潼の界より劍州に至る、古柏蔚然、翠陰路を覆ふ、其大數圍を過ぐるものあり、高さ皆雲を凌かんと欲す、眞に蜀道の奇觀なり、明の正德中州の太守李璧が植うる所と云ふ、

劍州

第九日　劍州城を出で、聞溪を渡り、二十清里にして抄手舖を過ぎ、石洞子山を登る、抄手舖より山頂に至る、十清里を隔つ、山を下る、一水あり石洞溪と曰ふ、又十清里漢源舖に至る、又五清里天然橋に至る、橋、山巔に在り、道路の歷るところ、平坦削る如く、其形、橋梁の若し、因りて天然橋と名く、又五清里青樹子に至る、又十清里五里坡に至る、巖に緣り數折して下ること五清里、劍閣に達す、

劍閣

姜維祠

將さに劍閣に近かんとす、小站あり劍關驛と曰ふ、驛を過ぐれば、蜀の大將軍姜維の祠あり、祠姜、維、軍を駐むるところに因りて建つ、祠後の山を劍閣と爲す、祠を去りて登る、峭壁中斷、兩崖相嵌するに逢ふ、一關其間に當る、劍關即ち是れなり、蜀恃むて以て外戸と爲す、故に又之を劍門と曰ふ、張載銘所謂一人嶮を守る萬夫趦趄す、實に此を指す、李特、曾つて嘆して曰く、劉氏此くの如きの險を挾む、而して人に面縛す、豈に庸才に非ずやと、劍關の在る所、即ち小劍山の連脈なり、大劍山其南に位す、綿亘三十清里、以て蜀の北邊を鎮す、山尖削銳、劍尖を列ぬるが如し、劍山の名ある所以なり、若し其險を言へば、大劍竟に小劍の敵に非ざるなり、其道路の如き、大劍險といふと雖も、小劍の石を鑿して梁を架し、閣を飛して道を成すと日を同うして語る可らず、劍關より北する十清里小劍溪を渡る、誌公寺溪前に在り、寺は即ち古の聖壽寺なり、又十清里、七里坡を經、又十清里高廟鋪を經て大木樹に至る、劍山此に盡く、劍州城を距る九十五清里、

劍閣

十六七里險峻萬夫趦趄

白衛嶺

第十日　大木樹より東北に進む、十清里にして白衛嶺に至る、嶺一に竹極子と名く、唐詩紀事に云ふ、玄宗蜀に幸し、白衛嶺に登り、眺覽良や久うし、李憐か詩を歌ひ、山川滿目淚沾衣の句に至り、嘆じて曰く、憐は眞に才子なりと、嶺を下り、東十五清里、又一

劍閣山　和田氏撮影

山に逢ふ、之を牛頭山と爲す、峰凡そ五六、人馬登るもの皆天を仰ぐ、頂に立ちて四顧す、群山其下に在り、猿鳥蹟絶え、風雲之に通ず、仰いて白日を視る、手捫づ可きが如し、高きこと鳳嶺に等しくして、險峭實に之に什倍す、滿山橡林、他樹極めて鮮し、嶺を踰ゆれば、一關山麓に在り、之を天雄關と爲す、關東十一清里、蜀の費肆か墓を經て、昭化縣城に至る、

費肆か墓 昭化縣

桔柏津 廣元縣

城東五清里、白水を踰ゆ、其濟を桔柏津と爲す、即ち嘉陵江と會する處、白水一名桓水、禹貢の西傾、因桓、是なり、桔柏津の東北三十五清里にして廣元縣城に至る、大木樹を距る七十五清里、城、嘉陵江の東に在り、廣元、古の利州城なり、明に至り降りて縣と爲る、廣元、北蜀の終縣に屬し其地四會五達の衝に當る、縣より南せば、保寧、潼川よりして、成都に達し、縣より西せば劍門綿漢より成都に達すべし、昔時土富み人和するの稱あり、唐の歐陽詹益昌行(益昌は廣元の古名)以て其一班を見るに足る、

皇澤寺

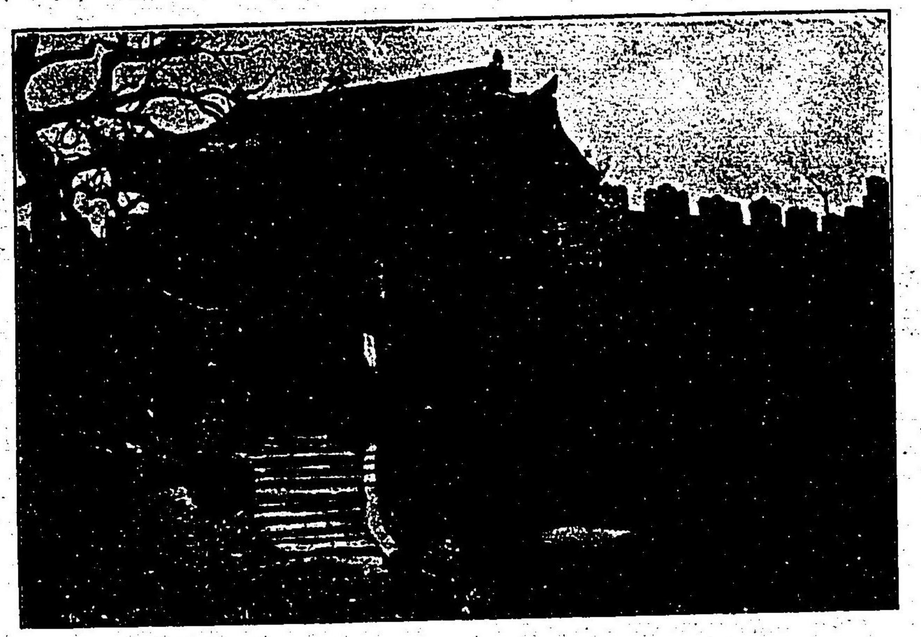
則天武后の生地

城西、江の西岸、皇澤寺あり、內、則天武后の石像あり、其像一比邱尼となす、唐時、唐士彥利州に鎮たる時、則天を生む、時に表天罡朝天關に至り、利州、王氣あるを見る、至れば王氣その館に在り、因て士彥に謁して曰く公貴嗣を得たり、請ふ之を視んと、士彥曰く、女なり、表曰く、龍眉鳳目、異日當さに天子たるべしと、後ち果して武后政を秉れり、

皇澤寺は則ち武后の建つるところなり、

第十一日　廣元縣城を出で、北行十清里、千佛崖に至る、即ち古石櫃閣なり、崖、江の東岸に在り、足載するところ棧道を架す、佛像悉く刻して、崖面に在り、唐時、利州の刺史韋杭が鑿する所なり、佛像の數、枚舉に堪ゆ可らず、其形狀亦た異樣百出、一一記し難し、唐の蘇頲利州佛龕記あり、千佛崖を過ぎ、三十清里、金龍嶺を達り、乾龍洞を經て、飛仙嶺に至る、嶺一名威鳳山、三面、江を環し、峭壁千仞、削り成すが如し、山上祠宇あり、飛仙觀と名く、其下は則ち飛仙閣にして、經行の大路に屬す、亦た棧中の險處とす、飛仙嶺より東する十清里、沙河驛に至る、驛一名望喜驛、唐の李義山の詩、嘉陵江水此東流、望喜樓中憶閬州、是なり、又十五清里、望雲舖を經、十五清里、朝天嶺に至る、廣元縣を距る八十清里、嶺、嘉陵江の東岸に在り、兩崖谷高さ數百尺、削立關門の如し、名けて朝天峽と曰ふ、又一に明月峽と稱す、此岸の壁下、水に近き處、無數の石竇を穿つ、深さ約五六寸、皆昔人崖に緣り棧を架するの址に屬す、對岸懸泉數條、江を隔てゝ之を望む、玉屑の如く、匹練の如し、嶺に循ひて登る、石磴空に盤し、下直に江水に臨む、紆曲九折、險實に鷄頭鳳嶺に數倍す、出蜀第一の阨塞たり、

朝天嶺を踰え朝天鎭に至る、鎭、江岸に在り、小聚落となす、古嘉川廢縣の地なり、朝天



蜀道朝天關
和田氏撮影

鎮より廣元昭化地方に赴く、水、舟を行るべく、陸、騎を通すべし、南より上る者、江を沂るに當り、舟を牽く極めて難きを以て、多く陸路に從ふ、北より下る者、朝天の險峻、登陟易からざるを以て、多く水路を取るなり、朝天鎮より朝天嶺を挾むて昭化に至るの間、所謂嘉陵山水の最なるもの、玄宗蜀より回るの後、李思訓吳道子の二人に命じて、谷之を大同殿の壁に畫かしむ、道子曰く臣、粉本無し、但だ記、心に在りと、即筆を援いて之を圖す、嘉陵三百里の山水、一日にして成る、思訓亦畫く、累月方めて畢る、帝曰く、思訓數月の工、道子一日の蹟、各其妙を極むと、王維又た素絹を用ゐて之を圖せり、名けて小簇と謂ふ、宋時王屋道爲めに詩を作りて曰く、江山已暗大同殿、絃管猶喧凝碧池、別寫嘉陵三百里、右丞心事與誰知と、

嘉陵の山水

第十二日　朝天鎮より東北に進む二十五清里、一峻山に至る、龍洞背となす、龍洞背一名葱嶺、山中石穴あり、高さ數十丈、其狀門の如し、因て又た號して龍門山と稱す、潛水其中に奔注す、聲甚た厲、水、山腹を穿ちて出で、西南流して嘉陵江に入る、一路嶺上に通ず、架するに閣道を以てす、之を龍門閣と謂ふ、此閣、石壁斗立、架するところの木、皆石竅の上に在り、其險他所に比すれは更に甚し、登りて頂に至る、四望の諸山、劍鋩戟牙の如し、下路凡そ五清里、再ひ黃荆嶺を踰え、又五清里にして神宣驛に至る、驛、古

龍洞背

神宣驛

名籌筆驛、諸葛武侯師を出す時、常に軍を駐めて籌畫せしところと云ふ、二十五清里、

七盤嶺

第十三日　轉頭舖より十清里、木塞山、新開嶺を踰え、七盤嶺に至る、一名五盤嶺、杜詩五盤雖云險、山色佳有餘、是なり、道旁小心移步の四字を題せる碑あり、登路皆石磴、盤旋七折、始めて其巔に達す、山名の由るところなり、山北を陝西省屬と爲す、即ち秦蜀の界、限るに七盤嶺を以てす、嶺を去る五十清里、陝西寧羌州城に至る、轉頭舖を距る六十清里、

秦蜀の界

寧羌州より西安府(長安)に至る、大約一千二百餘清里、凡そ十四日程と爲す、過ぐるところ、二府、八縣、一廳、即ち沔縣、漢中府、褒城縣、留壩廳、鳳縣、鳳翔府、岐山縣、扶風縣、武功縣、興平縣、咸陽縣是なり、

驛程記拜見、成都より七曲を經て、北七盤關に至る、八百有餘里、程を逐ひて、景を叙し、史を說く所、身親しく經歷せしものといへども、遠く及ばざるもの有之、はからず曾遊を回憶して、蜀棧の山容水色を燈前に幻出せしめ申候草々

辱知　和田喜八郎

己酉正月

鹿頭山　唐　杜甫

鹿頭何亭亭、是日愁飢渴、連山西南斷、俯見千里豁、遊子出京華、劍門不可越、及茲險阻窘、始喜原野濶、殊方昔三分、霸氣曾間發、天下今一家、雲端失雙闕、悠然想揚馬、繼起名碑兀、有文令人傷、何處埋爾骨、紓餘脂膏地、慘澹豪俠窟、仗鉞非老臣、宣風豈專達、冀公柱石柱、論道邦國活、斯人亦何幸、公鎭蹤歲月、

鹿頭關　宋　趙抃

東南再守二年間、徒囑何須問險艱、入覲已違龍尾道、出塵還過鹿頭關、與民共約三春樂、顧我都忘兩鬢斑、歲滿乞骸何處好、仙碁一局爛柯山、

龐靖侯墓　宋　陸游

士元死千載、淒惻過遺祠、海內常難合、天心豈易知、英雄千古恨、父老歲時思、蒼蘚無情極、秋常滿斷碑、

羅江驛　唐　唐彥謙

數枝高柳帶鳴鵙、一樹山榴自落花、已自向來多淚眼、短亭回首在天涯、

魏城逢故人　唐　羅隱

一年兩度錦江遊、前值東風後值秋、芳草有情皆礙馬、好雲無處不遮樓、山將別恨和心斷、水帶離聲入夢流、今日因君試回首、澹烟喬木隔綿州、

翠望亭　宋　陸游

撲馬征塵擺不開、高亭欹帽一徘徊、蜀山地暖稀逢雁、閏歲春遲未見梅、陂水近人無鷺下、烟林藏寺有鐘來、宋公出牧曾題壁、錦段雖殘試剪栽、

梓潼道中　明　楊慎

小市孤烟起、平岡落日斜、素林驚夕鳥、錦石戴寒花、悵別關河晚、凭高眺望賒、上亭今夜月、流影夢還家、

梓潼道中曉行　清　沈聯芳

北郭誰司筦、東方夜未央、寒烟迷五嶠、霖雨憶三郎、處處山鷄舞、聲聲謝豹忙、平蕪行已盡、穩步上崇岡、

郎當驛雨中　清　王士正

金鷄賜帳事披猖、河朔從茲不屬唐、却使青驢行萬里、二郎當日太郎當、

武連縣南雲氣遮、郎當驛北石槎枒、西風盡日濛濛雨、開遍空山白茂花、

上亭驛　清　沈聯芳

細雨微風過上亭、海棠零落霧冥冥、不知當日野狐曲、可作霓裳一樣聽、

早上五盤嶺　唐　岑參

平旦驅駟馬、噴然出五盤、江廻兩岸闊、日出群峯攢、蒼翠烟景曙、森沈雲樹寒、松疎驚孤驛、花密藏廻灘、棧道溪雲滑、畬田原草乾、此行爲知己、不覺蜀道難、

五盤　唐　杜甫

五盤難云險、山色佳有餘、仰凌棧道細、俯映江水疎、地僻無網罟、水淸反多魚、好鳥不妄飛、野人半巢居、喜見淳樸俗、沮然心神舒、東郊尙格鬬、巨猾何時除、故鄉有弟妹、流落隨邱墟、成都萬事好、豈若歸吾廬、

劍南古柏行　清　沈聯芳

劍南大道多古柏、兩行夾立森寒碧、大者圍可十人抱、小者高亦數百尺、挺如老虬爪甲張、怪如山鬼鬚眉磔、又如翠蓋交千重、落雨不漏水涓滴、蟠根負石橫半崖、有若巨蟒出巖隙、行人過此休屐陰、夏無苦日冬無霖、槎枒撐突禁翦伐、甘棠蔽芾留遺音、古來道旁多種柳、種柳斯意非不厚、只恐秋風過短亭、落花飛絮將無有、君不見灞陵橋影蕭蕭、攀條贈別最多事、離心綰繫增忉忉、洵知種柳盈綺陌、不如種柏有餘益、種柏猶得耐歲寒、種柳徒媚春風色、試看關前行路人、何人不解懷李璧、

上皇西巡南京　唐　李白

煙塵輕拂建章臺、聖主西巡蜀道來、劍壁門高五千仞、石爲樓閣九天開、

猶陽春樹似新疊、行入新都若舊宮、柳色未饒秦地綠、花光不減上林花、

劍閣重關蜀北門、上皇歸馬若雲屯、少帝長安開紫極、雙懸日月照乾坤、

宿武連驛　宋　陸游

平日功名浪自期、頭顱到此不難知、官情薄似秋蟬翼、鄉思多于春繭絲、野店風霜俄裝早、懸橋燈火下程遲、寒鞭熟手戎衣窄、忽憶南山射虎時、

劍門道中遇微雨

衣上征塵雜酒痕、遠遊無處不銷魂、此身合是詩人末、細雨騎驢入劍門、

劍門城北回首望劍關峯青入雲漢、感蜀亡事慨然有賦

自昔英雄有屈信、乘機變化亦逡巡、陰平窮寇非難禦、如此江山坐付人、　宋　趙抃

倚劍巒峯插太虛、高門中關限坤隅、奸雄莫謂關防險、一百年來自坦途、

劍閣道　唐　李德裕

奇峯百仞懸、清眺出嵐烟、廻若戈揮日、高疑劍倚天、參差霞壁發、合沓翠屏連、想是三刃夢、森然在目前、

桔柏津　唐　杜甫

青冥寒江渡、駕竹爲長橋、竿濕烟漠漠、江水風蕭蕭、連笮動嬝嬝、征衣颯飄颻、急流鶴鴉散、絕岸龍蛇驕、西轅自茲異、東逝不可要、高通荆門路、濶會滄海潮、孤光隱顧盼、遊子恨寂寥、無以洗心胸、前登但山椒、

桔柏津　明　楊慎

桔柏古時渡、江流今宛然、名存巴國志、詩有杜陵篇、鶴鶴銜烟散、鼉鼉抱日眠、分留除物色、朗詠惜高賢、

重陽亭　明　盧雍

鶴鳴峯翠合、波光、片石遺文發秘藏、萬古溪山此亭子、百年風日自重陽、黃花儘肯留人醉、白髮偏宜落帽狂、今昔休論幾眞賞、吟餘雙劍倚天長、

利州南渡　唐　温庭筠

澹然秋水對斜暉、曲島蒼茫接翠微、波上馬嘶看棹去、柳邊人歇待船歸、數叢沙草群鷗散、萬頃江田一鷺飛、誰解乘舟尋范蠡、五湖烟水獨忘機、

皇澤寺　明　陳山甫

寺勝皇澤、何皇澤、鄉標則天緣、則天、都督當年此開府、生兒長女經幾年、帝妃以降事非偶、後來虐燄知無前、早披汗簡唾未已、穢督猶自蒙山川、我聞天網最神鑑、奉詔北走聊停驂、

錦堂延納廻朗照、慶爽韓國俱別甄、罌也在抱鑿頭角、龍頷鳳頸驚昂然、爾時長袗抢蘆質、步下已覺生金蓮、神采翩翩轉澄澈、更評相比庖羲妍、登車尙訝縣弧者、他年晨牝覺應延、椒房一入王氣鬱、淳風占在花鈿邊、珠翠群中隱劍鍔、那知轉盼生戈鋋、黃臺瓜蔓半搖落、虞淵取日誰旋乾、當時己卜唐祚缺、遲廻稔禍嚮其愆、乃知識數自眇少、鵲巢麟趾充遐編、我來山寺一訪古、瑤簪零落名空傳、暮靄朝雲幾變幻、乾陵歲歲聞啼鵑、

皇澤寺　清　王士正

瓦官寺裡定香薰、詞客曾勞記錦裙、今日闌橈碧潭上、玉溪空自怨行雲、

廣元舟中聞棹歌　清　李調元

江上渝歌幾處聞、孤舟日暮雨紛紛、歌聲漸過烏奴去、九十九峯多白雲、

費敬侯墓　唐　武元衡

器重邦鄰使節頻、唯公不負股肱臣、鹿車共載眞名士、虎帳彈棊信可人、只有叔龍堪作侶、誰知黃鶴是前身、成都望氣成先讖、千載空教恨郭循、

題嘉陵驛　唐　雍陶

悠悠風旆繞三川、山驛空濛雨似烟、路半嘉陵頭已白、蜀門西更上青天、

宿嘉陵驛　唐　雍陶

離思茫茫正值秋、每因風景卻生愁、今宵難作刀州夢、月色江聲共一樓、

嘉陵江　明　楊愼

嘉陵江水向西流、亂石驚灘夜未休、巖畔蒼藤懸日月、崖邊瑤草記春秋、板居未變先秦俗、刳木從疑太古舟、三十六程知近遠、試憑高處望刀州、

又題嘉陵驛　唐　薛能

江濤千疊圍千層、銜尾相隨盡室登、稠樹蔽山聞杜宇、午烟蒸日食嘉陵、頻題石上程多破、暫歇泉邊起不能、如此幸非名利切、益州來日合携僧、

過朝天嶺　唐　杜甫

雙壁相參萬木深、馬前猿鳥亦難尋、雲容杳杳斷鴻意、風色蕭蕭行客心、山若畫屏隨峽轉、水如衣帶繞巖陰、生平來往成何事、且倚鉤欄擁鼻吟、

石櫃閣　唐　杜甫

季冬日已長、山晚半天赤、蜀道多早花、江間饒寄石、石櫃層波上、臨虛蕩高壁、清晨回群鷗、瞑色帶遠客、藏棲負幽意、感嘆向絕迹、信甘孱懦嬰、不獨凍餒迫、優游謝康樂、放浪陶彭澤、吾衰未自由、謝爾性所適、

龍門閣

清江下龍門、絕壁無尺土、長風駕高浪、浩浩自太古、危途中縈盤、仰望垂綫縷、滑石欹難駐、
浮梁島相拄、目眩隕雜花、頭風吹過雨、百年不敢料、一墜那能取、飽聞經猖唐、足見度大度、
終身歷險艱、恐懼從此數、

籌筆驛　唐　嚴惲

江東矜割據、鄴下奪孤姦、覇略非匡漢、宏圖欲佐誰、奏書辭後主、伏仗出全師、重壘褒斜路、
懸開反正旗、欲將苞有截、必使舉無遺、沈盧經謀際、揮毫決勝時、圖觚當分畫、前箸此操持、
山秀扶英氣、川流入妙思、算成功在彀、運去事終虧、命屈天方歷、人亡國自隨、艱難推舊姓、
開刱極初基、總嘆曾過第、寄探作教姿、若歸新歷數、誰復顧衰老、報德兼明道、長留識者知、

籌筆驛　宋　石延年

漢室虧皇象、坤乾未即寧、姦臣與逆子、搖嶽復翻溟、檄表分江域、曹袁鬬夏坰、虎奔咸逐逐、
龍臥獨冥冥、從衆非無術、欺孤迺不經、惟思恢正道、直起復炎靈、管樂韜方略、關徐駭視聽、
一言俄遇主、三顧已忘形、南既清蠻土、東期赤魏庭、出師功自著、治國志誰銘、歷劍兵如水、
臨秦策若瓴、舉聲將潰膚、橫勢欲逾經、仲達耻巾幗、辛毘嚴壁局、可須親細務、遽見墮長星、
戰地悲陵谷、來賓稱德刑、意中流水遠、愁外蒼山青、想像音徽在、侵尋毛骨醒、遲留慕英氣、
沈欺撫青萍、

蜀道難　唐　李白

噫吁嚱危乎高哉、蜀道之難難于上青天、蠶叢及魚鳧、開國何茫然、爾來四萬八千歲、不與
秦塞通人烟、西當太白有鳥道、可以橫絕峨眉巔、地崩山摧壯士死、然後天梯石棧相鉤連、
上有六龍回日之高標、下有衝波逆折之回川、黃鶴之飛尚不得過、猿猱欲度愁攀援、青泥
何盤盤、百步九折縈巖巒、捫參歷井仰脅息、以手撫膺坐長歎、問君西游何時還、畏途巉岩
不可攀、但見悲鳥號古木、雄飛雌從繞林間、又聞子規啼夜月、愁空山、蜀道之難難于上青
天、使人聽此凋朱顏、連峯去天不盈尺、枯松倒挂倚絕壁、飛湍瀑流爭喧豗、砯崖轉石萬壑
雷、其險也如此、嗟爾遠道之人、胡爲乎來哉、劍閣崢嶸而崔嵬、一夫當關萬夫莫開、所守或
匪親、化爲狼與豺、朝避猛虎、夕避長蛇、磨牙吮血、殺人如麻、錦城雖云樂、不如早還家、蜀道
之難難于上青天、側身西望長咨嗟、

蜀難易　明　方孝孺

序曰、唐李白作蜀道難、以譏將師之酷虐、厥後韋皋治蜀、陸暢反、其名作蜀道易、以
美之、今其詞不傳、伏惟今天子以大聖御極、殿下以睿哲之姿爲蜀神、明主臨國以
來、施惠政崇文教、中外同聲稱頌、四方萬里之外、水浮陸走、無有寇盜、商賈駢集如
赴鄉閭、蜀道之易、于斯爲至矣、臣才雖不敢望白、而所遇之時、白不敢望臣也、因奉

敘作蜀道易一篇以述壁上及賢王之德名雖褒揚而詞無溢美頗謂過之、

美矣哉西蜀之道何今易而昔難陸有重岩峻嶺萬仞鑱天之險閣水有砯雷掣電懸流怒號之江關自昔相戒不敢至胡爲乎今人操舟秣馬夕往而朝還大聖建皇極王道坦坦如弦直西有彫題鑿齒之夷北有氐羌椎髻之貊東南大海際天地島居州聚千萬國莫不奉琛執贄効朝貢春秋使者來接迹何況川蜀處華夏賢王于此開壽域播以仁風沾以義澤家和人裕稾兵歛革豺狼變化作騶虞蛇虺消藏回蜥蜴鑿山焚荒穢略水剷崖石帆檣扇覆任所往宛若宇宙重開闢美哉蜀道之易有如此四方行旅絡繹來成都萬室比屋如雲桑麻蔽原野鷄犬聲相聞文翁之化孔明之仁嚴鄭之節揚馬之文遺風漸被比鄒魯士行修舉方回參方今況有賢聖君大開學館興墳典坐令致化希華勳徵賢一詔到岩穴咄爾四方之士孰不爭先而駿奔王道有通塞蜀道無古今至險不在山與水只在國政並人心六朝五季時王路嗟陸況遂令三代民盡爲獸與禽當時豈惟蜀道難八荒之內皆晦陰今逢天子聖賢王之德世所欽文教洽飛動風俗無邪淫孱夫弱婦懷千金悍吏熟視不敢侵蜀道之易諒在此咄爾四方來者不憚山高江水深、

七盤關

清　方象瑛

鷄頭關前七盤嶺蚓曲蛇蟠纔見頂氐中又復度七盤詰屈紆廻勢相引層崖邃谷路轉通拾級忽見雲霞空郤怪頂觸前人趾不知舉膝當心胸崒嵂心息魄詫奇絕萬里山川風景別一關中斷隴蜀分羌笛渝歌乍相接遙望川巴萬點明白雲紫路逗縱橫鱗鱗彷彿峩眉雪不知何處錦官城北望京華南望越懷人兩地情偏切今朝身入大荒西涼風古驛中秋月、

分水嶺

唐　吳融

兩派源溪不暫停嶺頭長瀉別離情南隨去馬通巴棧北逐歸人達渭城澄處好窺雙鑑影咽時堪寄斷腸聲紫溪舊隱還如此清夜梁山月更明、

劍門關

五代　韓昭

閉關防老寇孰敢振威稜險固疑天設山河自古憑三川奚所賴雙劍最堪矜鳥道微通處烟霞鎖百層、

朝天峽

清　王士正

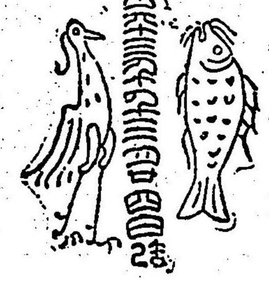
朝登嘉陵舟日出羌水赤履險倦鞍馬即次亦稱適戰瞿雙峽來突見巨靈跖嶄巖然寸廣青冥竭雙翮陰崖積龍蛻跳波畏鯨擲往往壓人頂駭此欲崩石洞穴峽半開兵氣尚浪藉蛇豕據成都置戍當險阨至今三十年白骨滿梓益流民近稍歸天意厭兵革會見寶盧人燒舍開礪碪慷慨一控絃浩歌感今昔風便黎州城茫茫波濤白、

和杜相公發益昌

相國臨戎別帝京、擁麾持節遠橫行、朝登劍閣雲隨馬、夜渡巴江雨洗兵、山花萬朵迎征蓋、川柳千條拂去旌、暫到蜀城應計日、須知月主蜀持衡、

至黃瀾驛短歌　　清　王士正

氐道森波十日雨、石林冥冥斷行旅、洪濤殷地四山動、古折盤渦禁難語、前有蝮蛇後豺虎、紅鶴哀號奮毛羽、吾生胡爲狎此曹、命輕如毛爭一縷、妻孥飄泊寄京國、欲歸不歸在何所、鄉關廻首四千里、縱有苦辛誰告汝、



洪永元鯉魚洗

文曰永元十三年三月廿四日記

峨眉山遊記

峨眉山は嘉定府峨眉縣に在り、成都を去る、西南凡五百清里、其山三峯首を大峨と曰ひ、次を二峨と曰ひ、次を三峨と曰ふ、古來北蜀の岷山と併せて、岷峨の稱あり、翅に蜀中の名山のみならず、實に支那三名山の一なり、三峨の中、大峨尤も高し、海拔大約一萬尺に近しといふ、余が此行明治三十八年七月に在り、月の十七日を以て成都を發し、翌八月五日を以て還る、往路成都東門外より岷江を下り、嘉定府に至りて船を棄て、陸行して山に至る、復路、專ら陸程に從ひ、峨眉縣より夾江縣、眉州、彭山縣、雙流縣を經て成都南門に入る、同行京文學室教習大野愼氏、遊歷木田鉄次氏、從ふ者、轎夫六人、挑夫共に五人、兵一人、

成都府より嘉定府に至る

成都を發す

七月十七日　早朝東門外に至る、昨日雇ふところの船、已に艤して大碼頭に在り、船共に二隻、一は乘用に充て、一は裝貨に供す、每隻老板一人、水夫四人、已に乘る、爆竹數聲、即ち纜を解く、夏水高漲、舟輕きこと葉の如し、九眼橋を過ぎ、間も無く望江樓に至る、暫く舟を寄せ、上陸して薛濤井を汲む、望江樓以下、未見の地に屬す、眼界これより漸く新なり、江、平蕪の間を流る、不斷の野風、江を掠めて吹く、午後四時傳家壩を下り、

古佛洞に泊す

六時古佛洞に達す、泊す、

古佛洞に入る

古佛洞、西岸に在り、小邑なり、邑、江に臨み、小山を負ふ、山腹窟あり、其中古佛甚だ多し、因て以て地名となす、日未だ暮れざる間にと、急ぎ上陸して其所謂古佛洞を訪ふ、左行三四町にして洞處に至る、沿途肆店相屬し、往來雜沓、絶えて江村寥落の趣を見ず、洞、道右に在り、衙然として一巨門を成す、磴數級、方めて其内に入る、洞廣さ數十人を立たしむべし、其名に違はず、左右上下、佛像ならざるは無く、而して大半兩壁に刻するところなり、普賢の大像、面に中りて立つ、胸より以上、隱れて認む可らず、約ね計るに高さ丈餘を超ゆべし、長手五尺餘なるもの、斜に其兩旁より出づ、指を伸して掌を開けるさま、謂れ無くては叶はじ、洞中最も人を驚すものは此一像なり、其の餘諸像石なるは、多く岩壁に刻し、銅及び木なるは、大抵地上に雜陳せり、若し其形貌を言へば、笑ふ者、怒る者、額を蹙めて愁ふるが如き者、肱を枕して地に臥する者、雲に駕して虚空を飛ふに似たる者、腹を捧げて趺坐する者、全然群佛の會なり、左壁の上端に一竅ありて、危げなる梯子を架せり、登りて其上に出づるに、又一洞あり、此處にも許多の佛像を陳ぬ、其奇と數と、皆前に及ばず、更に一洞其上に在り、之を頂層とす、中央に木もて作れる靈鷲山の模形を置く、佛豫は其旁に數軀を安んずるのみ、洞の形狀、決して天成に非らざるは明なれども、創開の時代未だ詳かならず、頂洞の口、軒開して門の如し、植うるに木欄を以てせり、欄に倚りて外を望む、江村の暮色、收めて一眸に在り、

舟に歸れば、日全く暮る、國旗を撤して、大日本と記せる赤提燈を船首に掲ぐ、大日本の三字あたりを拂つて凜凜しき心地せらる、此日は陰曆十五日なり、夜に入りて、天少しく陰り、雨意さへ加はりたれど、時有りて月斷雲の間に現はるれば、江はさながら金蛇を奔らすが如し、一同舳先に出懸け、萬解の涼風を納れ、明日明後日の行程を語り、更聞くる頃ひ、はじめて艙内に入る、

十八日　午前四時舟を發す、十五清里にして黄泥溪を經、又十六清里、半邊街に至る、泊すべし、此邊盜多きを以つて、一隻の砲艙を碇泊して之を警戒せり、半邊街を下る十二清里、江口に至る、街市の大、古佛洞に數倍す、地、匪徒多し、又水師を置きて不虞に備ふ、凡そ江間を上下する諸舟、必ず其票識を水師に示すに非ずば、通行するを許されず、成都より下りて此度に至れば、新津、崇慶方面、及び成都城北より來る諸水滙合して一江となるを以て、河面急に廣まり、水身亦た俄に深く、險流巨濤、舟人甚だ寒心す、江口より下る十清里、彭山縣下を歷、縣城、江を去る南約六清里に在り、鍋敏灘、太和